西原古墳群

K5

——粕川工業団地造成に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書——

1985

群馬県勢多郡粕川村教育委員会

序　　文

粕川村におきましては，昭和57年より県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。その間，数多くの貴重な遺跡が調査されるとともに，そこから出土した遺物は，膨大な量に及んでおります。わたくし共はこれらの貴重なる先祖からのメッセージを如何に後世に伝え，今日のわたくし共の生活に如何に反映し，活用していくのかが今後のわたくし共の大きな課題であると考えております。

今回ここに報告する「西原古墳群」は，粕川村の活性化を計るという目的で工場の誘致を行った東京Ｉ．Ｃ赤城工場の建設に先立つ粕川工業団地の造成に伴う発掘調査として粕川村教育委員会が調査を実施したものです。調査では15基からなる古墳群や古墳時代の住居跡等が検出されています。そして，さらに今回の調査において最も相応しい発見として古代の製鉄に拘わる木炭窯が検出されたことをあげることができます。このことは，ここの地が古代において工業地帯であった可能性を非常に強く示唆しており，その地に再び今，工業団地ができるというのはこの地域の持つ特性というか個性のようなものということができるのかもしれません。このことこそ古代と現在を繋ぐ一つの細い糸であるのかもしれないのです。

本報告書の刊行に際して，発掘調査から整理に到るまでの間，県文化財保護課を始め県企業局，村当局の物心両面にわたっての御指導，御協力に対し厚くお礼申し上げ，この調査報告書が多くの方々に有効に活用されることを念じ序といたします。

昭和60年３月10日

粕川村教育委員会

教育長　金　井　久　雄

例　　言

1．本書は昭和59年度粕川工業団地造成区域内に係る埋蔵文化財の発掘報告書である。
2．本報告の遺跡は西原古墳群と呼称する。遺跡略称はＫ５である。
3．遺跡は群馬県勢多郡粕川村深津字西原1887－８番地他に所在する。
4．発掘調査は群馬県企業局の委託を受けて粕川村教育委員会が直営で実施した。
5．調査は昭和59年３月２日より７月10日まで実施した。
6．本遺跡からの出土資料は総て粕川村教育委員会の管理の元で保管している。
7．調査は粕川村教育委員会社会教育係文化財担当の小島純一が担当し，調査員として竹内　寛の協力を得た。
又，調査参加者は下記のとおりである。
天田民男　石橋十三三　大川富作　笠原磯寿　金子金三郎　北爪義美　光山　厳　小竹松太郎　定方永伯　正田五郎　須藤重沖　須藤仁一　瀬戸徳三　武石長太郎　田村富太郎　中里太市　長瀬信吉　根岸利久　根岸英雄　深沢正作　船戸金治　船戸正三　松村静三郎　松村昌宣　宮田孝一　諸星岩男
石川紀恵　小沢富江　恩田ハツノ　須藤みち　常見みね子　長瀬トモ　長瀬久子　中野ヒロ子　船戸たけ　八坂てる
8．遺物の整理及び本書の作成にあたっては下記の者があたった。
編　　集　　小島純一
本文執筆　　Ⅲ－２のみ　竹内　寛が執筆し，他は小島による。
図版作成　　笠原嘉子　鈴木幸子　中島あぐり　古沢てい子　笠原仁史　大塚義久　㈱測研
写真撮影　　遺構写真は小島と竹内があたり，遺物写真については，竹内と中央航業株式会社　武田　勉による。
9．本遺跡の調査から本書の作成にわたって下記の方々から御指導、御助言を賜った。
記して感謝の意を表します。
赤山容造　石塚久則　井上唯雄　内田憲治　梅沢重昭　柿沼恵介　坂爪久純
鹿田雄三　能登　健　前原　豊　右島和夫　山下歳信

凡　　例

1．各遺構の実測図の縮尺は下記のとおりである。
全体図……１／1500，古墳墳丘図……１／120（但しＦ－１号墳のみ１／240），石室図……１／40，住居跡……１／60，竈平面図……１／30，土壙……１／60，木炭窯……１／120
2．遺物の実測図の縮尺は下記のとおりである。
埴輪……１／４，土器……１／３（但し，須恵器の大甕は１／６，縄文土器７／10）
鉄器……１／２（但し，直刀のみ１／４）
3．スクリントーンの使用は図に凡例がない限り次のようである。
住居平面図……　焼土　　各断面図……Ｂ軽石
地山

目　　次

序　　文　　粕川村教育委員会教育長　金　井　久　雄
例　　言
凡　　例
本文目次
表 目 次
挿図目次
図版目次
付表目次

本 文 目 次

Ⅰ．発掘調査の経緯……1
　1．発掘調査に至るまで
　2．発掘調査の経過
Ⅱ．西原古墳群の位置と周辺の遺跡……3
　1．遺跡の位置
　2．周辺の遺跡
Ⅲ．検出された遺構と遺物……7
　1．古墳群の調査……7
　　(1)　F－1号墳……7
　　(2)　F－2号墳……17
　　(3)　F－3号墳……19
　　(4)　F－4号墳……23
　　(5)　F－5号墳……27
　　(6)　I－1号墳……29
　　(7)　I－2号墳……32
　　(8)　I－3号墳……34
　　(9)　I－4号墳……40
　　(10)　A－1号墳……41
　　(11)　D－1号墳……43
　　(12)　D－2号墳……46
　　(13)　E－1号墳……47
　　(14)　E－2号墳……49
　　(15)　B－1号墳……51
　2．住居跡の調査……55
　　(1)　IH－1号住居跡……55
　　(2)　IH－2号住居跡……56
　　(3)　HH－1号住居跡……57
　　(4)　HH－2号住居跡……58
　　(5)　HH－3号住居跡……59
　3．その他の遺構と遺物……60
　　(1)　C区円形土壙……60
　　(2)　I区古墳前庭部出土の縄文土器……60
　　(3)　H区木炭窯……63
Ⅳ．調査の意義と問題点……68

表目次

第１表　発掘調査進行表　2

挿図目次

第１図　西原古墳群の位置と周辺の遺跡　4
第２図　西原古墳群全体図　5．6
第３図　Ｆ－１号墳墳丘図　7
第４図　Ｆ－１号墳石室展開図　8
第５図　Ｆ－１号墳閉塞部展開図　9
第６図　Ｆ－１号墳遺物実測図(1)　10
第７図　Ｆ－１号墳遺物実測図(2)　11
第８図　Ｆ－１号墳遺物実測図(3)　12
第９図　Ｆ－１号墳遺物実測図(4)　13
第10図　Ｆ－１号墳遺物実測図(5)　14
第11図　Ｆ－１号墳遺物実測図(6)　15
第12図　Ｆ－１号墳埴輪配置図　16
第13図　Ｆ－２号墳墳丘図　17
第14図　Ｆ－２号墳石室展開図　18
第15図　Ｆ－２号墳遺物実測図　19
第16図　Ｆ－３号墳墳丘図　20
第17図　Ｆ－３号墳石室展開図　21
第18図　Ｆ－３号墳遺物実測図　22
第19図　Ｆ－３号墳閉塞部展開図　22
第20図　Ｆ－４号墳墳丘図　23
第21図　Ｆ－４号墳石室展開図　24
第22図　Ｆ－４号墳遺物実測図(1)　25
第23図　Ｆ－４号墳遺物実測図(2)　25
第24図　Ｆ－４号墳遺物実測図(3)　26
第25図　Ｆ－４号墳床面図第２層　26
第26図　Ｆ－５号墳遺物実測図(1)　27
第27図　Ｆ－５号墳墳丘図　27
第28図　Ｆ－５号墳石室展開図　28
第29図　Ｆ－５号墳遺物実測図(2)　29
第30図　Ｉ－１号墳墳丘図　30
第31図　Ｉ－１号墳閉塞部展開図　30
第32図　Ｉ－１号墳石室展開図　31
第33図　Ｉ－２号墳墳丘図　32
第34図　Ｉ－２号墳石室展開図　33
第35図　Ｉ－２号墳遺物実測図　34
第36図　Ｉ－３号墳墳丘図　35
第37図　Ｉ－３号墳閉塞部展開図　36
第38図　Ｉ－３号墳石室展開図　37．38
第39図　Ｉ－３号墳遺物実測図　39
第40図　Ｉ－４号墳墳丘図　40
第41図　Ｉ－４号墳石室展開図　40
第42図　Ａ－１号墳墳丘図　41
第43図　Ａ－１号墳石室展開図　42
第44図　Ａ－１号墳遺物実測図　43
第45図　Ａ－１号墳床面図第２層　43
第46図　Ｄ－１号墳墳丘図　44
第47図　Ｄ－１号墳石室展開図　45
第48図　Ｄ－１号墳遺物実測図　46
第49図　Ｄ－２号墳墳丘図　46
第50図　Ｄ－２号墳石室図　47
第51図　Ｅ－１号墳墳丘図　48
第52図　Ｅ－１号墳石室展開図　48
第53図　Ｅ－１号墳遺物実測図　49
第54図　Ｅ－２号墳墳丘図　49
第55図　Ｅ－２号墳石室展開図　50
第56図　Ｂ－１号墳墳丘図　51
第57図　Ｂ－１号墳石室展開図　51
第58図　墳丘断面図(1)　52
第59図　墳丘断面図(2)　53．54
第60図　墳丘断面図(3)　53．54
第61図　墳丘断面図(4)　53．54
第62図　ＩＨ－１号住居址平面図　55
第63図　ＩＨ－１号住居址出土遺物　55
第64図　ＩＨ－２号住居址平面図　56
第65図　ＩＨ－２号住居址出土遺物　56
第66図　ＨＨ－１号住居址平面図　57
第67図　ＨＨ－１号住居址カマド実測図　57
第68図　ＨＨ－１号住居址出土遺物　57
第69図　ＨＨ－２号住居址平面図　58
第70図　ＨＨ－２号住居址カマド実測図　58
第71図　ＨＨ－２号住居址出土遺物　58
第72図　ＨＨ－３号住居址平面図　59
第73図　ＨＨ－３号住址カマド実測図　59
第74図　ＨＨ－３号住居址出土遺物(1)　59
第75図　ＨＨ－３号住居址出土遺物(2)　60
第76図　Ｃ区円形土壙平面図　60
第77図　土壙内出土遺物　60
第78図　西原古墳群出土の撚糸文土器　60
第79図　Ｈ区木炭窯平面図　61．62
第80図　１号木炭窯断面図　64
第81図　２号木炭窯断面図　65
第82図　３号木炭窯断面図　66
第83図　４号木炭窯断面図　67

図版目次

ＰＬ．１
　１．西原古墳群全景（北西より）
　２．Ｆ－１号墳全景（北より）
ＰＬ．２
　１．Ｆ－１号墳石室全景（西より）
　２．石室部閉塞状況
　３．石室部全景（閉塞除去後，北より）
　４．墳丘遺物出土状態
　５．遺物出土状態（人物埴輪）
　６．周溝及び墳丘土層断面
　７．円筒埴輪配列状態（東くびれ部）
ＰＬ．３
　１．Ｆ－２号墳全景（南より）
　２．石室部全景（東より）
　３．Ｆ－３号墳全景（南より）
　４．石室閉塞状況
　５．前庭部石積状況
　６．石室部左壁石積状況（東より）
　７．Ｆ－４号墳全景（南より）
　８．左壁及び遺物出土状況（東より）
ＰＬ．４
　１．Ｆ－５号墳全景（南より）
　２．石室部全景（西より）
　３．Ｉ－１号墳全景（南より）
　４．石室部閉塞状況
　５．石室部全景（閉塞除去後）
　６．石室部左壁石積状況
　７．石室部右壁石積状況
　８．前庭部正面
ＰＬ．５
　１．Ｉ，Ｆ区全景（南より）
　２．Ｉ－２号墳全景（南より）
　３．石室部全景（北より）
　４．石室部左壁石積状況（東より）
　５．石室部右壁石積状況（西より）
ＰＬ．６
　１．Ｉ－３号墳全景（南より）
　２．石室部全景（閉塞除去前）
　３．石室部開口状況（北より）
　４．前庭部正面
　５．閉塞状況
ＰＬ．７
　１．Ｉ－４号墳全景（南より）
　２．石室部正面
　３．Ａ－１号墳全景（南より）
　４．石室部全景（東より）
　５．石室部開口状況（北より）
ＰＬ．８
　１．Ｄ区全景（南より）
　２．Ｄ－１号墳石室部全景（東より）
　３．石室部正面
　４．Ｄ－２号墳全景（南より）
　５．石室部全景（西より）
ＰＬ．９
　１．Ｂ－１号墳全景（南より）
　２．Ｅ－１号墳全景（南より）
　３．Ｅ－１号墳石室部全景（西より）
　４．Ｅ－１号墳石室部左壁石積状況
　５．Ｅ－２号墳全景（南より）
　６．Ｅ－２号墳石室部全景（東より）
　７．Ｅ－２号墳石室部正面
　８．Ｅ－２号墳石室部開口状況（北より）
ＰＬ．10
　１．ＩＨ－１号住全景（東より）
　２．土層断面（北より）
　３．北壁より遺物出土状態（東より）
　４．遺物出土状態（埦）
　５．遺物出土状態（壺）
　６．ＩＨ－１号住内土壙遺物出土状態
　７．ＩＨ－２号住全景（南より）
　８．土層断面（北より）
ＰＬ．11
　１．Ｈ区遠景（東より）
　２．Ｈ区住居全景（北より）
　３．ＨＨ－１号住全景（西より）
　４．土層断面（南より）
　５．ＨＨ－２号住全景（西より）
　６．遺物出土状態
　７．ＨＨ－３号住全景（西より）
　８．カマド部全景
ＰＬ．12
　１．Ｃ区円形土壙全景（西より）
　２．土層断面
　３．Ｈ区木炭窯全景（南より）
ＰＬ．13
　１．１号，４号木炭窯全景（南より）
　２．１号木炭窯土層断面
　３．２号木炭窯全景（南より）
　４．煙道部
　５．３号木炭窯全景（南より）

６．３，４号木炭窯土層断面
７．４号木炭窯全景（西より）
８．４号木炭窯土層断面
ＰＬ．14
Ｆ－１号墳出土遺物
ＰＬ．15
Ｆ－１号墳，Ｆ－３号墳出土遺物
ＰＬ．16
Ｆ－１号墳出土遺物
ＰＬ．17
Ｆ－２号墳，３号墳，４号墳，５号墳，Ｉ－２号墳出土遺物
ＰＬ．18
Ｉ－３号墳，Ｄ－１号墳，Ｅ－１号墳出土遺物
ＰＬ．19
古墳出土の鉄器
ＰＬ．20
古墳出土の鉄器
ＰＬ．21
ＩＨ－１号住，２号住，ＨＨ－１号住居出土遺物
ＰＬ．22
ＨＨ－２号住，３号住，Ｃ区土壙，Ｉ区出土遺物

付表目次

付表１　土器観察表
付表２　土層観察表
付表３　鉄器類計測表

Ⅰ　発掘調査の経緯

（1）　発掘調査に至るまで

本報告の西原古墳群が所在する粕川村大字深津字西原，後原地区は村の土地利用計画のなかで工業地域に指定されている。その為，昭和54年頃より工場の進出が盛んに行われてきている。しかし，この地区は戦前より文化財の多い地域として周知され，特に，今回開発対象となった地区は，明治10年，時の深津村戸長が県に提出した「上野国勢多郡深津村」村誌や岩沢正作により昭和６年に発行された雑誌「毛野第２号」などにおいても，この地に古墳が多く存在していることが記載されている。特に「毛野」では，この西原の地に７，８基の古墳が群在していたことを記している。又，「深津村誌」には，この西原，後原地区の西を流下する「東神沢川」によって開析された谷を当時「タタラ沢」と呼んでいたことが記されている。このことは，この地に古代の製鉄跡の存在を予想させている。

粕川村教育委員会では工場の進出などの開発行為の実施にたいしては事前に文化財の有無を確認するとともに，適切な保存の方法を開発者との間で協議してきた。過去，２社がこの地に工場の新設を行ったが，いずれの場合にも開発者の協力のもとに工事により直接破壊を受ける埋蔵文化財についての発掘調査を実施している。今回の「粕川工業団地」建設にさいしても，教育委員会は数回にわたって村長部局との交渉を重ねてきた。ちょうど教育委員会では58年度より村内の遺跡詳細分布調査を実施中であり，その成果は村長部局との交渉に対して貴重な資料となった。

その結果，昭和59年３月から建設予定地域に対する試掘調査を実施し，その結果をまって本調査に入るということで合意した。ここに昭和59年３月１日付けをもって，粕川村教育委員会と企業からのオーダーメイド方式により「粕川工業団地」を造成することとなった群馬県企業局との間で工業団地造成区域内埋蔵文化財に係る発掘調査委託協定が締結され，調査に入ることになった。

調査対象面積は67,000㎡，内，調査を必要とした面積は22,000㎡であった。途中，予想以上に遺構が検出されたことから調査経費等についての契約変更を行いこれに対処した。

（2）　発掘調査の経過

調査は最初，昭和59年３月２日から１箇月の予定で試掘調査に着手することとした。造成敷地内に国家座標第Ⅸ系，Ｘ＝44500，Ｙ＝－57200を基準として100ｍ方眼を一単位とする大グリットを設定，それをそれぞれをＡ，Ｂ，Ｃと呼称することとした。この大グリットに対し地形に沿って20ｍごとに幅２ｍの試掘溝を設定し，これを大型重機と人力によって開けていった。その結果Ａ，Ｄ，Ｅ，Ｆ，Ｈ，Ｉの各区に遺構が集中していることが明らかになった。本調査は４月２日より開始，これらの区を中心として表土剥ぎを行った。又，遺構の検出漏れを防ぐ為，20ｍごとに設定した試掘溝の間にさらに細かに重機よる試掘溝を打っていった。

発掘調査はＦ，Ｉ区から開始した。特にＩ区の南西端部については，梅雨にそなえて最初に排水槽を造っておきたいという工事側の要望もあり，この部分にあたる古墳１基，住居跡２軒の調査を先行して実施した。その後，Ｆ区，Ｅ区と調査を順次進行させていった。（第１表）

今回の調査によって検出された遺構は古墳15基（前方後円墳1基を含む），住居跡5軒（古墳時代前期２軒，平安時代３軒），土坑1基，浅間Ｂ軽石下の木炭窯４基，時期不明の溝１条，であった。

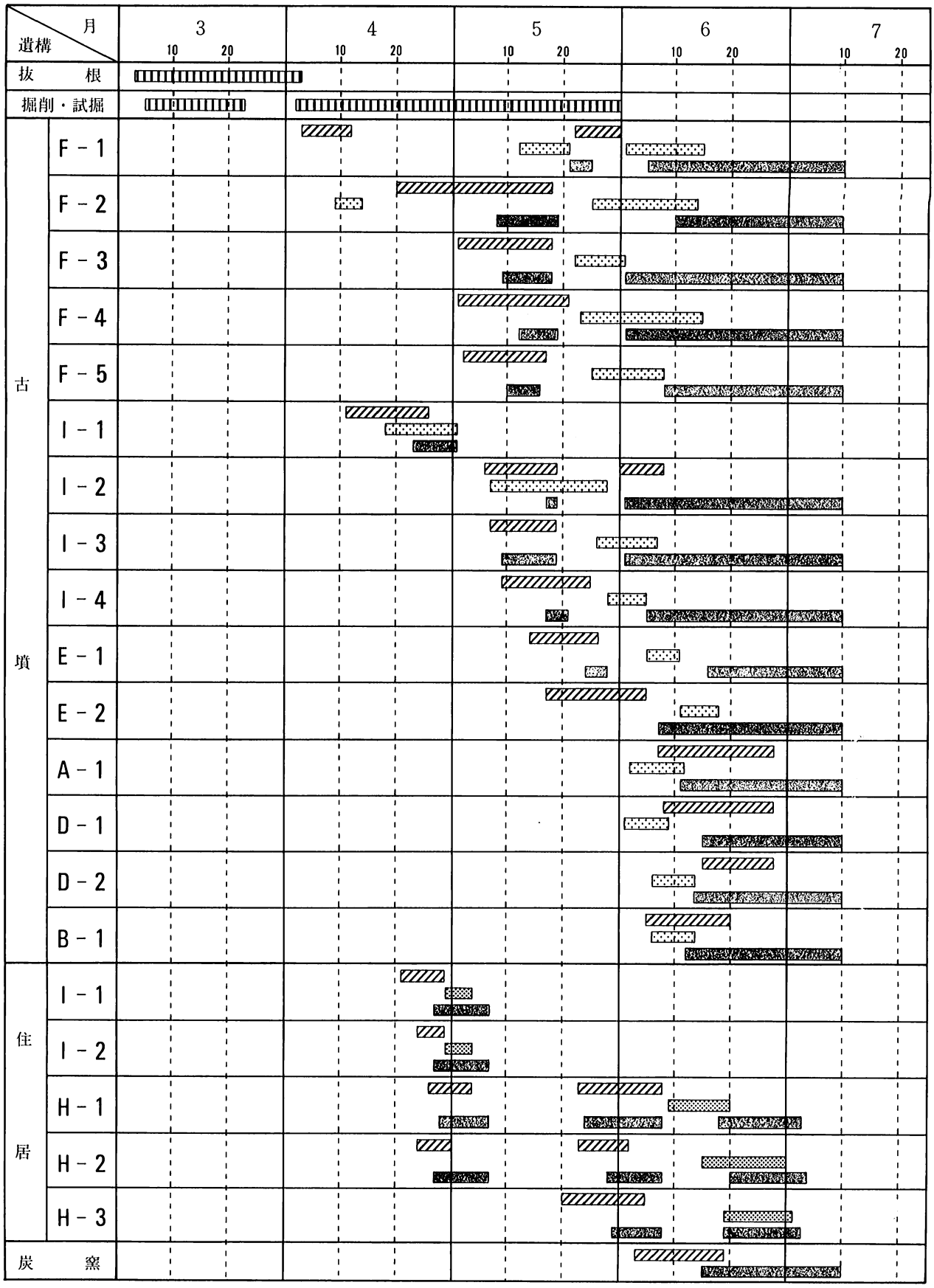
調査は７月10日まで行なった。要した日数は100日，参加人員は延1744人であった。

なお，発掘調査に関する事務局の組織は下記のとおりである。

金井　久雄	粕川村教育委員会教育長
田島　敏男	同事務局長（59年７月転出）
笠原　清	同事務局長（59年７月着任）
坂本　実	同社会教育係長
小林　進	同主事

発掘調査の組織は下記のとおりである。

小島　純一	教育委員会社会教育主事（発掘調査担当）
竹内　寛	同嘱託



発掘調査　石室調査　精査　写真・図面

第1表　発掘調査進行表

II　西原古墳群の位置と周辺の遺跡

（1）　遺跡の位置

西原古墳群は粕川村の西南部，大字深津字西原1887番地他に所在する。

粕川村を東西に横切る県道大胡・桐生線を東から村の繁華街を抜けると道が下り込みながら大きく右に曲り，再び上りになる箇所がある。西原古墳群の所在する台地はここから始まり，緩やかに傾斜しながら南西方向に延びている，赤城山の泥流を基盤とする洪積台地である。途中，この台地は南北に走る県道深津・伊勢崎線に横断され，さらに南に延びて前橋市西大室町との境にあたる広い平坦面に落ちている。

この台地の東には石田川，西には東神沢川が流れている。特に西を流れる東神沢川は西の深津七ツ石の台地との間に深い谷を刻んでいる。そこを地元では「タタラ沢」と呼称している。

（2）　周辺の遺跡

西原古墳群の周辺には58年度から当教育委員会で実施している村内遺跡詳細分布調査や近年の圃場整備事業に係る発掘調査などにより多くの遺跡が検出されている。

ここでは，西原古墳群を取り巻く古墳群と同期の遺跡について概観することとする。

まず，西原古墳群の東の台地上には「上毛古墳総覧」に８基が記載されている近戸・聖天古墳群が位置している。東の台地上には前橋市教育委員会によって５基の古墳が調査された七ツ石古墳群が存在している。さらに，南には大室の前・中・後[註1]の三前方後円墳を中心とした大室古墳群や11基の円形周溝墓と８基の円墳が調査された上縄引遺跡が位置しているなど，古墳群の密集地帯といえよう。[註2]

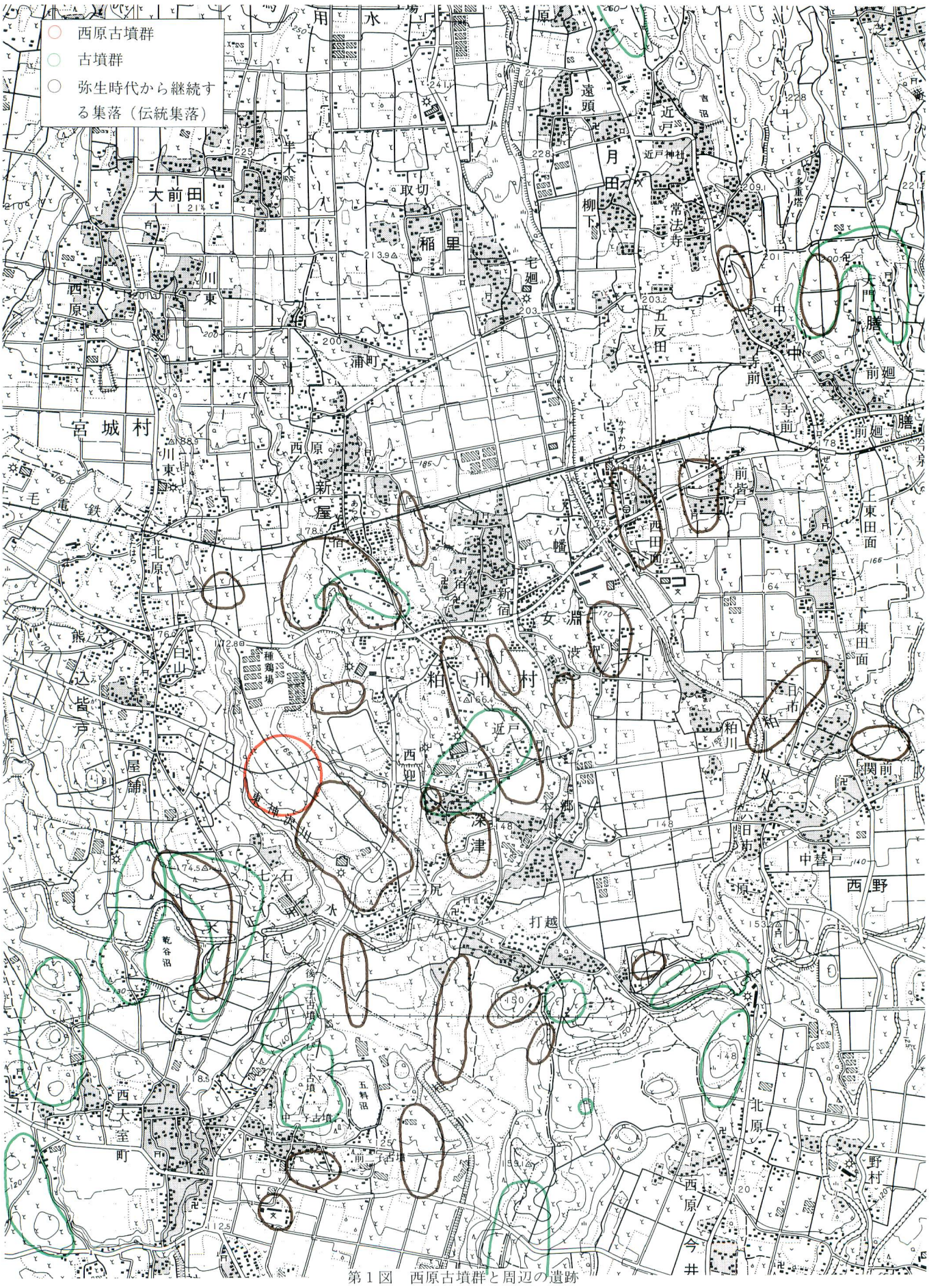
当該期の集落についても桂川や神沢川などによる沖積地を背景にしてか，弥生時代後期からの遺跡が多く存在している。

西原古墳群と同一台地上の先端部には弥生後期から古墳時代中期にかけての遺跡である西原・後原遺跡があり，この遺跡の範囲はさらに南まで延びて[註3]一部は前橋市教育委員会が調査を実施し，弥生後期の住居跡３軒を検出した西大室遺跡群昭和57年度調査遺跡Ｃ地点にまで及んでいるものと考えられる。又，東神沢川を[註4]挟んで西の台地上先端にはやはり前橋市教育委員会によって調査された西大室遺跡群昭和56年度調査遺跡などが存在している。

以上のように[註5]西原古墳群を取り巻く周辺の遺跡の在り方は古墳群と集落が緊密に有機的な関係を持って存在していたと考えられる。

この地域はさらに，古墳群研究の上ばかりではなく，弥生後期から古墳時代前期に到る問題を明らかにする上でも重要な地域でもあり，すでに調査の終了した遺跡の一日でも速い内容の公表が待たれるところである。

註１　「富田遺跡群・西大室遺跡群・清里南部遺跡群」1980　前橋市教育委員会
「富田遺跡群・西大室遺跡群」1980　前橋市教育委員会
註２　「西大室古墳群II」1981　前橋市教育委員会
註３　昭和54・56年度粕川村教育委員会調査
註４　「西大室遺跡群」1983　前橋市教育委員会
註５　註１参照



第１図　西原古墳群と周辺の遺跡

III　検出された遺構と遺物

1　古墳群の調査

(1)　F－1号墳

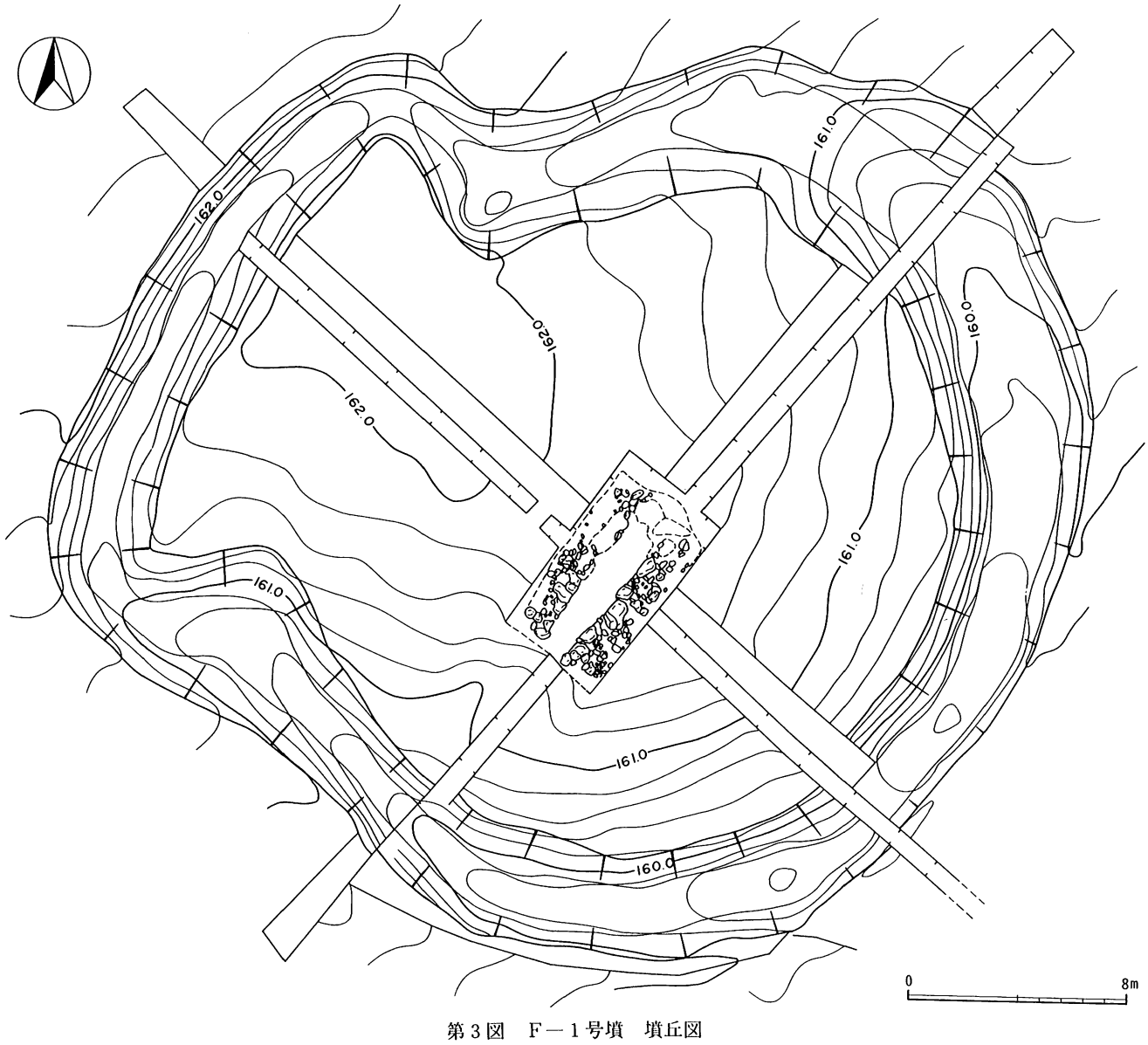
位　置　発掘区のほぼ中央に位置している。F区とE区の2区にまたがっている。この古墳の南にはF－2号墳，F－3号墳が近接して存在している。

墳　丘　本古墳群中唯一の帆立貝式前方後円墳である。後円部は東北側が突出した不整形な円形を呈する。周堀を含めた主軸長は34.4mを測る。後円部中心部において主軸と直角方向に交わる軸長は34mを測る。主軸方向はN－60°－Wを示す。

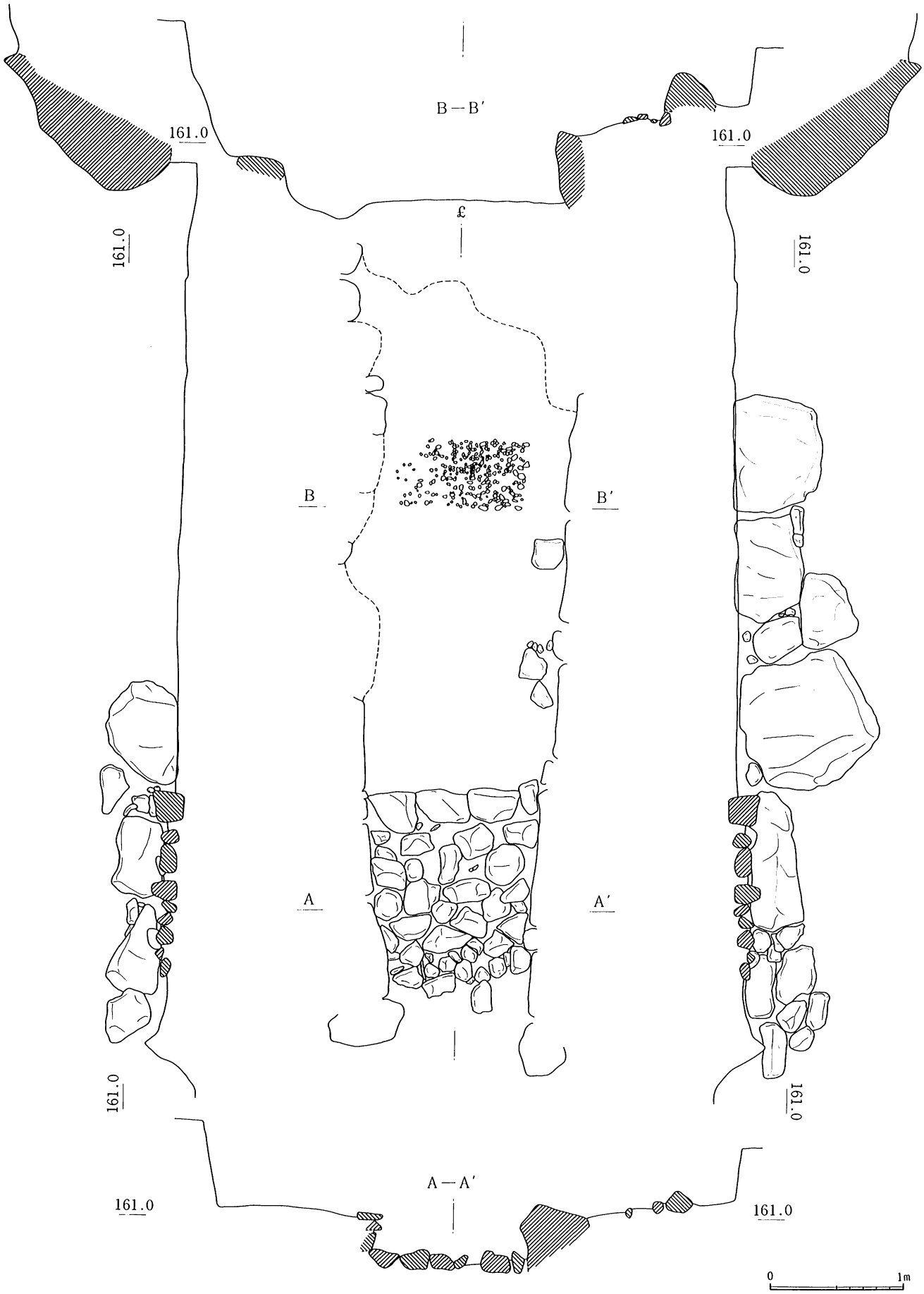
周堀の全体の形状は墳丘と合致し，東北部がやや張出している。又，前方部と後円部とのくびれ部では僅かにくびれが認められる。周堀の上幅は平均4m，下幅平均1.2mを測る。深さはほぼ一定して掘られており，旧表土面より0.8mを測る。古墳全体が南東方向に緩やかに傾斜する旧地形を巧みに利用しているために周堀の底面は後円部と前方部とで2.8mもの比高差を生じている。

古墳墳丘の構築は古墳南西部分の後円部についてのみ旧地形を僅かに削り出して成形している。墳丘に対する盛土は前方部の一部に認められたにすぎなかった。

本墳には葺石は認められないが，後円部北側における円筒埴輪列の一部と石室入口北側からは「帽子を被った男子」や「盾」などの形象埴輪が検出され



第3図　F－1号墳　墳丘図



第４図　Ｆ－１号墳　石室展開図

ている。

主体部　後円部のほぼ中央部に主軸方向S－37°－Wで開口する袖無形横穴式石室である。石室は地山面を掘削した「掘り方」の中に敷設されている。石室の石は後世の攪乱によりほとんど抜き取られているが，僅かに入口部付近の壁石の根石が確認されている。石材は安山岩の割石を使用している。村内北部に所在する月田古墳群などの古墳で使用されている完全に角が磨耗している転石とは全く異なっている。又，使用されている石材の大きさは他の古墳のそれと比べると格段の違いがあり大きい。

玄室と羨道との境には人頭大の円礫を3石使用して框石としている。石の上には3段に石を小口に積み，入口との間に小石を詰めた閉塞が残っていた。この閉塞部の玄室に面した面は非常によく揃えられていた。

石室の主軸長は確認ができる長さで6.66m，框石から入口部までの長さは2.12m，石室の幅は入口部で0.94m，框部分で1.32m，玄室部中央で1.56mを測る。

玄室床面には敷石は認められず，小円礫が敷かれていた。

出土遺物　石室内は攪乱が著しく，形象埴輪の破片などが破砕された石と共に攪乱土中から多く検出されている。床面からは精査の結果，直刀1振，刀子片1，鉄鏃21，が検出できた。しかし，いずれも残存状態は非常に不良であり，その出土状態も原位置を保っていたものとは考えがたい。

石室正面の周堀埋土からは須恵器の提瓶1個体が出土している。胴上半部にカキ目を施し，環状の把手を肩部に一対貼付した痕跡が確認できる。全体に器壁は厚くぼってりしている。焼成は悪く，胎土には砂が多く混入されている。色調は外面は暗灰色，内面は淡褐色を呈する。

墳丘からは埴輪類が多く検出されている。

円筒埴輪は非常に多く検出されているが，完形に復することができたのは僅かに1点のみであった。器高33.25cm，口径18.3cm，底径11.5cmを測る小型のものである。

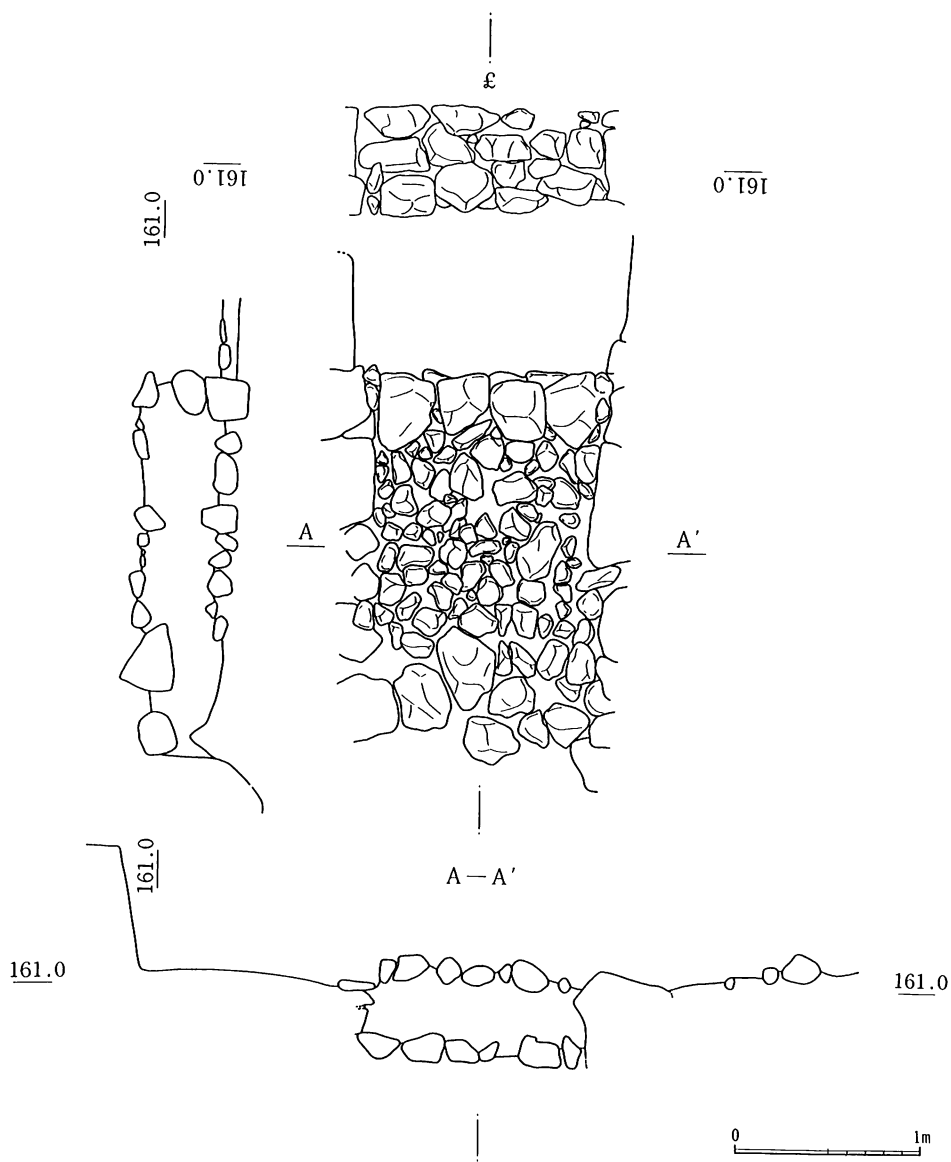
突帯は2段のものが一般的である。透孔はほとんど円形であり，半円形のものは見とめられない。

外面調整の刷毛には荒い物と細かい物の2種類がみられる。

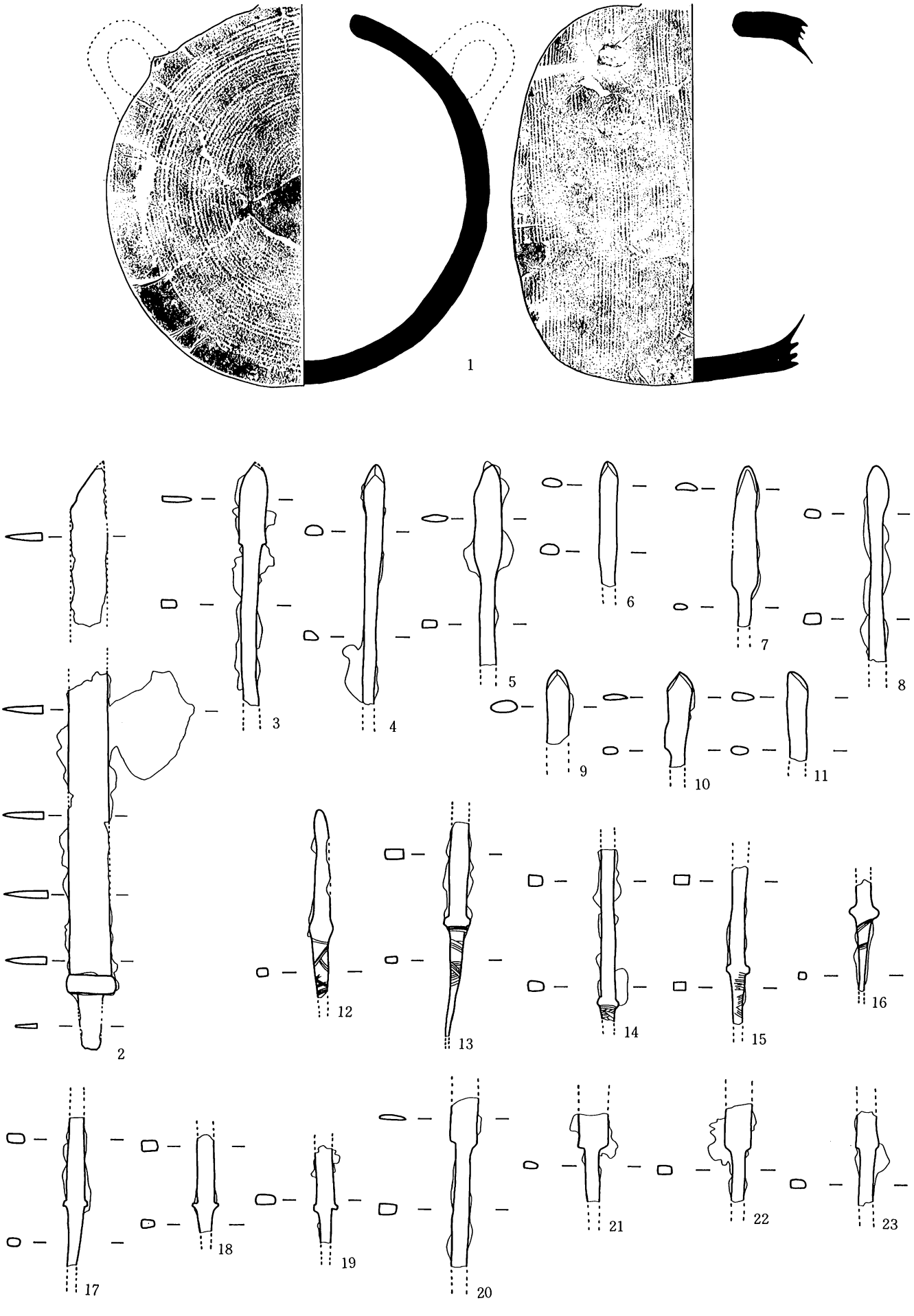
朝顔形の円筒埴輪はみとめられない。

形象埴輪は，人物2，馬1，器材埴輪として，丸鞆1，翳2，靫2，太刀4，盾3，家1の合計16個体の埴輪を少なくとも識別することができた。(注)

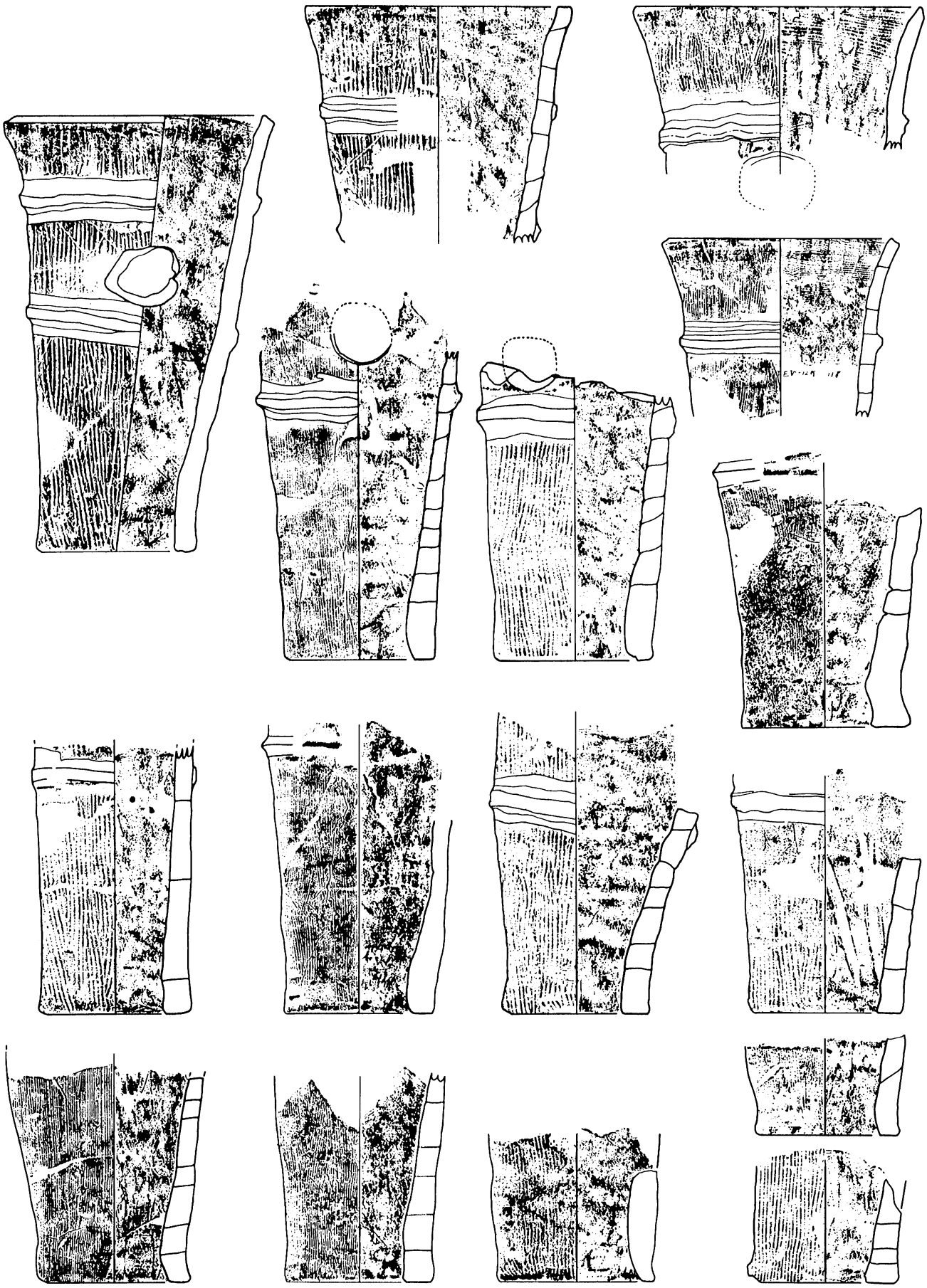
人物1（第9図1）は帽子を被った男子像である。



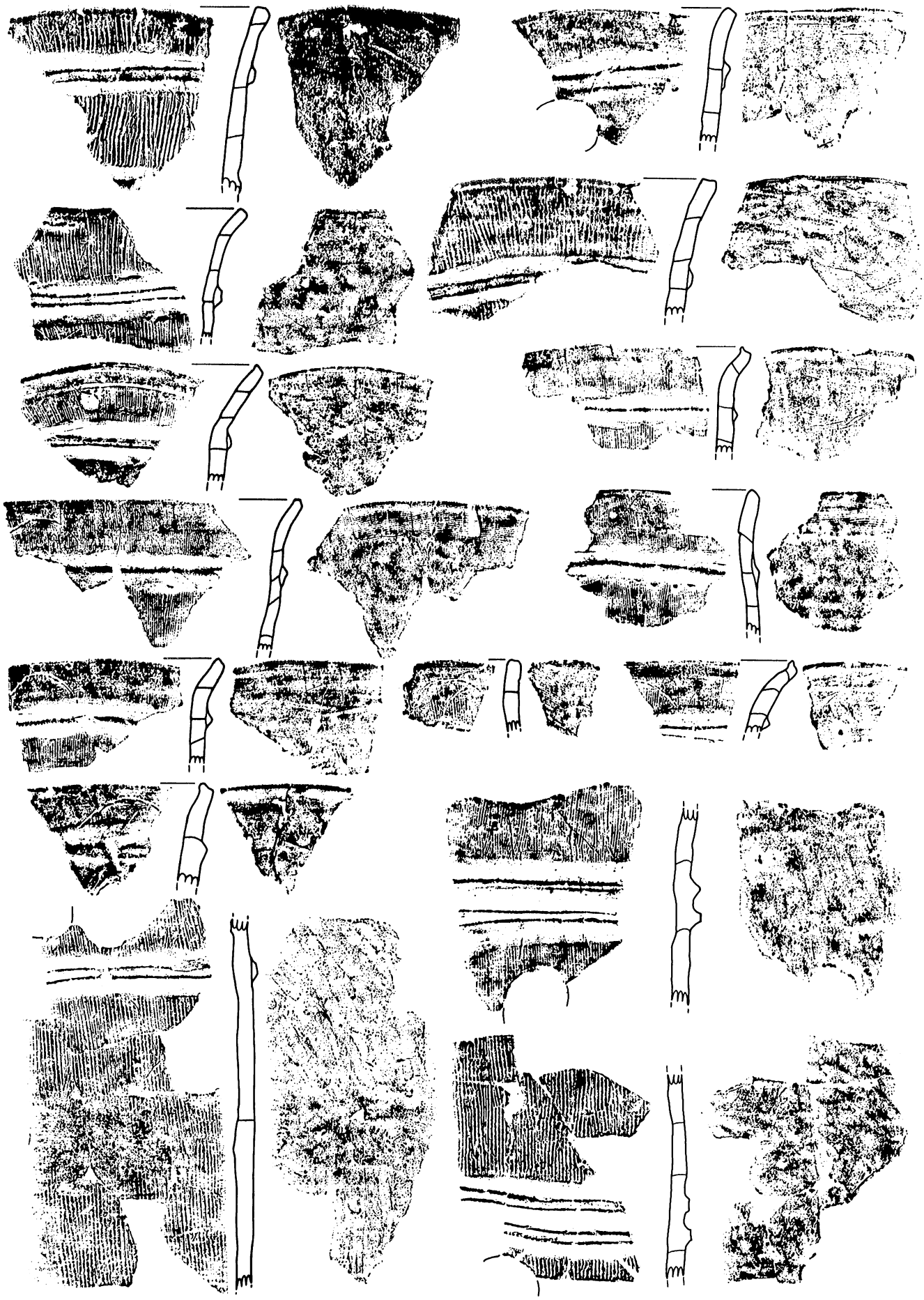
第5図　F－1号墳　閉息部展開図



第６図　Ｆ－１号墳　遺物実測図(1)

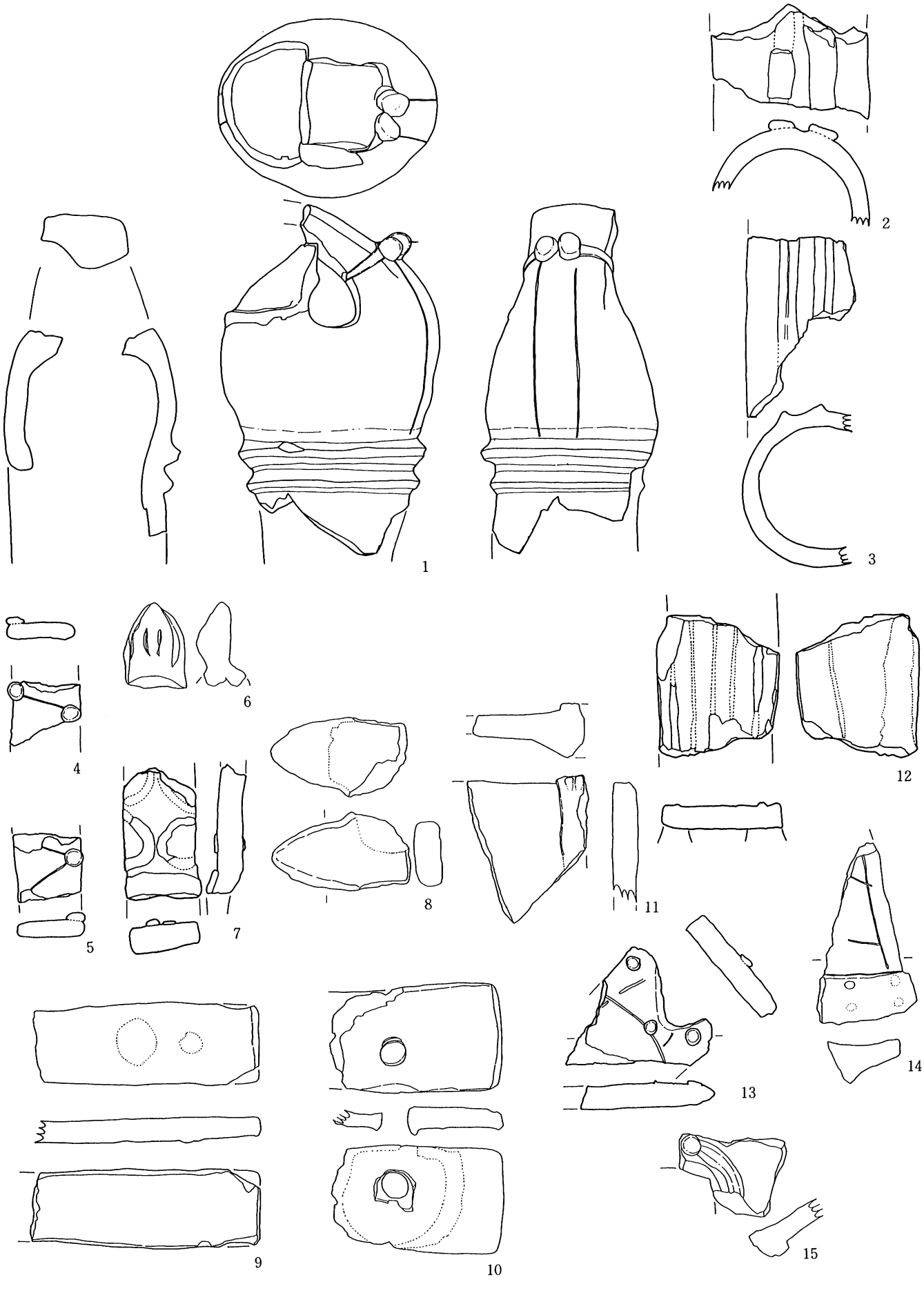


第７図　Ｆ－１号墳　遺物実測図(2)



第８図　Ｆ－１号墳　遺物実測図(3)

第９図　Ｆ－１号墳　遺物実測図(4)



第10図　F－1号墳　遺物実測図(5)

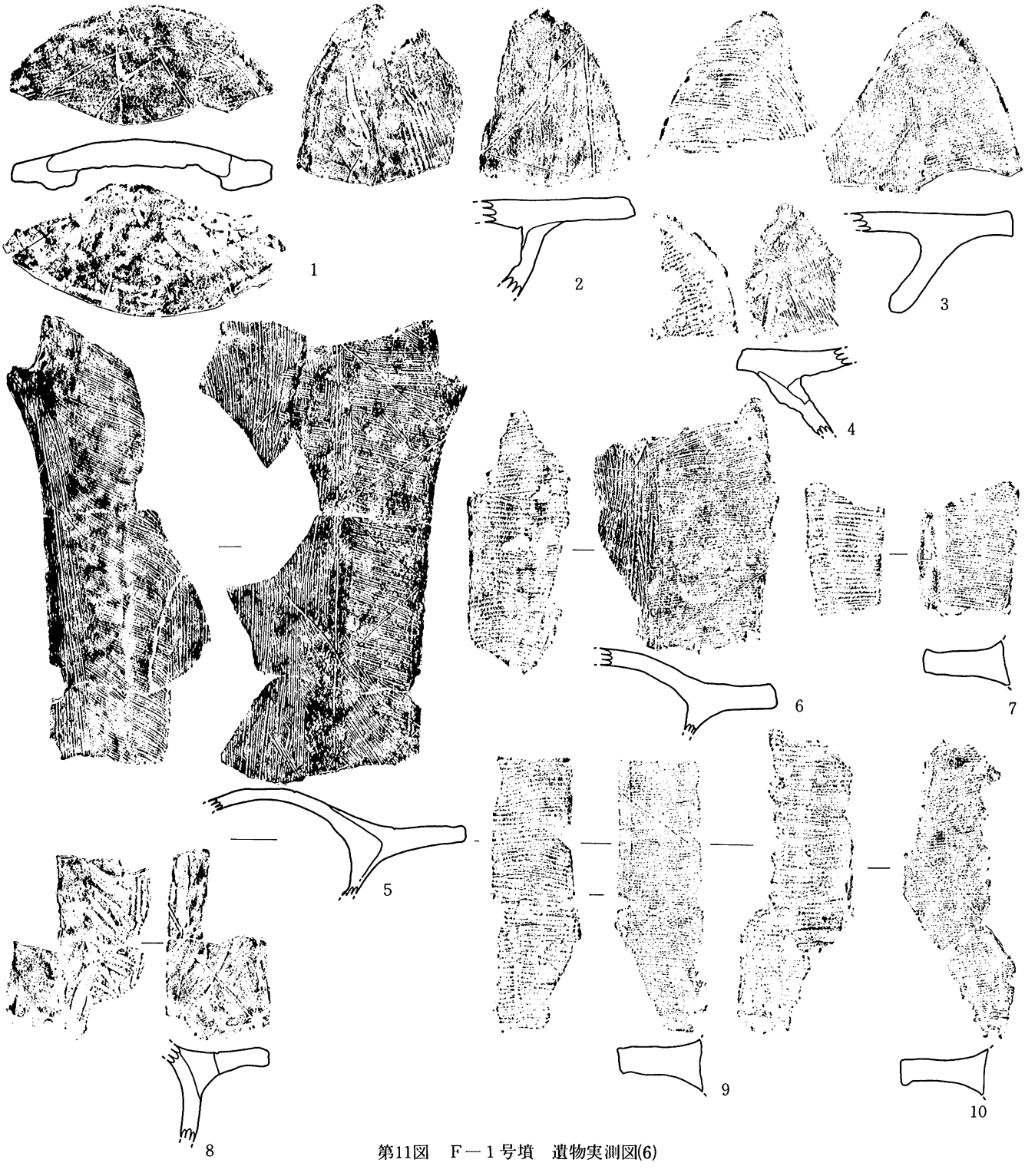
胴下半部と左腕とを欠損している。頬の部分には赤色塗彩の跡がみとめられる。焼成，胎土とも良好。他の人物埴輪は頸飾りの一部や頭部の一部であり，全体の形状を知り得るものはない。(第９図２～７)

馬（第９図８，12)は足と鈴だけであるが，足は現存高38cm，底径10.4cmを測りかなり大型のものと推定される。

鞆（第10図１）は凸帯から下の台部と先端部を欠失している。現存する身部の高さ17.9cm，径16.6cmを測る。翳，靫，太刀はいずれも破片である。

盾（第11図）は胎土などから少なくとも３個体は存在したものと推定できる。いずれも表面には細い沈線による鋸歯文が描かれている。

家（第９図14）は本墳と周堀を接するＦ－２号墳



第11図　Ｆ－１号墳　遺物実測図(6)

の周堀内に，転落した状態で検出されたものである。破片の屈曲や中央に走る凸帯，方形と円形の透孔などから推定して母屋の四柱の部分と考えられる。

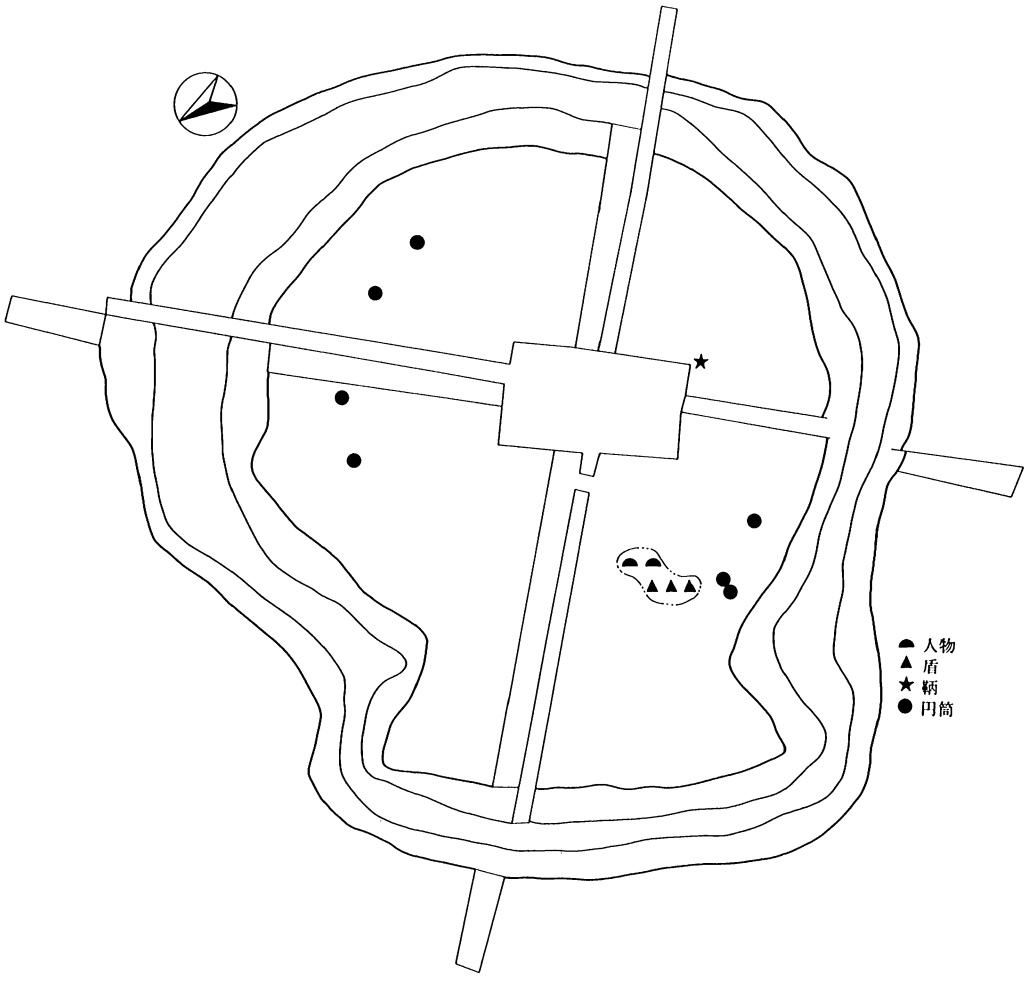
太刀（第10図４～10）は４個体を識別できる。いずれも，勾鉄部分や三輪玉の一部である。

翳（第10図13～15）は２個体を識別できる。

靫（第10図11，12）は１個体と考えられる。５本の矢を負っている。

以上の埴輪群は原位置を留めているものは僅かであるが，第12図に示すような配列を推定複元することができる。人物１と盾及び人物の破片が石室右脇墳丘屈曲部付近に集中している。

（註）埴輪の識別にあたっては梅沢重昭，石塚久則の両氏の御教示によるところが大きい記して感謝の意を表したい。

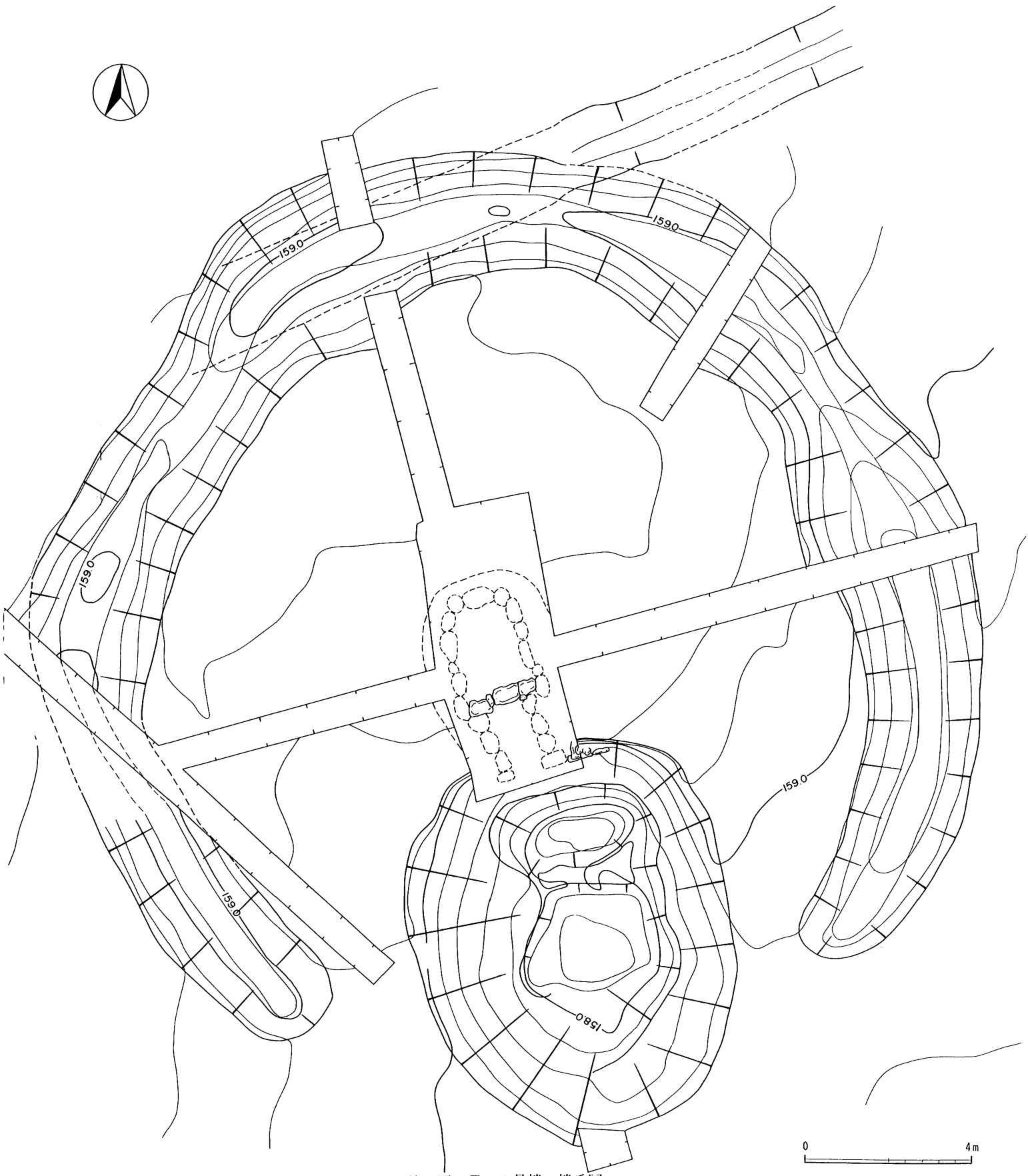


第12図　Ｆ－１号埴輪配列図

（2） F－2号墳

位　置　F－1号墳の南東に近接して存在している。又，西にはF－3号墳，北にはF－5号墳が存在している。本墳の周堀部の北側は中近世のものと考えられる溝に一部を切られている。

墳　丘　周堀を含めた直径が23m程の円墳である。石室入口部の前には深さ1.4mを測る楕円形の前庭状遺構を設けている。この前庭状の堀込み埋土上層からは浅間B軽石の純層が検出できた。



第13図　F－2号墳　墳丘図

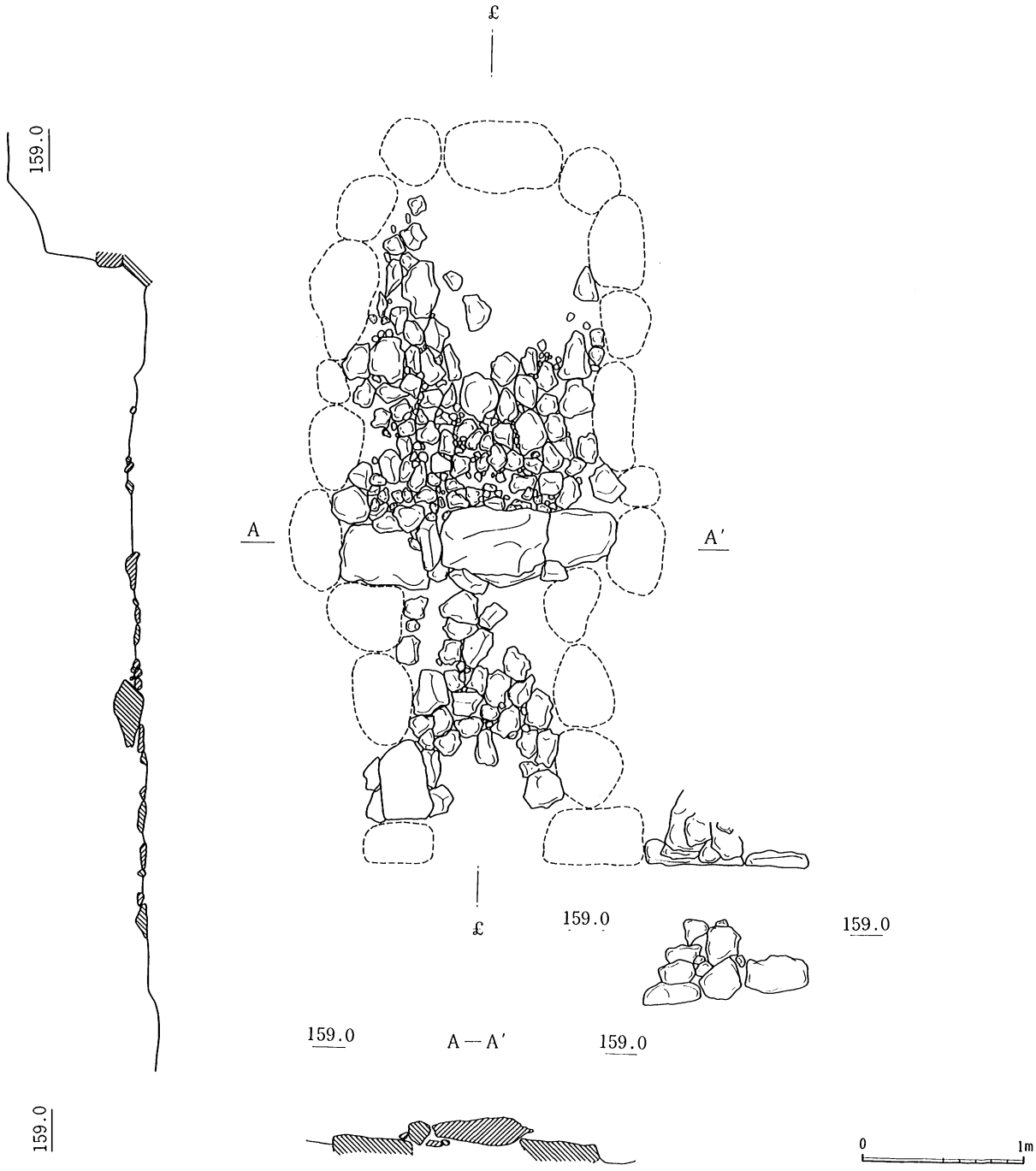
周堀は平均上幅４ｍ，下幅２ｍを測り，北側では深さ１ｍを測り，しっかりと掘られている。しかし周堀は全周せず，前庭状遺構の手前で切れている。又，Ｆ－１号墳の周堀と接する部分では，本墳の周堀がＦ－１号墳の周堀を避けていることが確認できた。

本墳には葺石や埴輪の樹立は認められなかった。ただ，周堀北側のＦ－１号墳と接する部分からは形象埴輪の一部と考えられる破片や円筒埴輪の破片が数片検出されているが，これらの遺物についてはここではＦ－１号墳に伴うものとして扱っている。

主体部　後世の攪乱により石室の大部分の石は抜かれていた。僅かに床面の敷石と框石とが残っていたにすぎない。敷石の上には小石混りの砂が敷かれていた。

石室は地山まで掘り込んだ「掘り方」内にその根石を置いている。

石室の精査の結果，壁石根石の据え方を確認することができた。これにより，石室の概略の形と大きさを把握することができた。



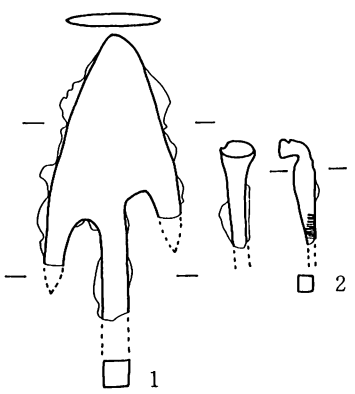
第14図　Ｆ－２号墳　石室展開図

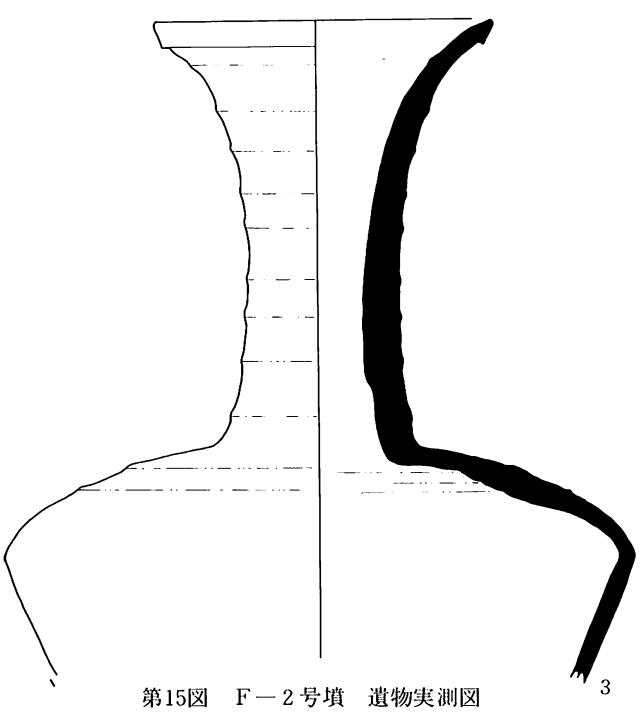
主軸方向はＳ－16°－Ｅ，主軸長4.41ｍ，羨道部長2.18ｍ，玄室部幅2.18ｍ，羨道部幅（框部）0.66ｍ，を測る，玄門を持った両袖形横穴式石室が想定される。

框石は偏平な石を横置きにしている。

石室入口部左には前庭部の一部と考えられる石積みが残っていた。

出土遺物　前庭状の堀込み埋土内より長頸瓶が，前庭状遺構底面部分から鉄族１点が出土している。又，石室内より鉄釘１点が検出できた。





第15図　Ｆ－２号墳　遺物実測図

（３）　Ｆ－３号墳

位　置　Ｆ－１号墳の南側に近接し，Ｆ－４号墳の北側に位置している。ちょうどＦ－１号，４号墳の２古墳に挟まれるような位置にある。

墳　丘　直径17ｍ程の円墳と考えられる。周堀は全周せずに古墳東側で切れている。周堀の形状も不均一であり，深さも浅い所で0.4ｍ，深い所で0.8ｍと一定していない。

石室前には前庭が付設され，それに伴う不整円形の落ち込みも検出されている。前庭右側はよく形を留めていたが，左側はほとんど残っていなかった。

周堀，前庭内の埋土上層からは浅間Ｂ軽石が検出されている。

埴輪の配列や葺石はない。

主体部　本古墳群の中では比較的残存状態の良い石室であった。しかし，それでも残っているのは根石とその上に積まれた１，２段の石である。

石室は「掘り方」を持つ安山岩割石の乱石積による両袖型の横穴式石室であり，石室前には前庭を付設している。

主軸方向はＳ－26°－Ｗである。

石室全長は4.16ｍを測る。

玄室は長さ2.23ｍ，幅1.25ｍを測る。奥壁は一石構成を意図したのであろうが，側壁との間が開いてしまった為，大小の円礫によって隙間を充塡している。床面には敷石がなされている。玄室と羨道との境には一石を縦位構成にした玄門が付設されている。しかし，框石は存在しなかった。

羨道は長さ1.61ｍ，幅0.64ｍを測る。羨道入口には閉塞石が３段残存しており，玄門部との間を小石混じりの砂土によって充塡していた。

前庭は人頭大の石を３段に積んだものである。しかし，それは石垣状に石と石とを積み上げるのではなく，むしろ旧表土に埋め込んだような状態であった。前庭袖部は緩やかな弧を描いている。

出土遺物　前庭より土師器の坏が２点，前庭西脇の周堀底面より須恵器の提瓶が出土している。

坏は２点出土しているがいずれも小型のものである。口縁部に僅かに陵を有するものと口縁端部が内湾するものとがある。

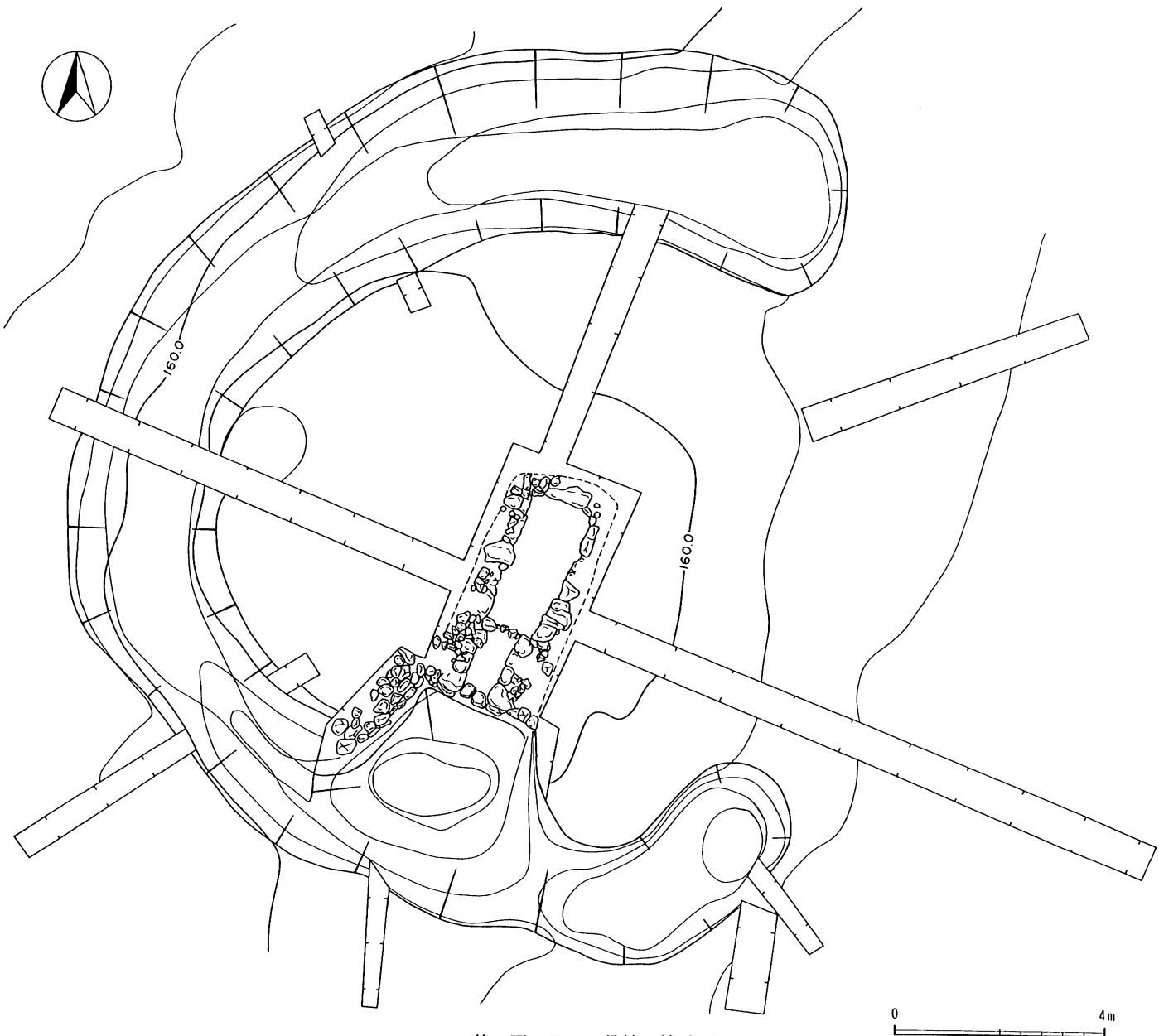
提瓶は口縁部を欠損しているが他はほとんど完形である。器面全体にカキ目が施されているが裏面のそれは表面のカキ目に比べ非常に荒い。又，裏面の平坦面はカキ目調整の後に撫で消しを行っている。頸部には沈線を一条巡らし，その下に荒い櫛描きの波状文を施している。この提瓶はＦ－１号墳出土のそれと比べると，焼き，胎土ともに優れている。

石室内からは金環が３個出土している。

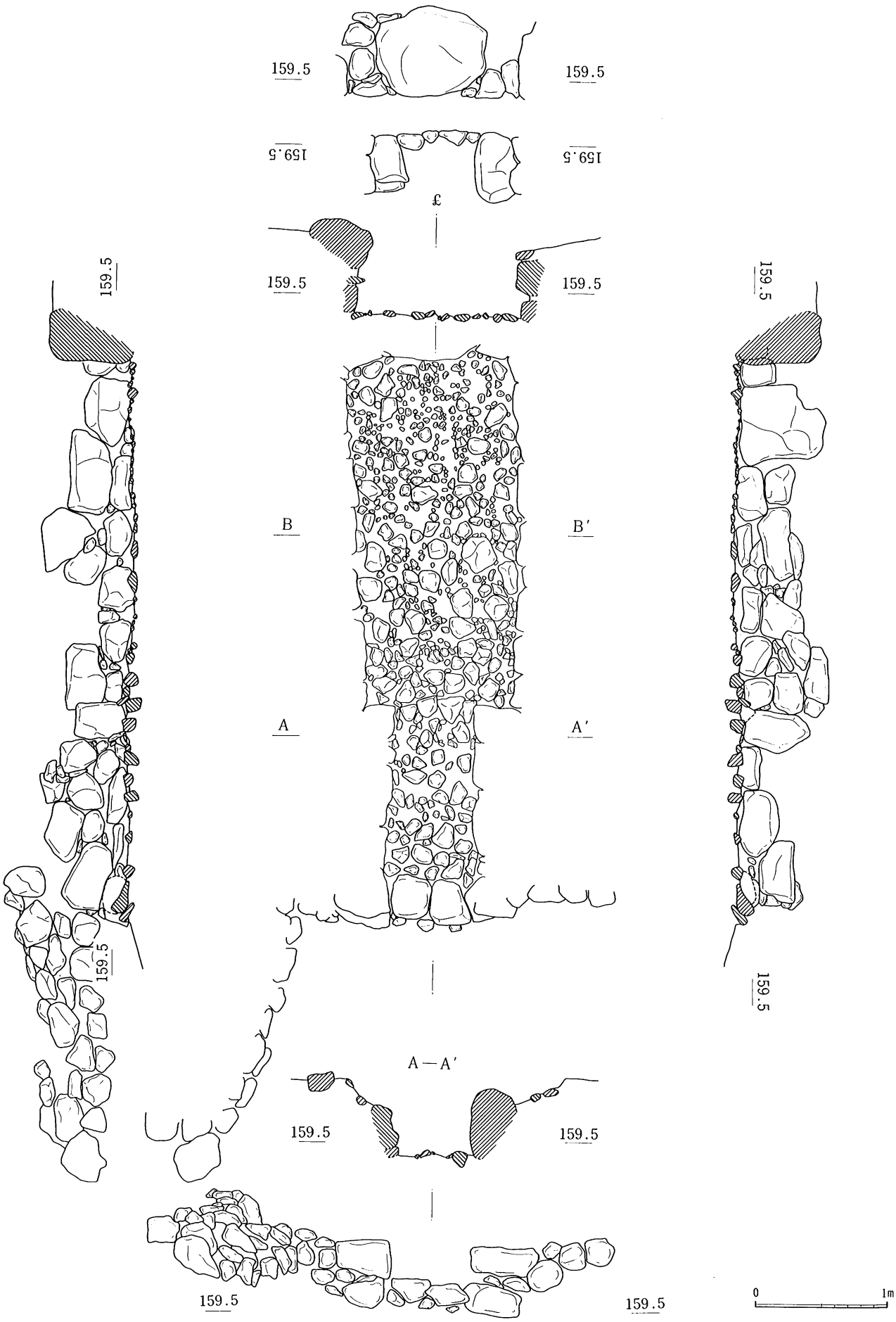
この他，前庭部埋土上面から人物埴輪の顔の一部と鞆の一部が検出されている。

人物埴輪は帽子を被った男子と考えられる。造りは非常に雑であり，胎土も精選されていない。帽子の部分は荒い刷毛目を施し，頭頂より沈線で放射状に８分割し，その中を交互に赤色塗彩を施している。又，顔面にも赤色塗彩の痕跡が残っている。

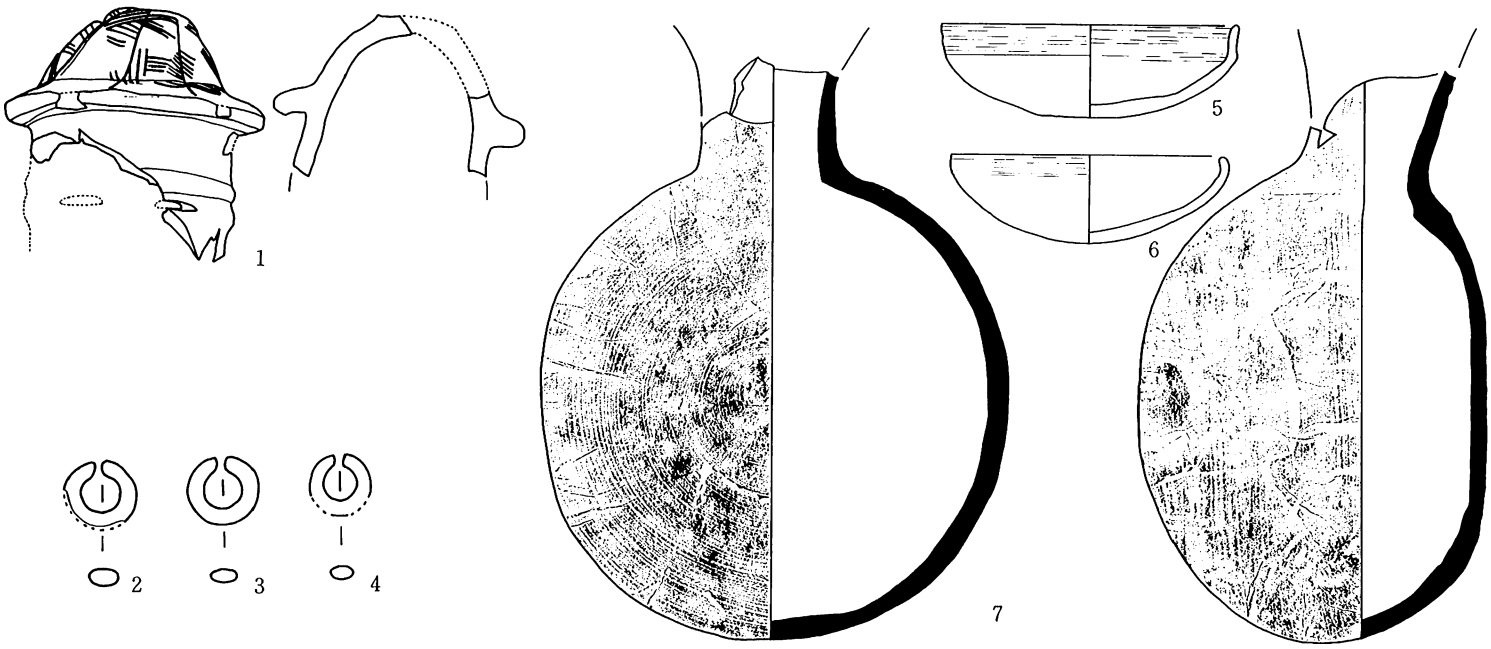
この人物埴輪は同じような出土状態を示す鞆がＦ－１号墳出土の破片と接合し，ほぼ完形に復したことを考慮し，なをかつ本墳石室の形態等の特徴を加味するなら，鞆と同様にＦ－１号墳に伴ったものとするのが妥当かと思われる。



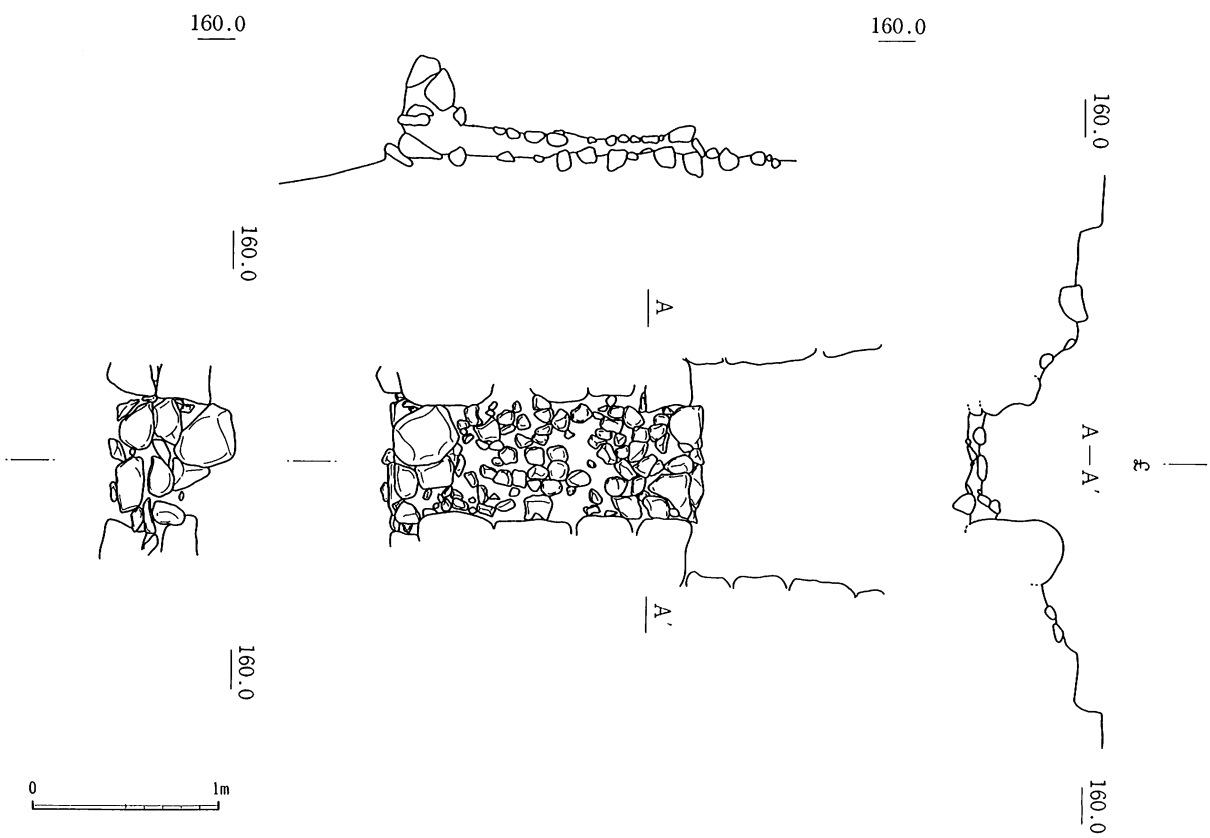
第16図　Ｆ－３号墳　墳丘図



第17図　F－3号墳　石室展開図



第18図　F－3号墳　遺物実測図



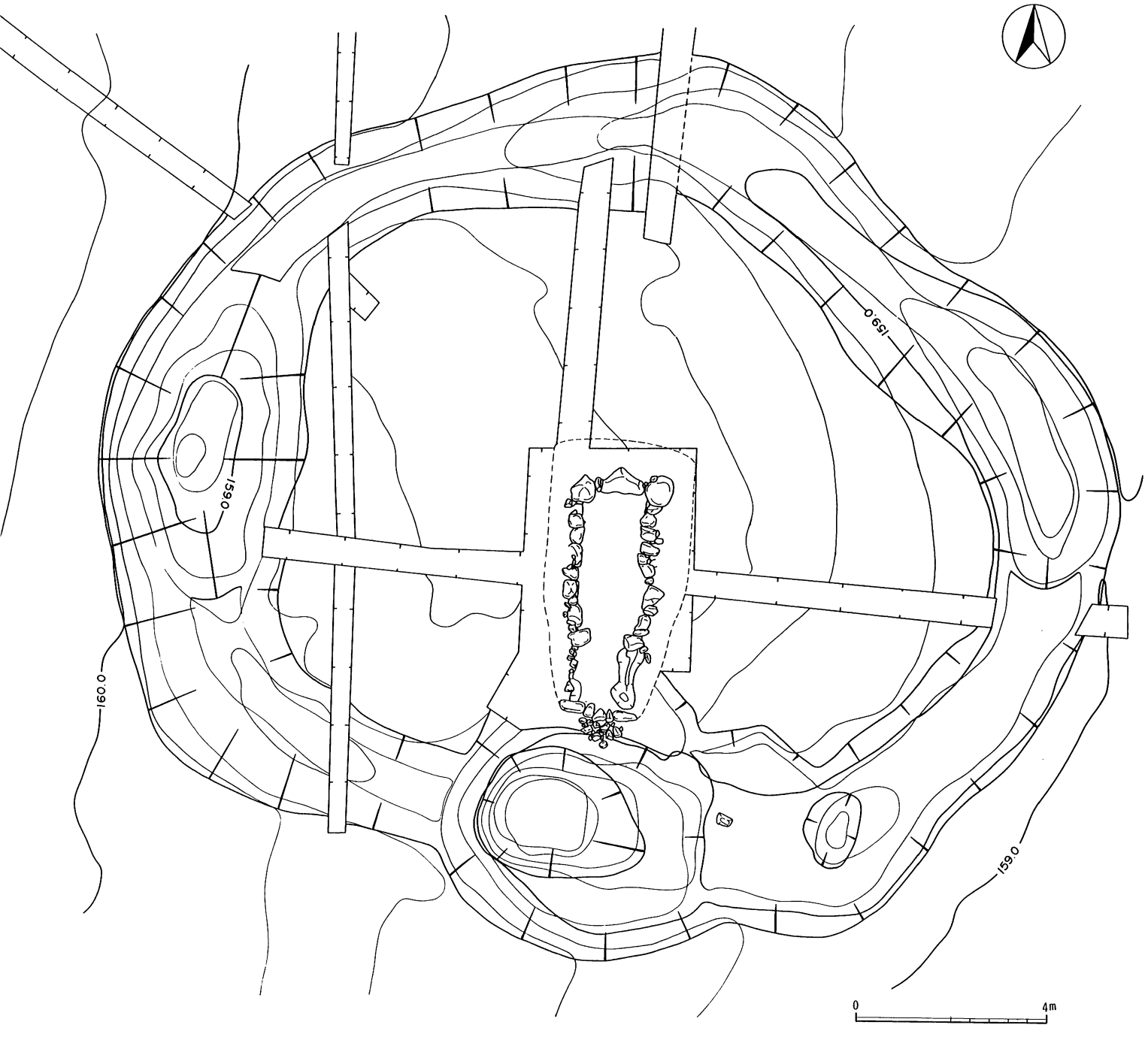
第19図　F－3号墳　閉息図展開図

（4） F－4号墳

位　置　F－3号墳の南に位置する。F区の古墳中最も南に位置している。

墳　丘　直径21mの円墳である。全体の形は上下に潰れた不整円形を呈する。周堀は全周するが南東部は浅く不明確である。周堀の幅は一定せず広い所で上幅4.40m，下幅3.85m，狭い所で上幅2.1m，下幅0.58mを測る。周堀西部には深さ1.6mを測る特に深い箇所がある。ここには周堀の他の箇所と同様B軽石が埋土中に認められた。調査当初は土壙との切り合いを考えていたが，セクションを検討した結果，本墳の周堀の一部として考えた方が妥当だという結論に達した。

石室入口部前には円形に掘られた前庭状遺構が付設されている。



第20図　F－4号墳　墳丘図

埴輪の樹立や葺石は認められなかった。

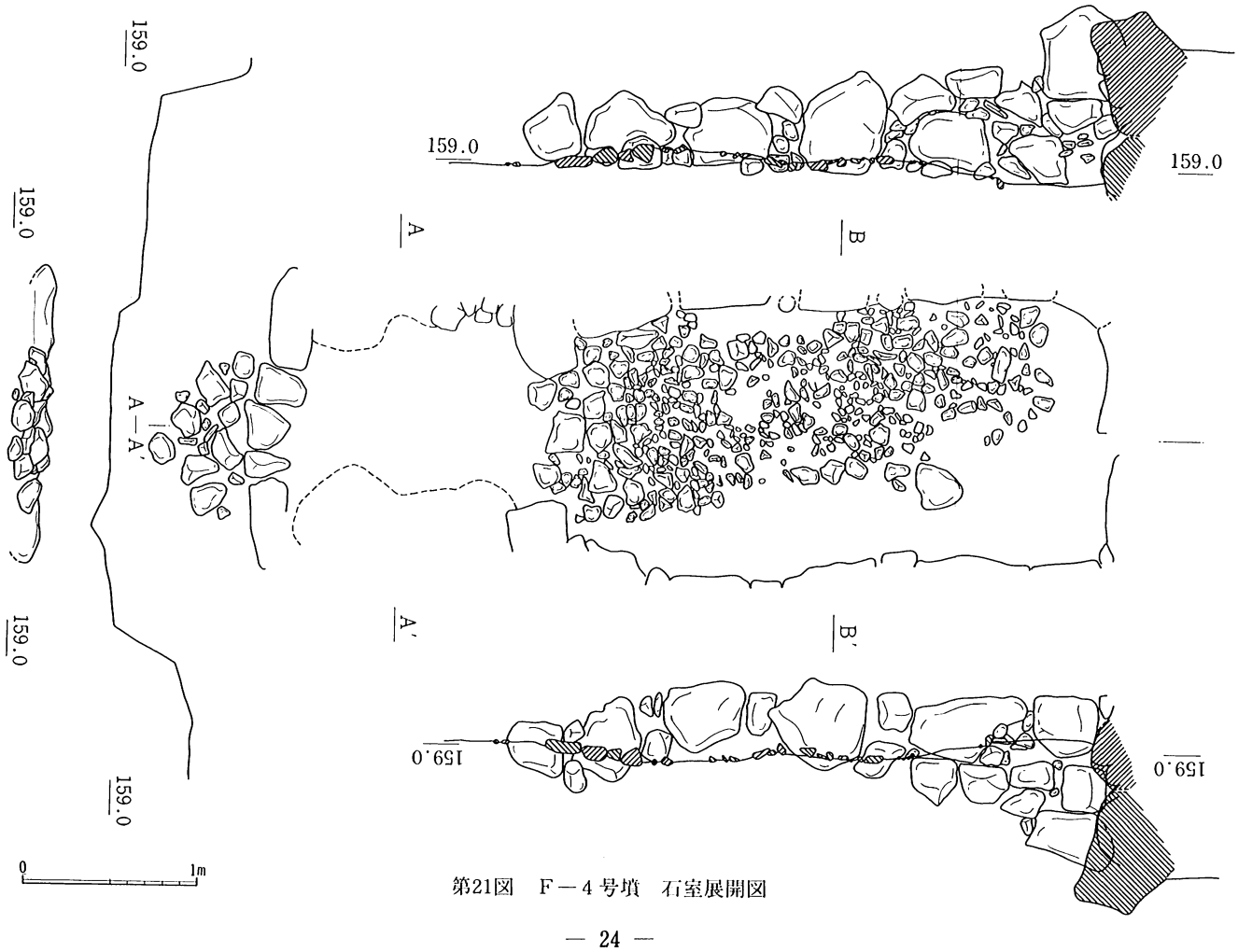
主体部　羨道の大部分の石は抜かれているが，「掘り方」を持った両袖型の横穴式石室と考えられる。根石にやや大ぶりの石を用い，その上に人頭大よりやや大きめの石の小口を出して積んでいる。

主軸方向はＳ－５°－Ｗを示す。

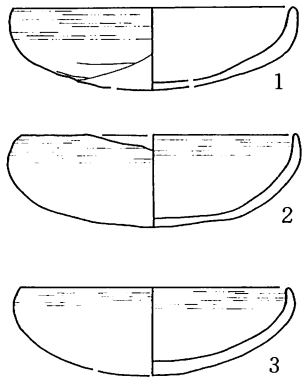
石室の主軸長は4.83ｍ，玄室は長さ2.94ｍ，幅1.30ｍを測る。奥壁は下に２石，その上に１石の計３石で構成されており，大きく玄室側に内傾している。床面には小円礫が敷かれていた。しかし，奥壁部から右壁にかけては敷石は確認されなかった。玄室と羨道との境には玄門が設置されている。石を横位に据えて数石で構成したものと考えられる。羨道は長さ1.89ｍ，幅0.61ｍを測る。僅かに入口部の根石が残っていた。

ところで，この石室の床面を中央より断ち割ったところ，ちょうど敷石の欠落していた部分の下部0.4ｍ程の所に敷石を検出したのである。この敷石の面より刀子（第23図１）や鉄鏃（第24図１）が出土した。しかも石室展開図で明らかのように左壁の根石と右壁のそれとが上面の床面を境にしてちょうど根石１個分の上下差を持っていることが明らかになった。これは，石室断ち割り調査の結果などから，すでに「掘り方」を掘る段階から上下差を持つよう意図されたものと考えられる。

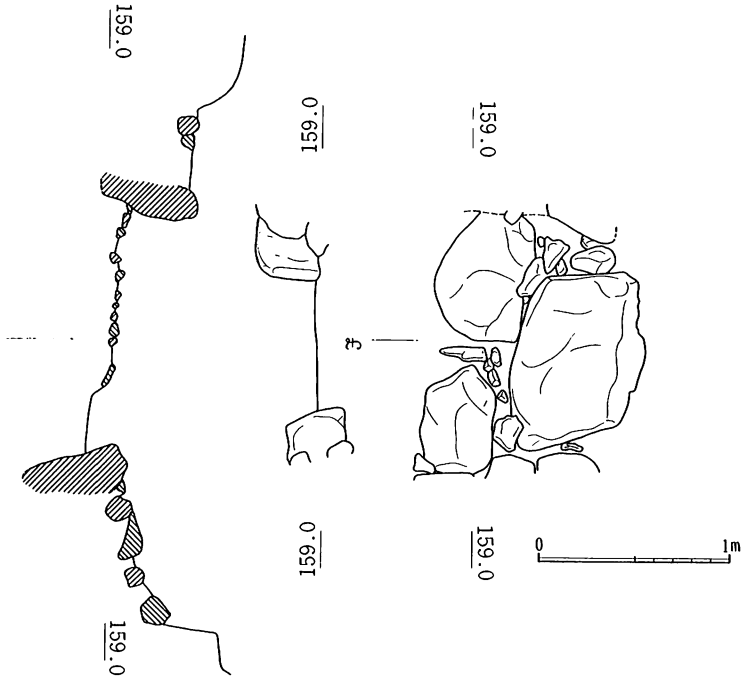
出土遺物　前庭状遺構埋土中より小型の坏３点が出土している。又，石室内からは太刀２振，責金具４点（内２点は金銅装），金環２点，鉄鏃などが検出されている。

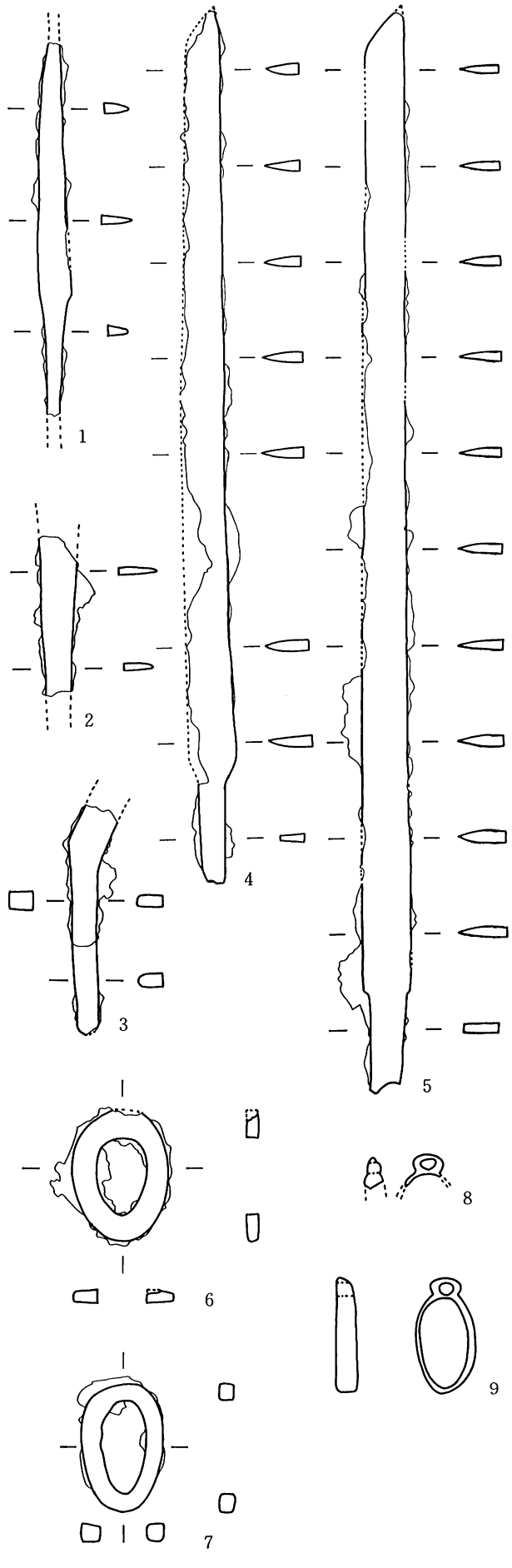


第21図　Ｆ－４号墳　石室展開図

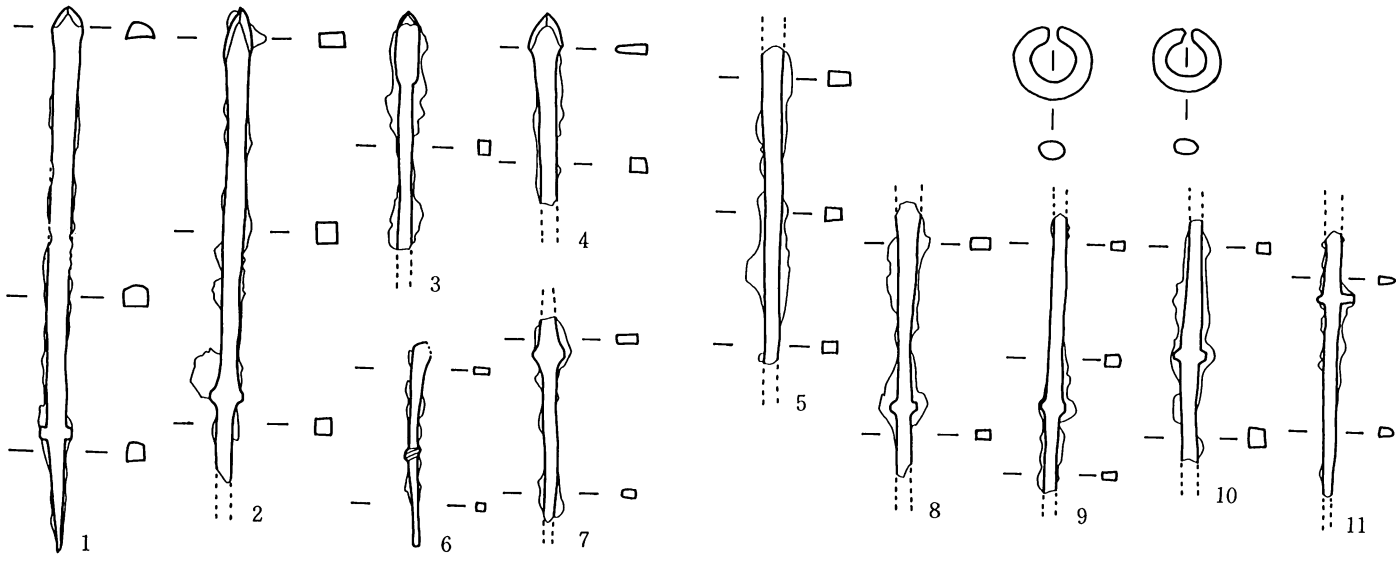


第22図　F－4号　遺物実測図(1)

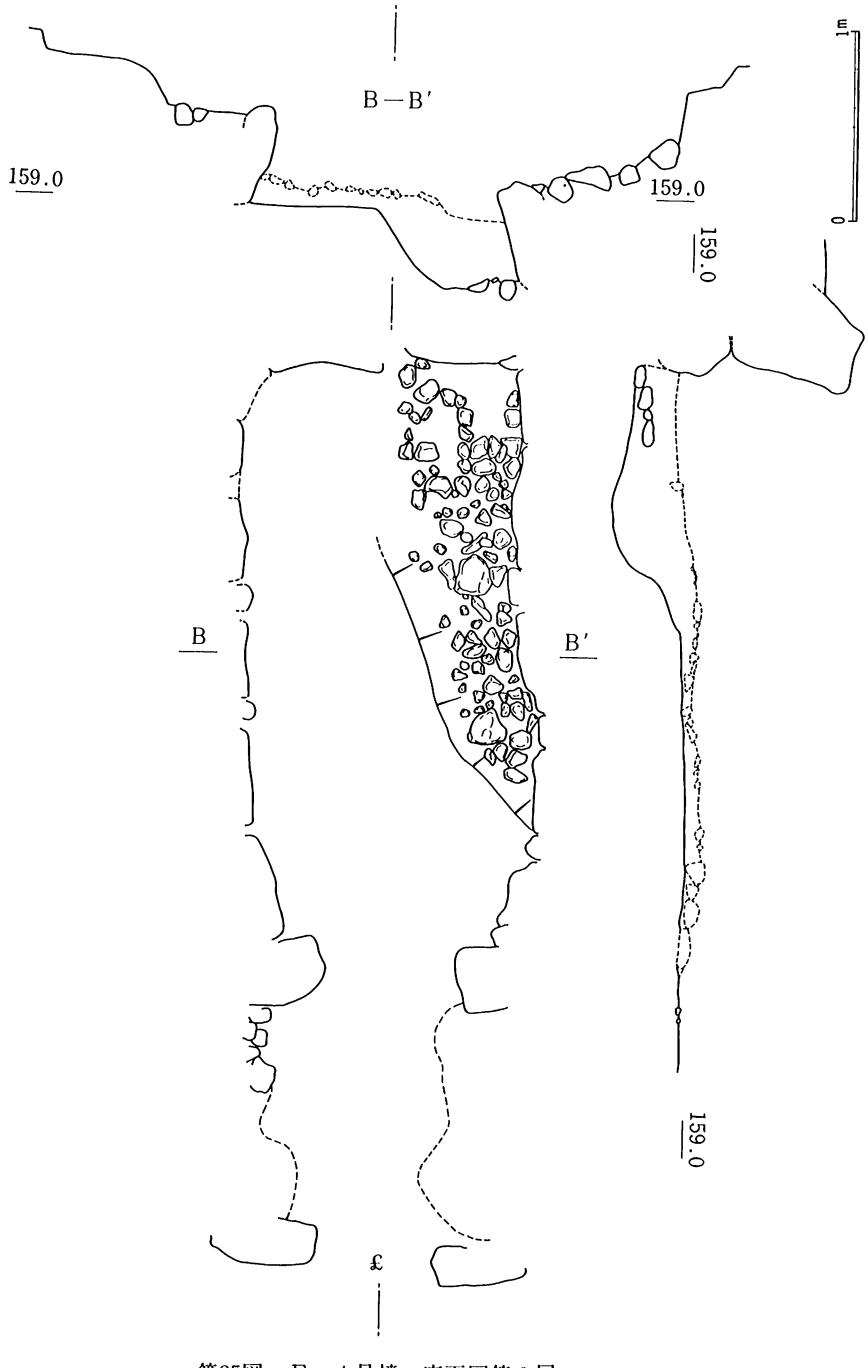




第23図　F－4号墳　遺物実測図(2)



第24図　F－4号墳　遺物実測図(3)



第25図　F－4号墳　床面図第2層

（5） F－5号墳

位　置　F－1号墳の東に位置している。現況の道路によって一部を切断されている。

墳　丘　直径12mの円墳である。周堀は西側に検出されたのみである。たぶん全周していなかったものと思われる。周堀は上幅1.6m、下幅0.72mを測り深さは0.2mと極めて浅い。石室部前には深さ1mの不整円形を呈する前庭状遺構が付設されている。

主体部　「掘り方」を持った両袖型横穴式石室であり，安山岩の自然石による乱石積である。

主軸方向はS－8°－E，主軸長は3.48mを測る。

玄室は長さ2.23m，幅1,22mを測る。奥壁は逆三角形状の石を据ている為，側壁との間に隙間を生じている。その為人頭大の石をそこに補塡している。奥壁は80°程の角度で内傾している。床面には地山の上に小円礫が敷かれていた。羨道部との境には玄門と框石が設置されている。玄門は石を横位に据，確認し得たもので3石で構成されていた。框石は細長い石2石を横位に使用していた。その内1石は石室で使用されている安山岩とは異なり，チャートが使用されていた。

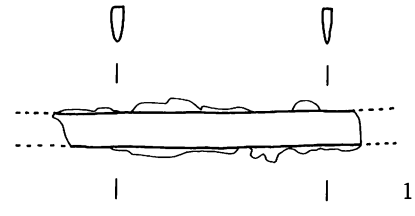
羨道は長さ1.25m，幅0.61mを測る。調査当初には僅かではあるが閉塞石の一部が残っていた。

出土遺物　前庭状遺構埋土中より須恵器の長頸瓶と土師器の坏が2点，石室内より刀子の破片が出土している。

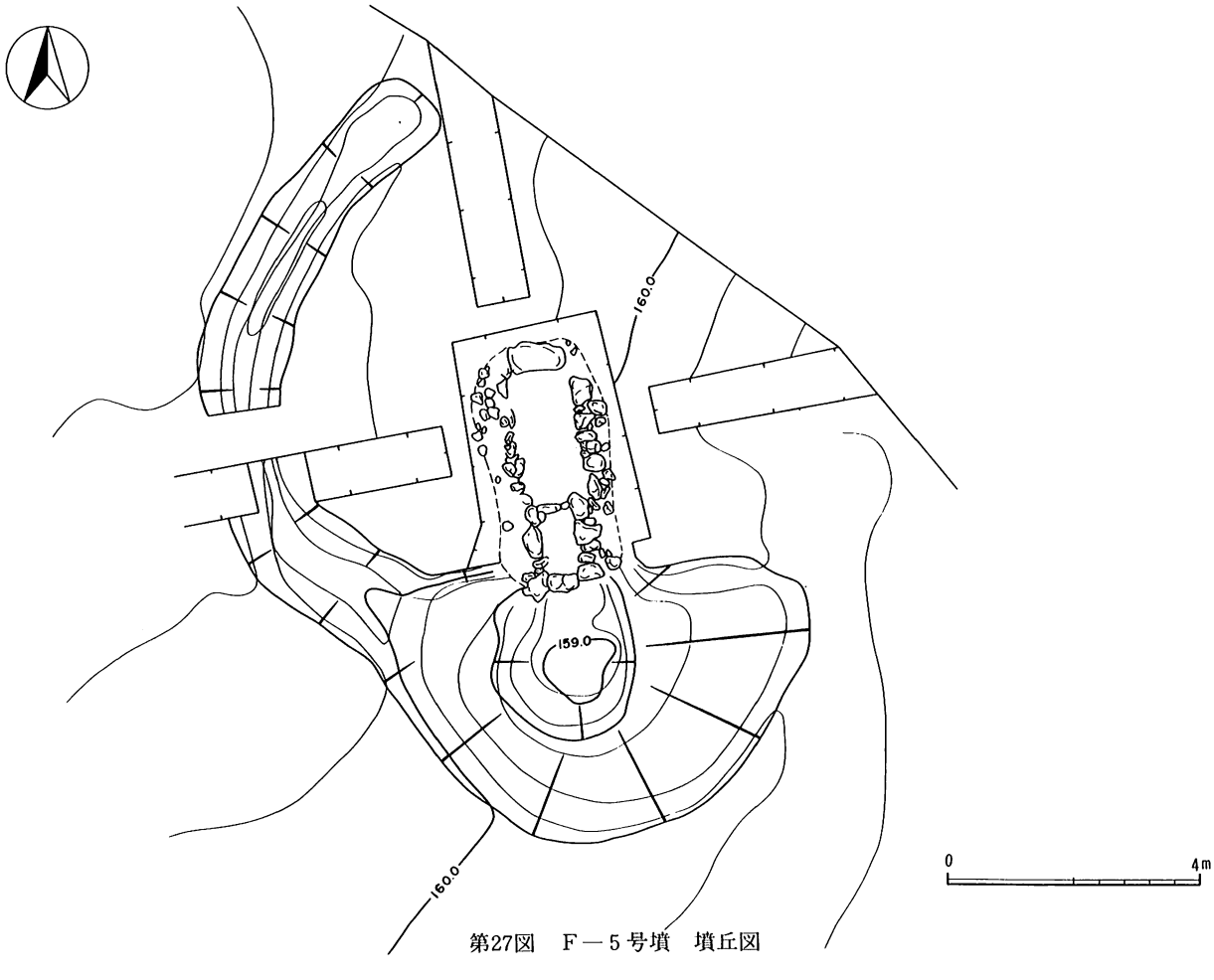
長頸瓶は頸部は肩部から鋭角に立上がり，緩やかに外反しながら口縁部に至るが，途中沈線によって僅かの段を有している。口縁部は僅かに外反する。

肩部には陵を有し胴部に至っている。底部には大きく外方に張り出た高台を有している。高台端部には陵を有している。

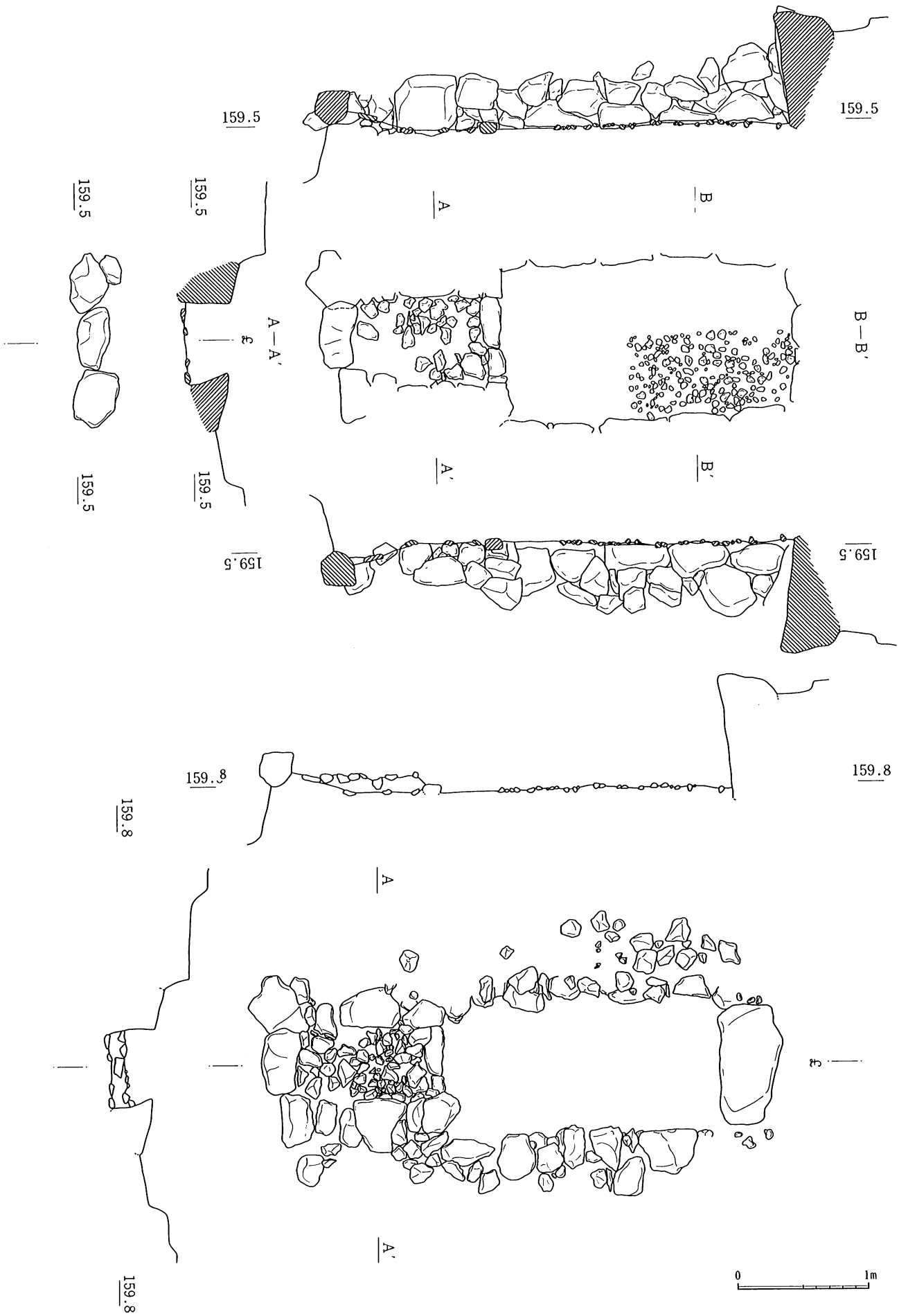
坏は小形のもので口縁部が緩やかに内湾しながら立ち上がるものである。



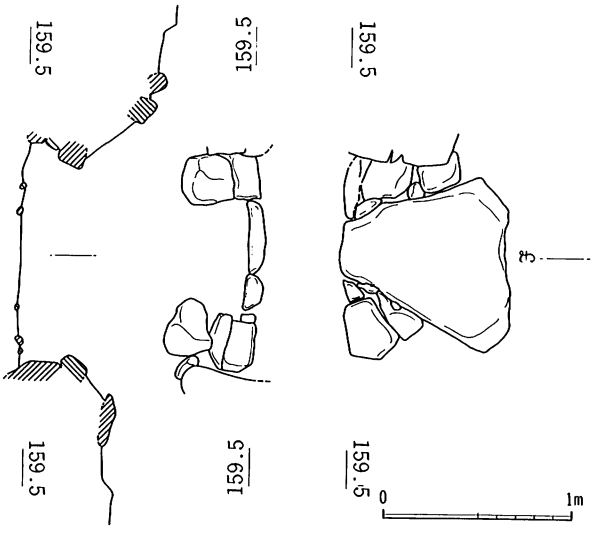
第26図　F－5号墳　遺物実測図(1)

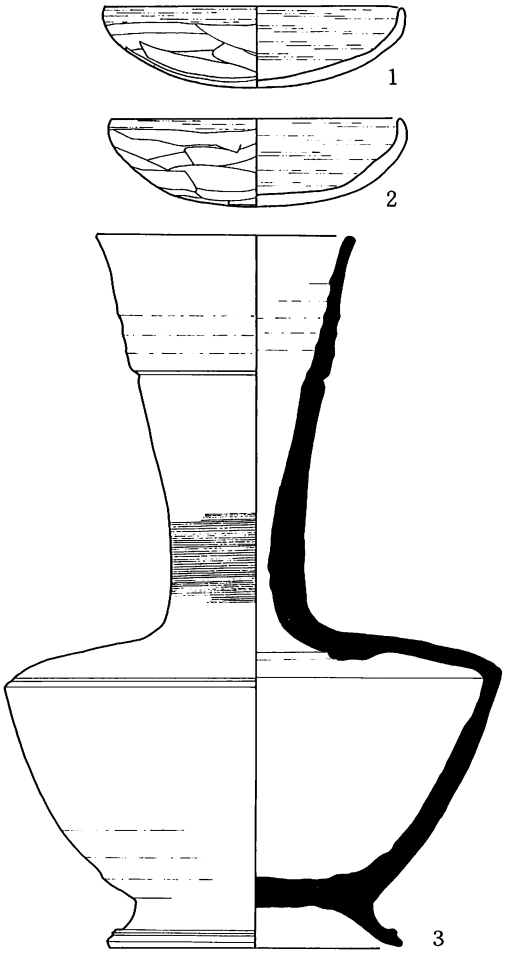


第27図　F－5号墳　墳丘図



第28図　F－5号墳　石室展開図





第29図　F－5号墳　遺物実測図(2)

(6)　I－1号墳

位　置　発掘調査地区の最南端に位置していた。北へ約80m程の距離にI－2，3，4号墳が位置していた。又，調査区域外ではあるが南20m程の位置に古墳として認定できる高まりが存在している。

墳　丘　前庭状遺構から周堀外縁まで11.70mを測る円墳である。周堀は全周せず，前庭状遺構の手前で途切れている。西側は攪乱により確認できなかった。周堀は上幅1.20m，下幅0.8mを測る。しかし，深さは均一には掘られていない。

葺石や埴輪の樹立はない。

主体部　本古墳群中最も残存状態の良好な石室であった。「掘り方」を有する安山岩の自然石乱石積の横穴式石室である。石積の状態は粗雑であり所々に大きな隙間が有る。

主軸方向はS－12°－Wを示す。主軸長は2.6m，石室中央幅1.3m，入口幅1.0mを測る。

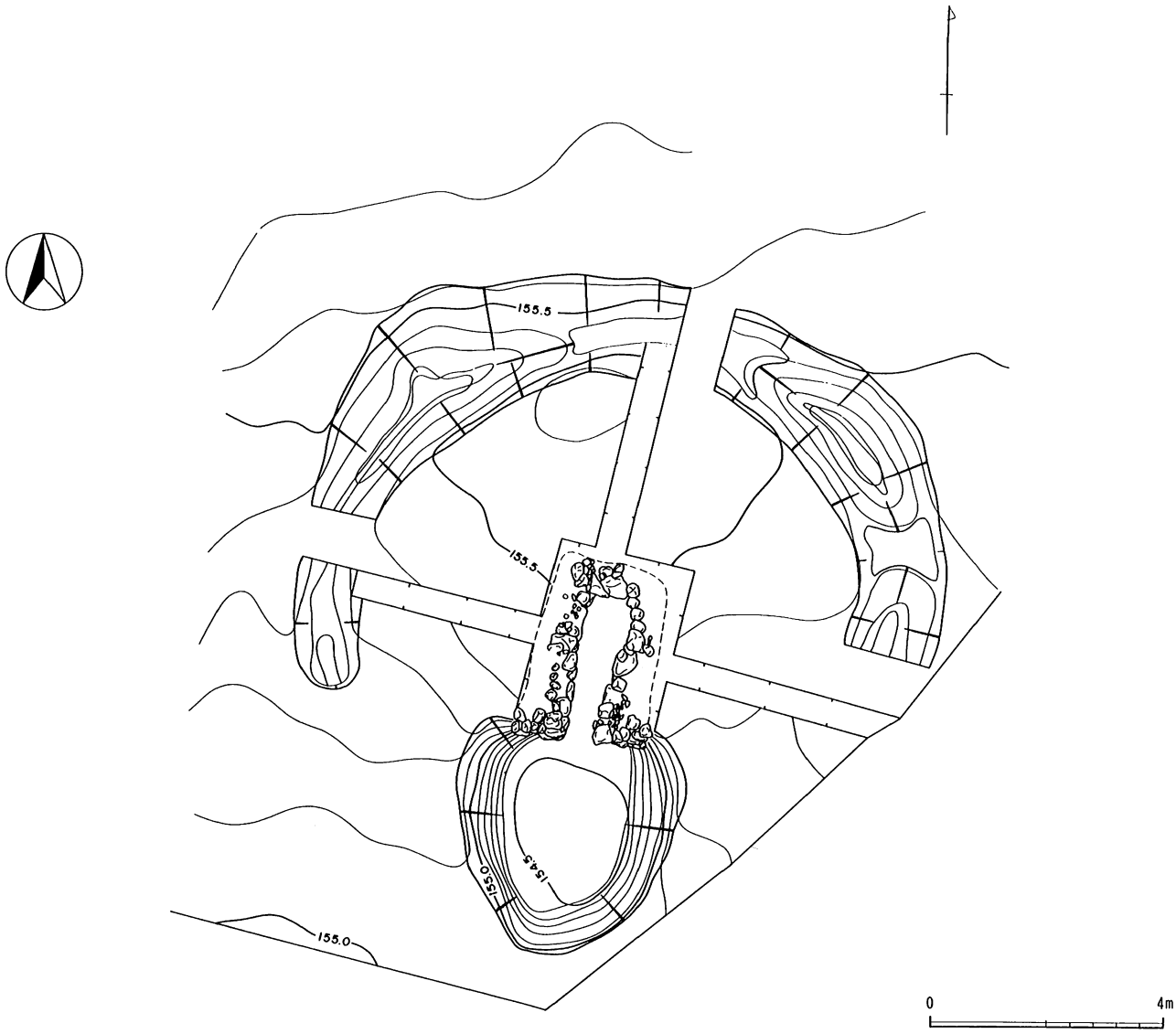
玄室の床面には敷石が敷かれていた。奥壁は一石で構成されている。

石室入口部には，調査当初，閉塞の状態が良く残っていた。閉塞は20～30cmの石を入口部では小口を見せて積んでいた。又，入口部にはちょうど「掘り方」の部分を被覆するように石積みが見られた。

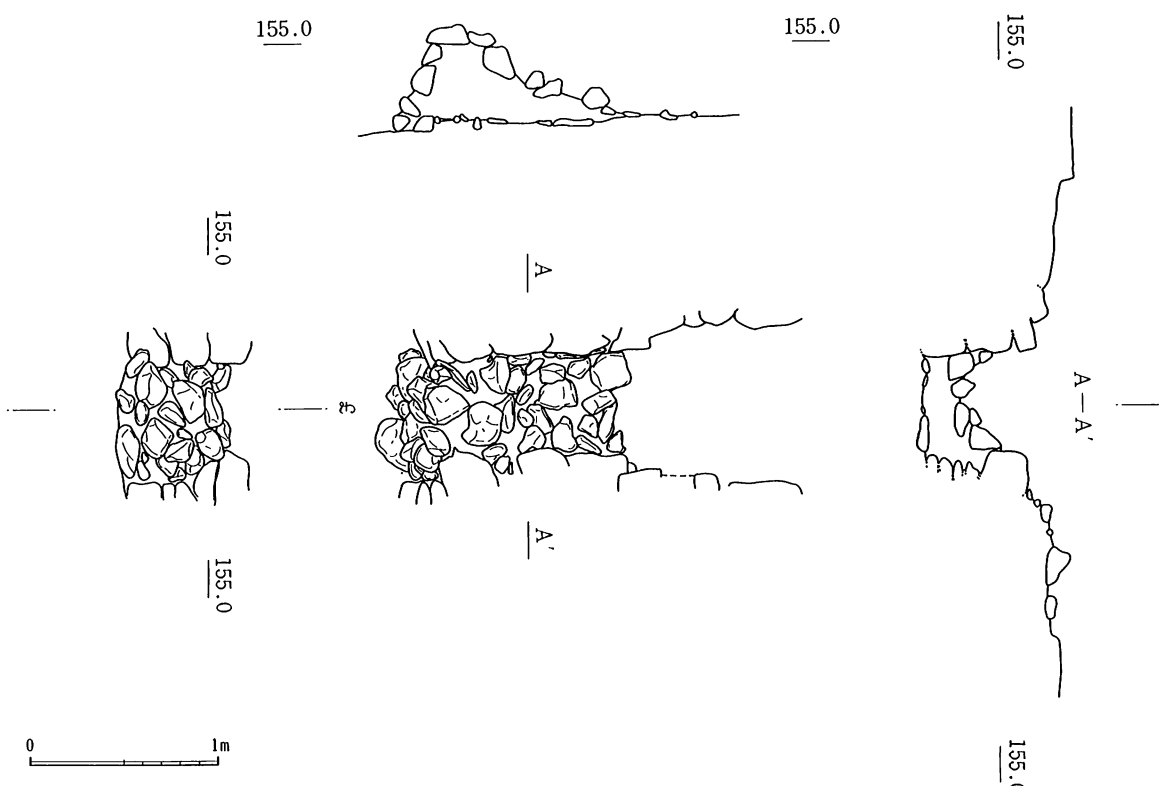
前庭状遺構は直径3.8mの不整円形を呈するが他の古墳のそれと比べるとかなりしっかりと掘られており底面も平坦に整地されている。

本石室の特徴は玄室と羨道を明瞭に区分する施設を有せず，袖無型の石室に似ていることである。しかし，平面形の上で僅かに玄室部にあたる所から脹らみを持っていることが指摘できることから，所謂終末期古墳の特徴を示す「胴張り」を持つ石室の範中に入るものであろう。

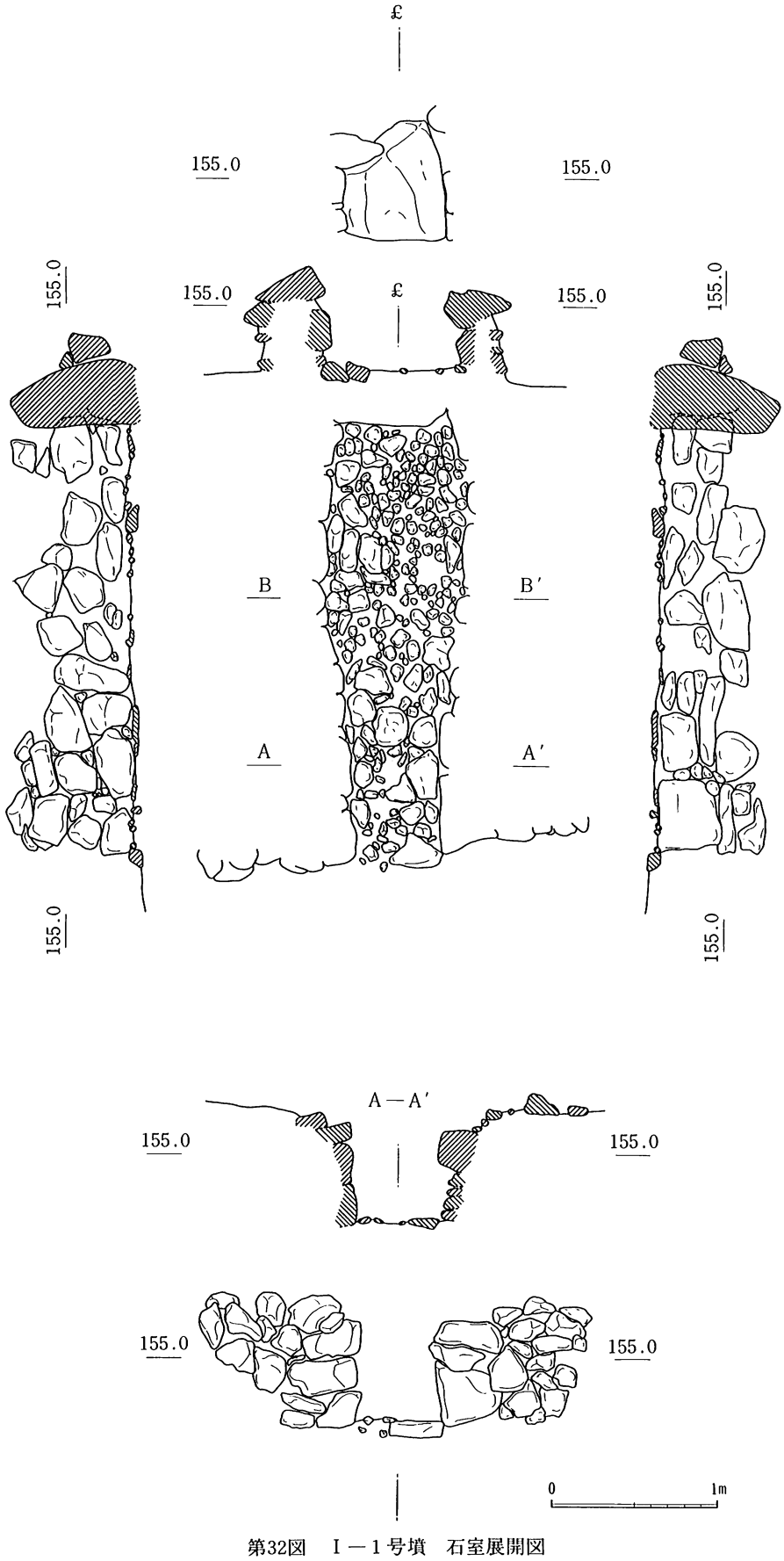
出土遺物は全く検出されなかった。



第30図　Ⅰ－1号墳　墳丘図



第31図　Ⅰ－1号墳　閉息部展開図



第32図　Ⅰ－1号墳　石室展開図

（7） Ｉ－２号墳

位　置　Ｆ－４号墳の南に位置し，西にＩ－３号墳が近接して存在している。東にはＩ－４号墳が位置している。

墳　丘　15ｍ程の円墳になるものと考えられる。最初，周堀の形状がはっきりせず，周堀埋土上層にＢ軽石が確認できたことによってかろうじて周堀を追うことができた。したがって周堀の形状や墳丘は非常に不定形であり，周堀などは東側においては大きく張り出している。

主体部　奥壁と大部分の側壁は除去されており，僅かに側壁の根石と羨道部側壁の一部が確認されたにすぎない。

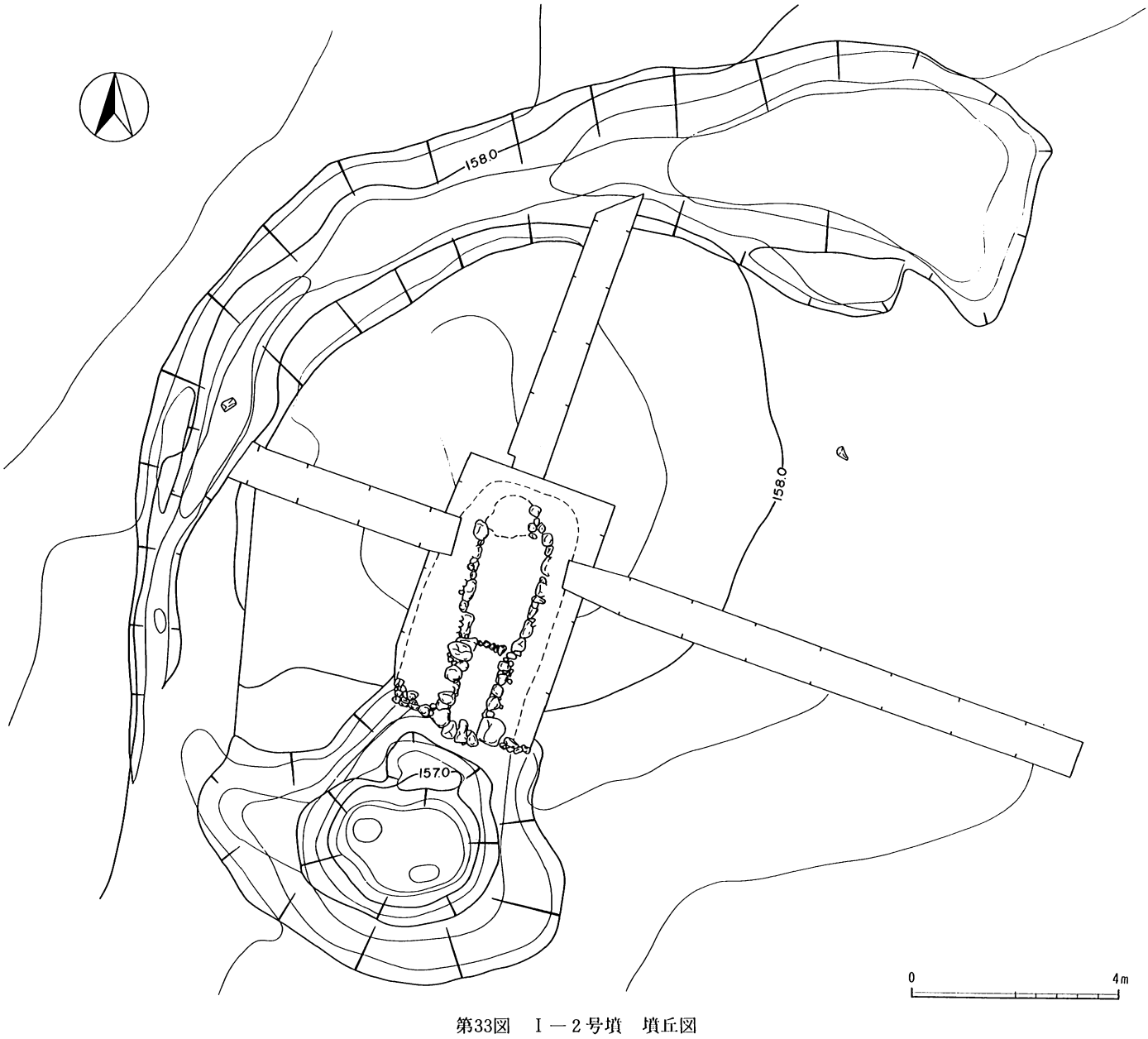
石室は「掘り方」を有する安山岩自然石の乱石積による両袖型の横穴式石室である。用材は本古墳群内の他の石室に比べ小さな石を使用している。又，石室裏込めに白色粘土を用いていたことは特記されよう。

主軸方向はＳ－18°－Ｗ，主軸長は3.92ｍを測る。

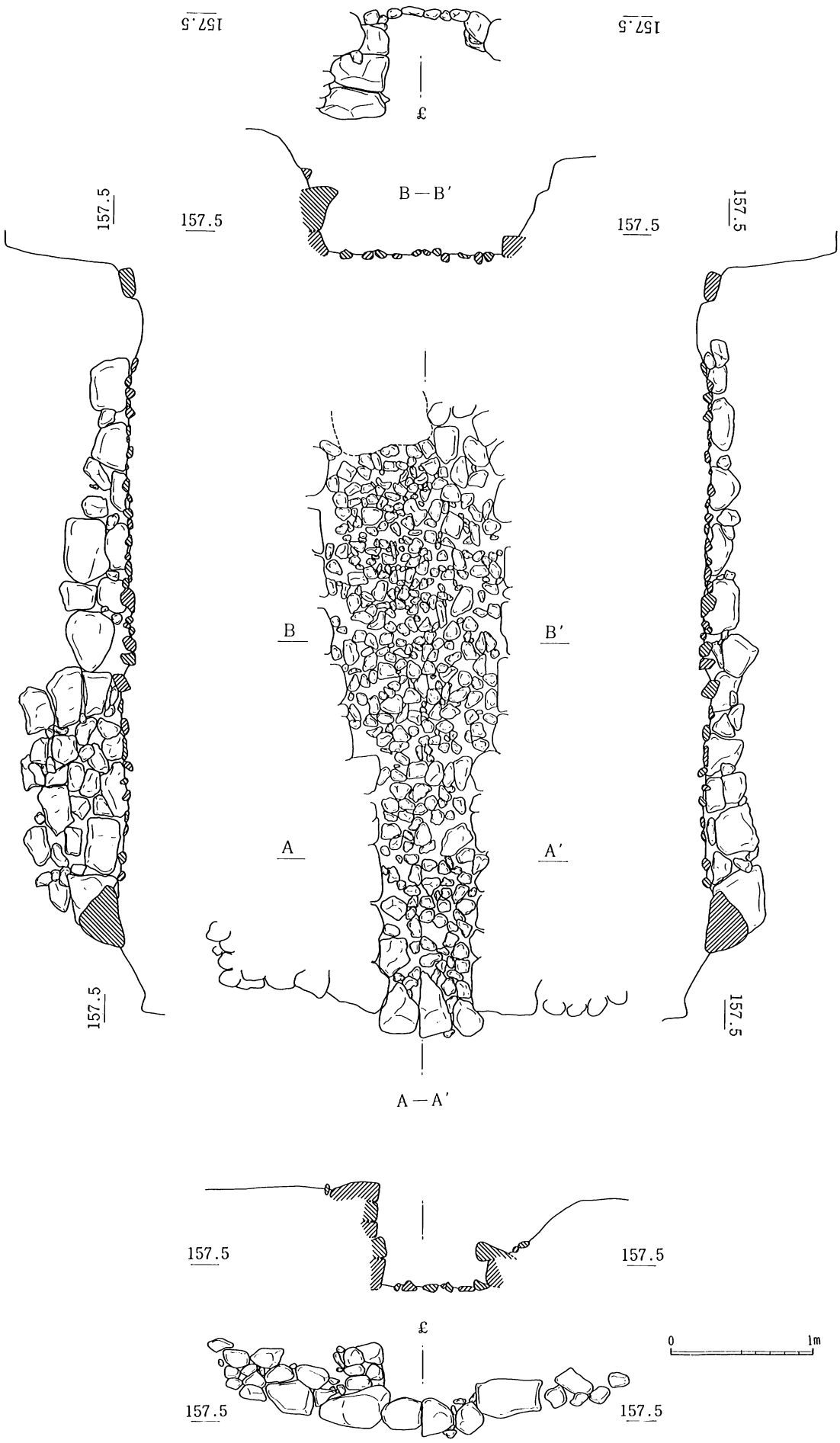
玄室は長さ2.20ｍ，幅1.22ｍを測る。床面には敷石が敷かれていた。羨道との境には玄門が付設されているが右壁のそれは不明瞭である。しかし，玄室の右壁はＩ－１号墳に見られたような緩やかな胴張を持っている。反面，左壁は直線的であり，３石で構成された玄門を付設している。

羨道は長さ1.72ｍ，幅0.64ｍを測る。

石室入口部には前庭状遺構が付設されている。

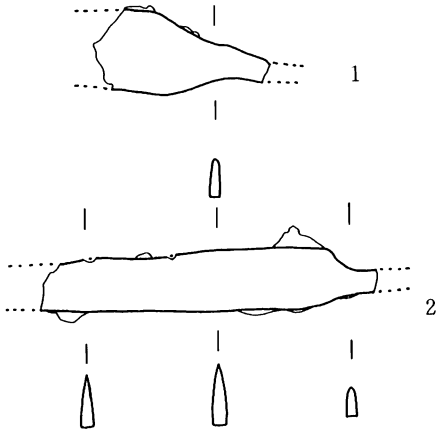


第33図　Ｉ－２号墳　墳丘図



第34図　1－2号墳　石室展開図

出土遺物　石室内より刀子片２点が検出されている。又，前庭状遺構埋土中より土師器の坏７点，須恵器のフラスコ形の長頸瓶１点と大型甕１点が出土している。フラスコ形長頸瓶は胎土は精選され，焼成も堅致であり，器表面には自然釉が降っている。大型甕は器高48.6cm，口径30.2cm，胴部径51.2cm，外面は格子風，内面は同心円状の叩きで整形されている。



（８）　Ｉ－３号墳

位　置　Ｉ－２号墳の西側に近接している。

墳　丘　周堀を含めた主軸方向の長さ18.43m，主軸に直交方向の長さ16.97mを測るが周堀を除いた墳丘だけの規模は主軸方向10.8m，主軸に直交方向13.8mを測る南北に潰れた円形を呈する円墳である。

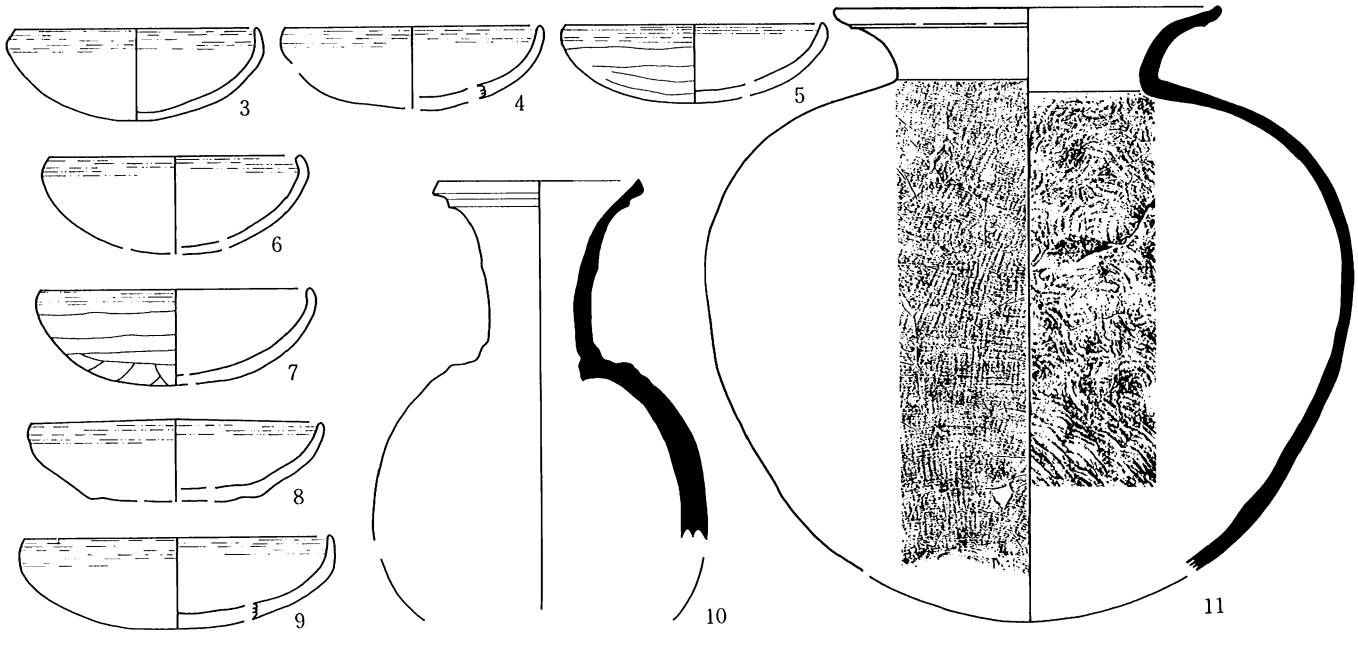
周堀の掘り方も不定形であり，石室北側の周堀は大きく脹らんでいる。このように周堀の形状が不均一であり，しかも大きく脹らむような箇所を有する古墳が本古墳群には顕著である。Ｆ－４，Ｉ－２，Ａ－１号墳などがそれである。

本墳からは葺石や埴輪は検出されなかった。

主体部　「掘り方」を有する安山岩自然石による乱石積の両袖型横穴式石室である。本古墳群の中にあっては比較的良く残っていた石室である。

石室の主軸方向はＳ－３°－Ｗ，長さ3.40m，を測る。

玄室は長さ1.81m，幅1.18mを測る。奥壁は大きな石と小さな石３石の４石で構成されている。羨道との境には玄門と框石とが付設されている。玄門は３石で構成されている。框石は偏平な円礫２石を用いている。床面には敷石がみとめられるが，それも右壁よりの半分のみであり残りの左壁よりには小円礫がまばらに敷かれていた。しかし，後に床面の半



第35図　Ｉ－２号墳　遺物実測図

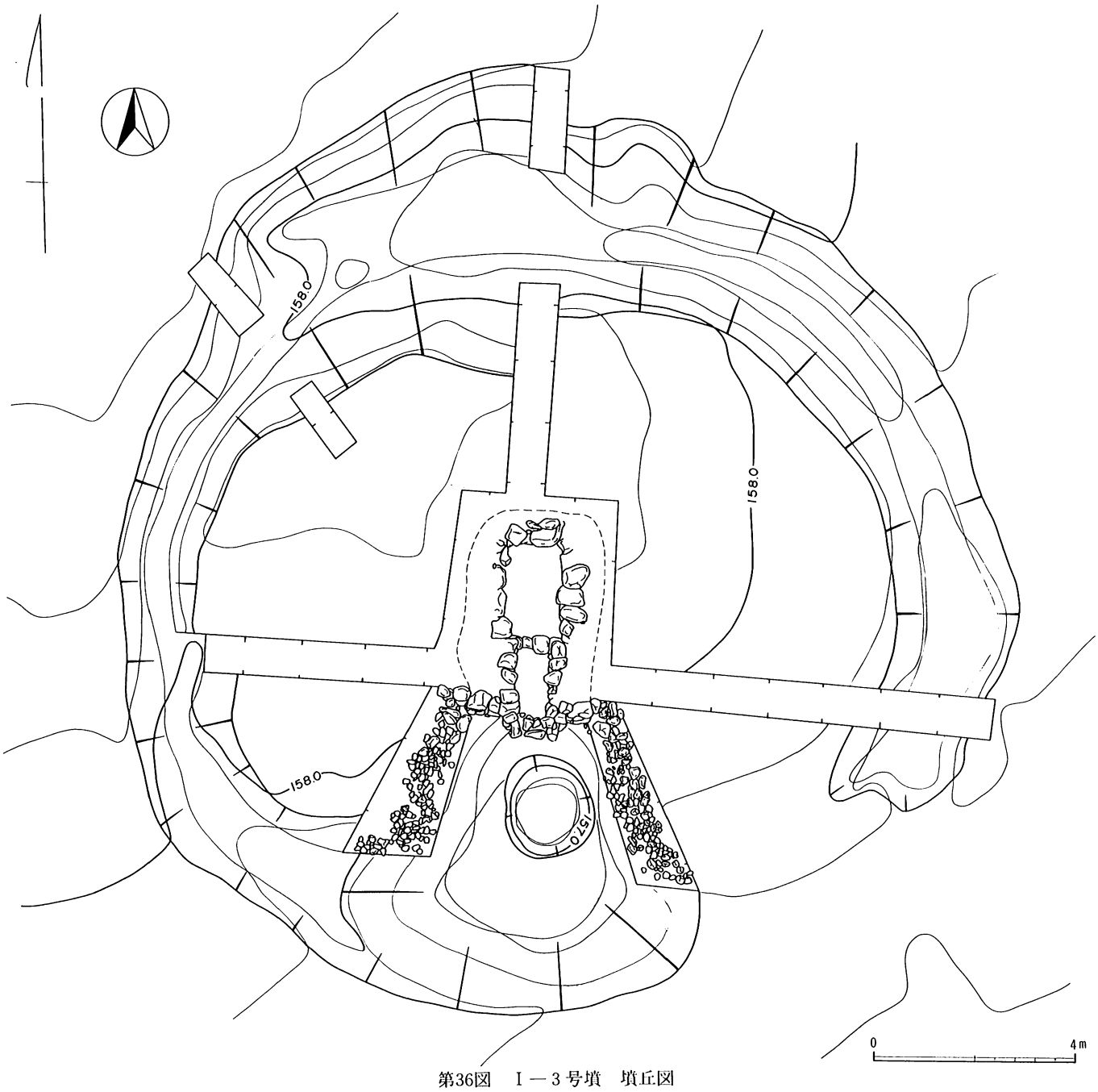
裁を実施したところ左壁よりの現床面下10cmのところより敷石が検出された。これは第37図でみるように「掘り方」の段階ですでに床面が平らに整形されていないことを示している。このような現象はＦ－４号墳にも共通する。

羨道は長さ1.59m，幅0.72mを測る。羨道入口には閉塞の状態が観察できた。この閉塞は入口部より前に一石を並べ置き，そこに一石を横位に置いて閉塞としている。ちょうど羨道部が入口線より前に突き出るような形になっている。

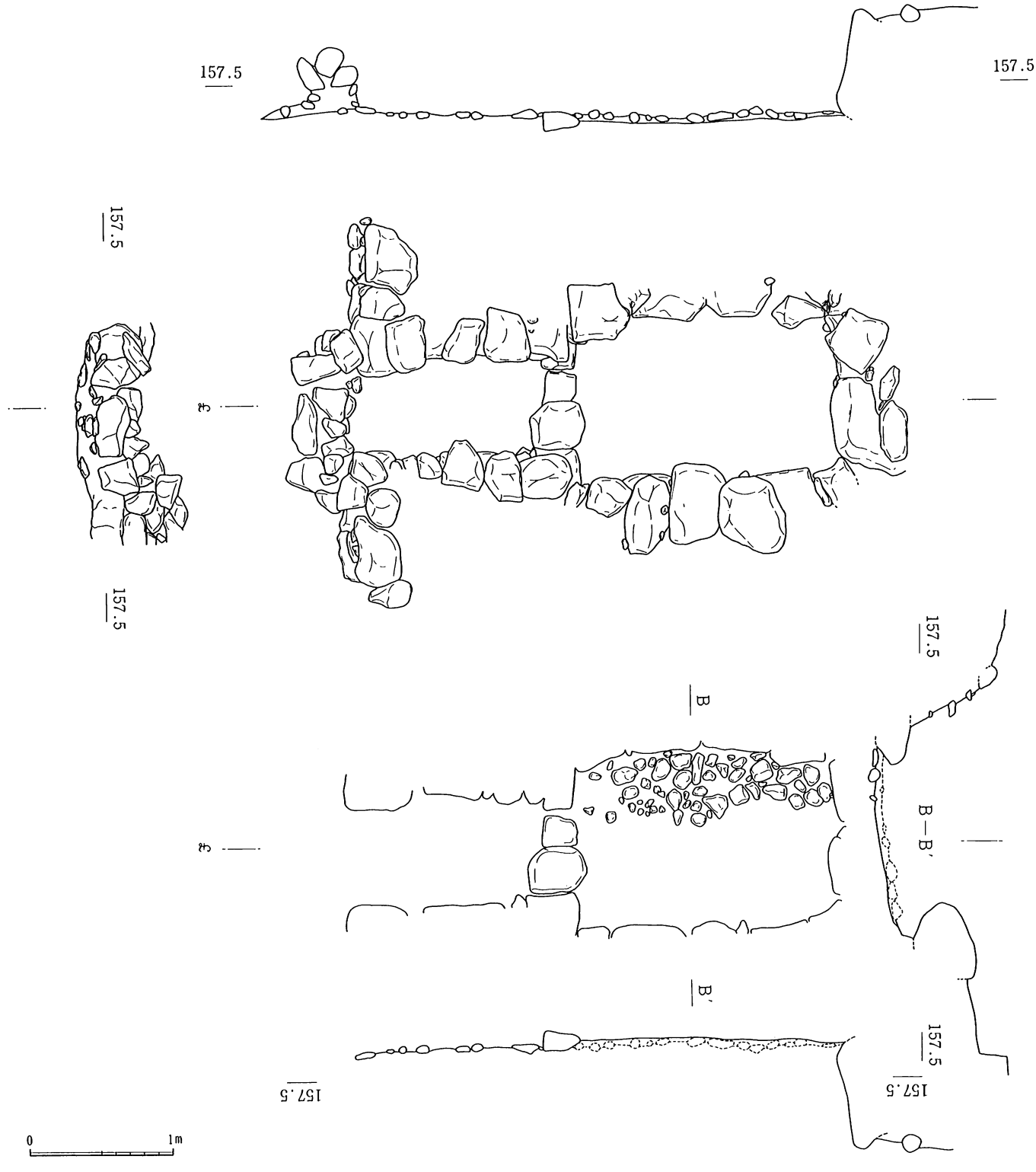
入口部前には前庭遺構が良く残っていた。規模及び形状は奥行2.7m，幅は入口部で2.4m、前で4.4mを測る台形状を呈している。用材は拳大から人頭大の礫を用いて，墳丘を削った法面に巧みに張り付けている。

前庭部埋土上層には大小の円礫が含まれていた。

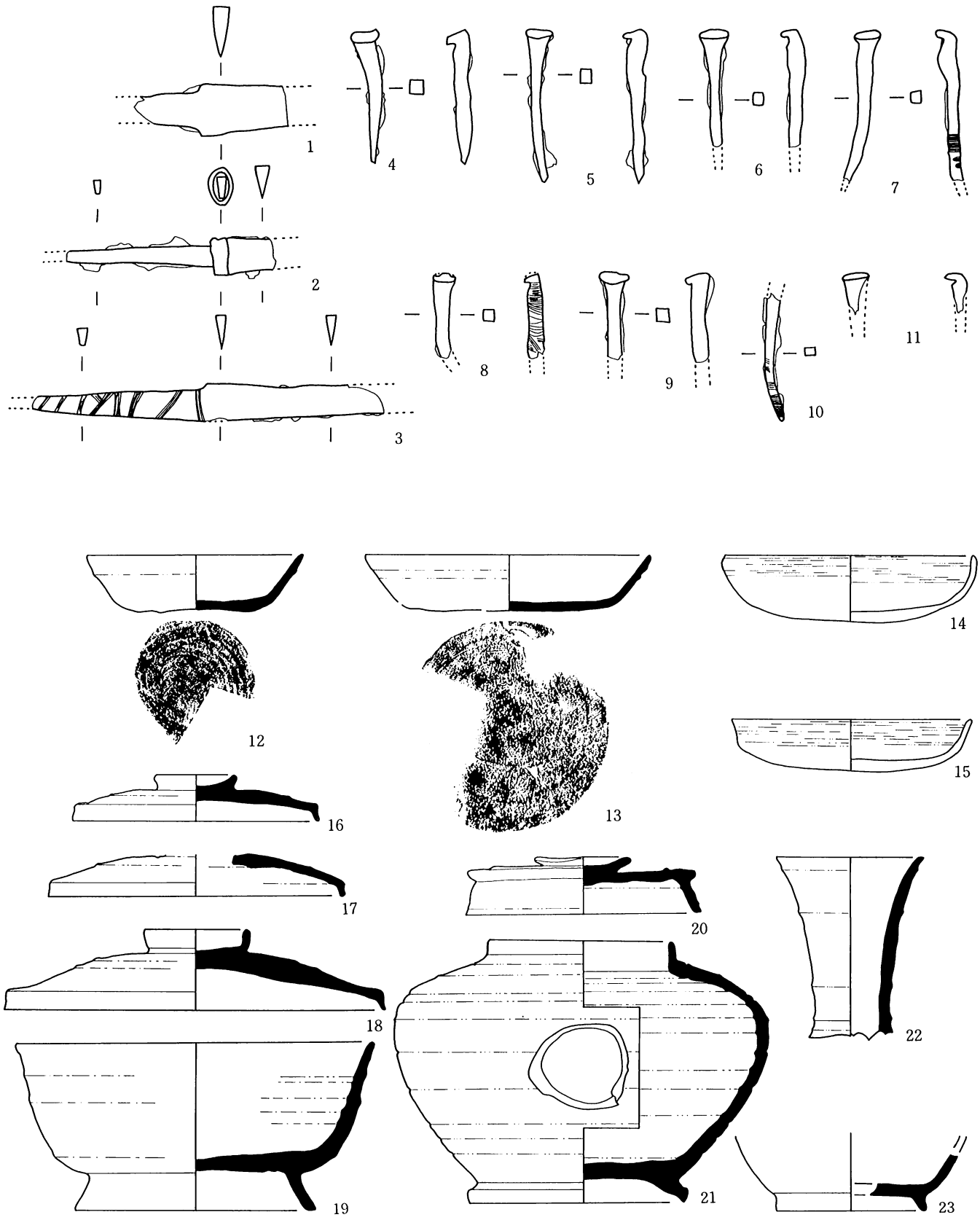
出土遺物　石室内より刀子３点，鉄釘９点が検出されている。又，前庭部埋土中より須恵器の坏２点，蓋２点，大型の蓋付坏１点，蓋付の短頸壺１点，長頸壺１点，土師器の坏２点が検出されている。このうち，短頸壺は胴部中央に焼成後穿孔による孔があけられている。



第36図　Ｉ－３号墳　墳丘図



第37図　Ⅰ－3号墳　閉塞部展開図



第39図　Ⅰ－3号墳　遺物実測図

（9） Ⅰ－4号墳

位　置　Ⅰ－2号墳の東50mのところに位置していた。

墳　丘　ほとんど削平され周堀の形状も明瞭ではないが直径10m程の円墳になるものと考えられる。

周堀は前庭状遺構から続く西側の一部と東北の一部が確認できたにすぎない。

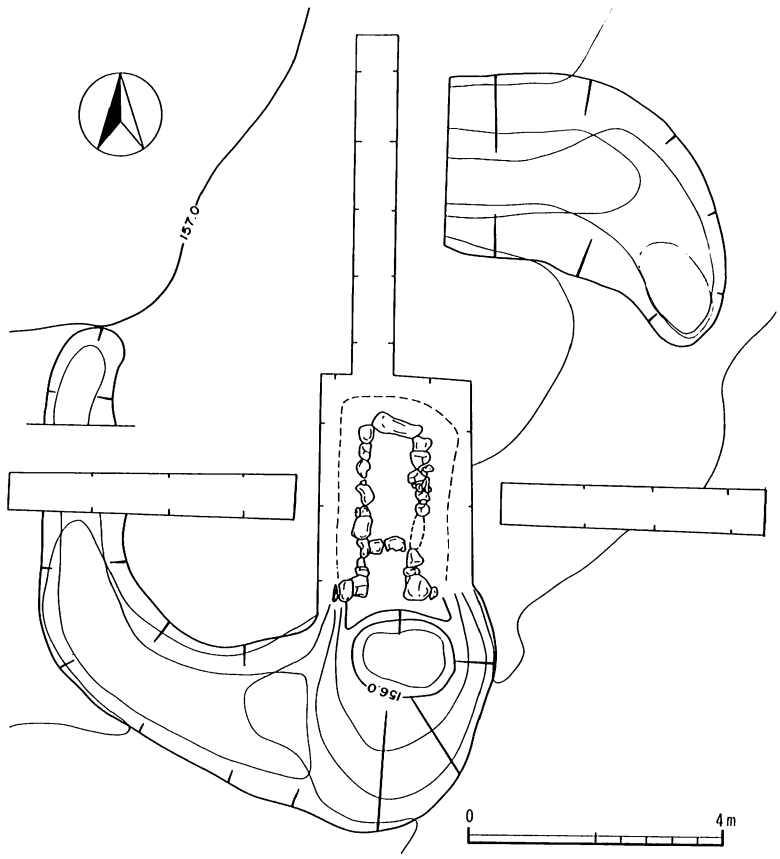
葺石や埴輪はない。

主体部　後世の攪乱によりほとんどの石を抜かれていたが「掘り方」を有する安山岩自然石による乱石積の袖無型横穴式石室が推定される。

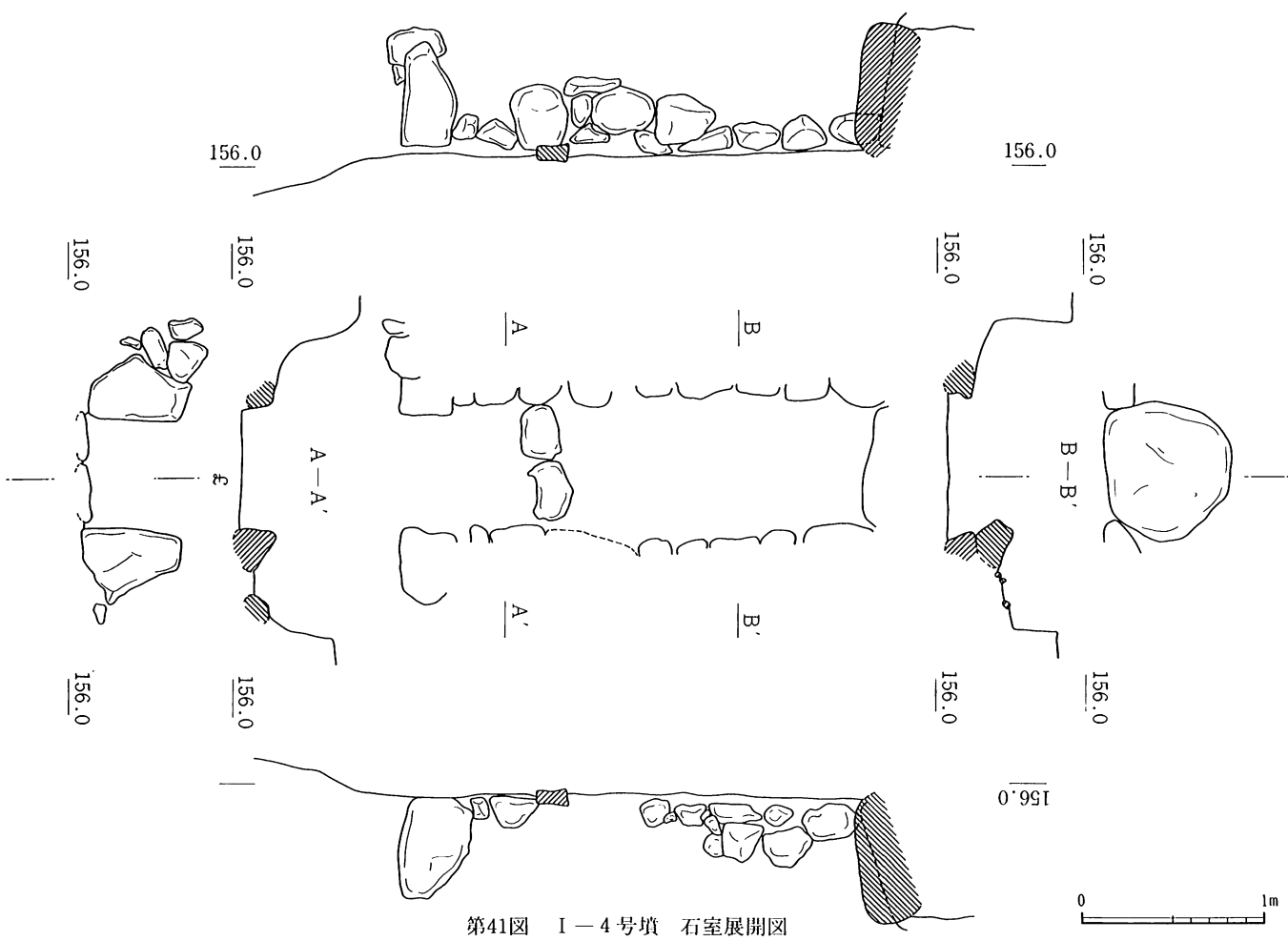
主軸方向はS－5°－Wを示す。

石室は全長2.56m，幅0.66mを測る小型のものである。奥壁は一石構成，床面には礫等は敷かれていなかった。ただ，偏平石二石を用いた框石が置かれていた。当然，玄門は存在しないが入口部には細長い石を縦位置に用いた羨門状のものが見られる。

出土遺物は全く検出されなかった。



第40図　Ⅰ－4号墳　墳丘図



第41図　Ⅰ－4号墳　石室展開図

(10) A－1号墳

位　置　発掘対象区域の西端部に位置しており，すぐ南にはD－1号墳が近接して存在している。

墳　丘　東西方向18.97m，南北方向16.37mを測る円墳である。

周堀は全周せず南東部分で切れている。又，規模も一定していない。特に東側では上幅3.50m，下幅1.24m，深さ2.10mを測る土壙状に極端に広がる箇所がある。ここの埋土の状態は周堀の他の箇所のそれと全く同一であり，前後の切り合いを想定することはできない。このような状態はF－4号墳にも見られた土壙状落ち込みの状況に共通している。

葺石や埴輪は検出されなかった。

主体部　「掘り方」を有する安山岩の自然石乱石積による両袖型横穴式石室である。

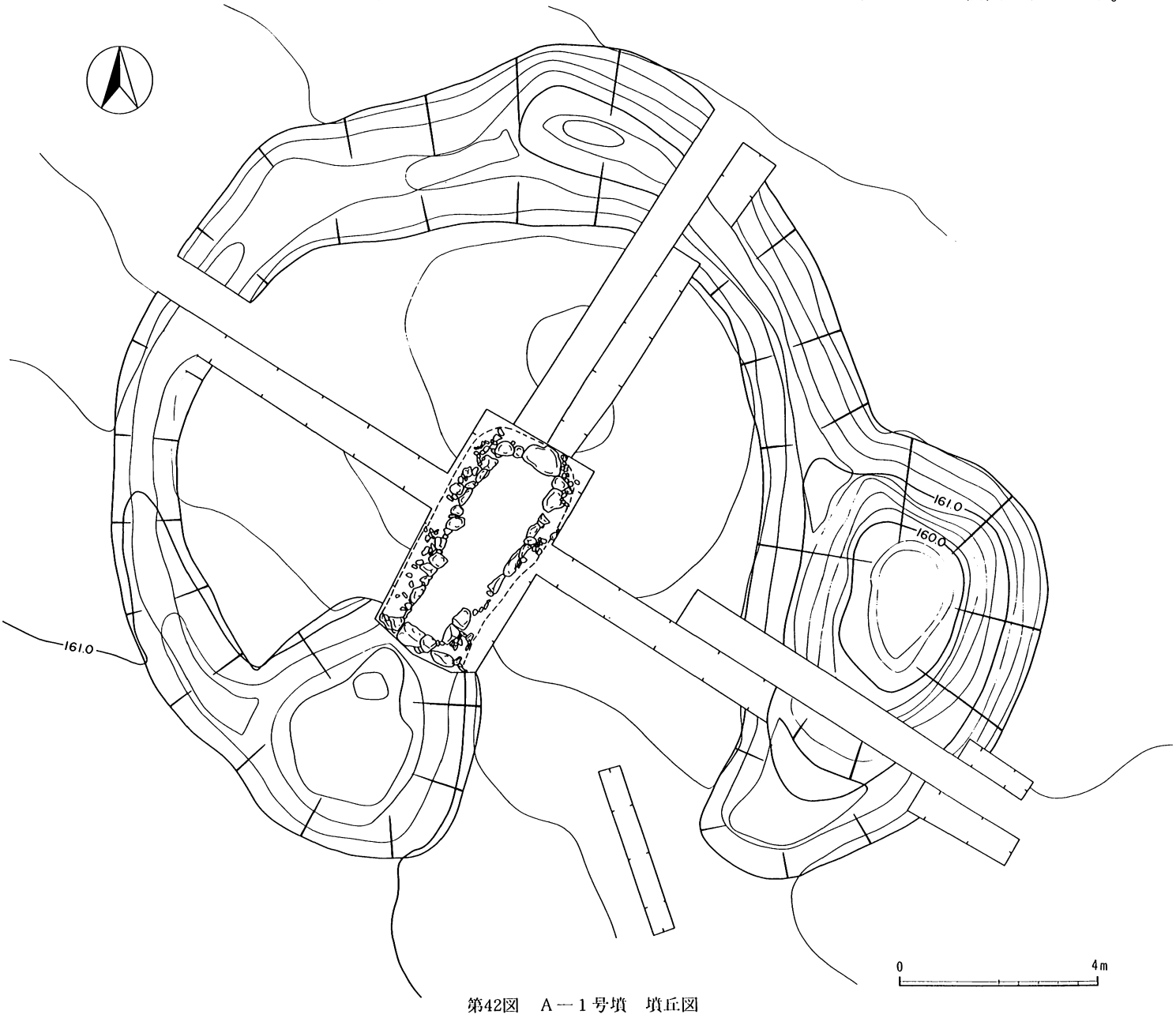
主軸方向はS－33°－W，長さ4.40mを測る。

玄室は長さ2.60m，幅1.50mを測る。左右の壁は僅かではあるが緩い弧を描いている。床面は敷石が施されているが，精査の結果，上下2枚の面を確認することができた。奥壁は一石構成であるが，壁との間にできた隙間には大小の円礫を充塡している。羨道との境には羨門が付設されているが左壁のそれは攪乱によって除去されている。框石はない。

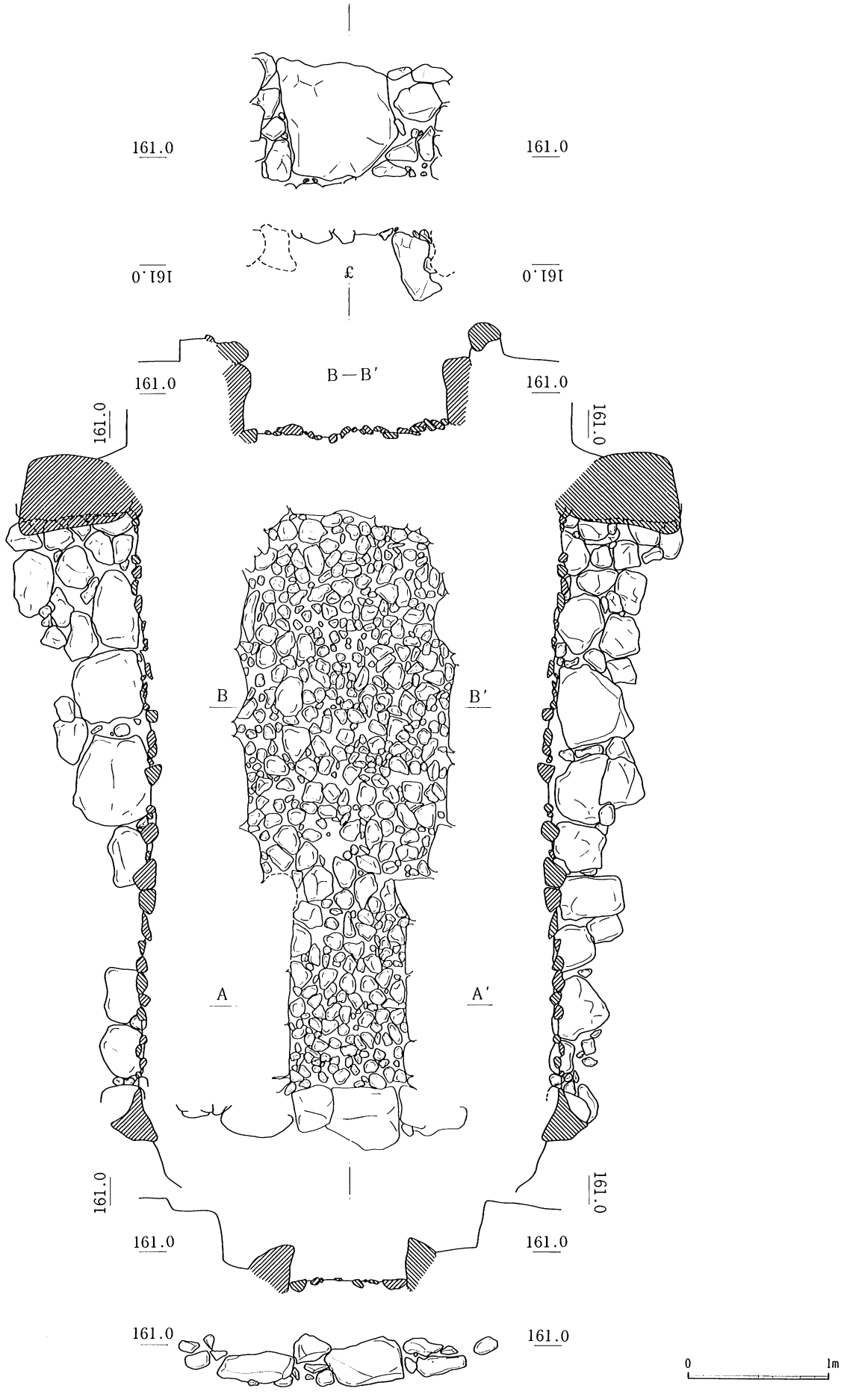
羨道は長さ1.80m，幅0.83mを測る。入口部に向かって緩やかに広がっている。

石室入口前には前庭状遺構が付設されている。

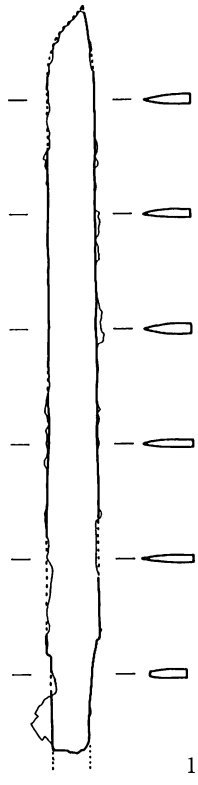
出土遺物　石室内より直刀が1振検出されている。



第42図　A－1号墳　墳丘図



第43図　A－1号墳　石室展開図



第44図　A－1号墳　遺物実測図

(11)　D－1号墳

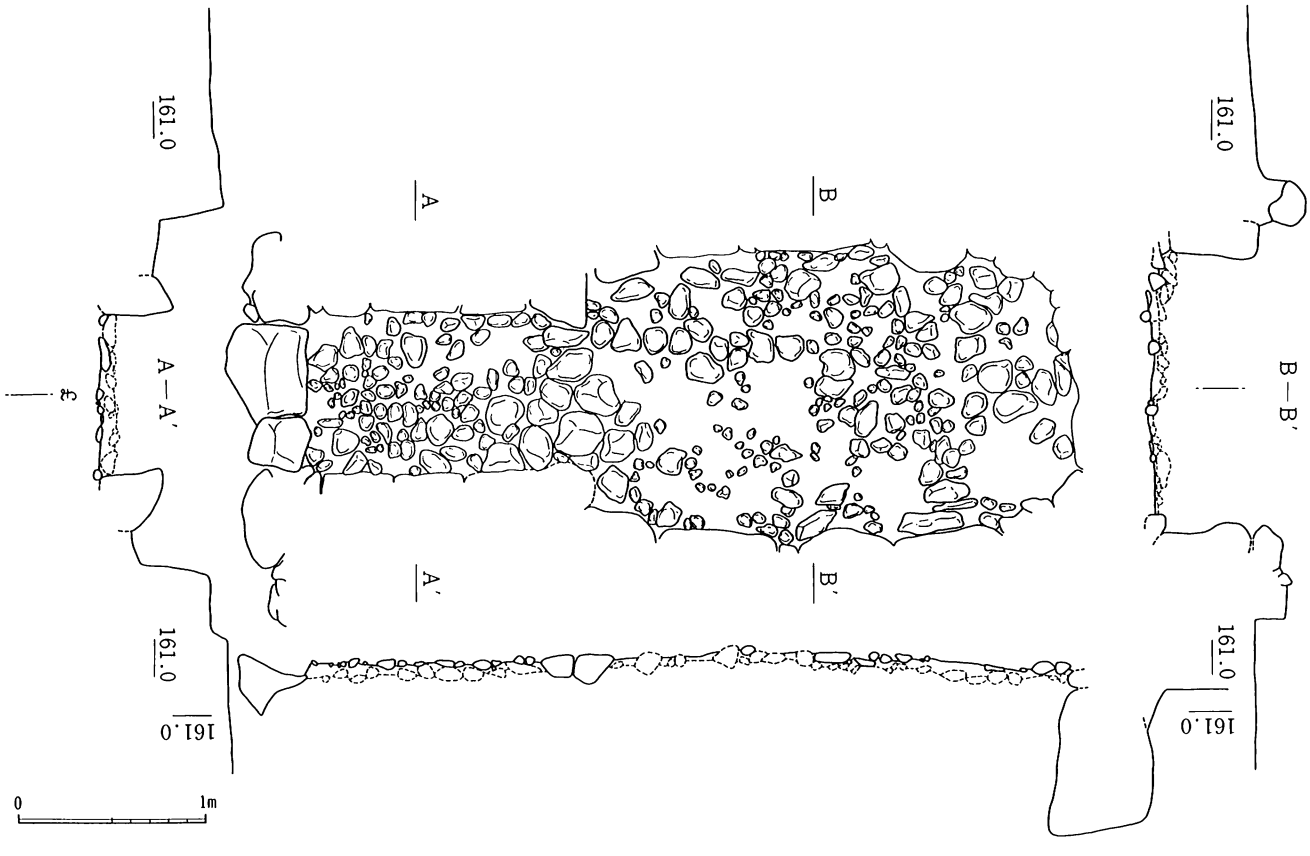
位　置　発掘対象地区の西端部に位置する。A－1号墳が北に近接して位置し，南にはD－2号墳が存在している。

墳　丘　規模は南北方向の長さ16.36m，東西方向で17.31mを測る円墳である。周堀は全周せず僅かに南西隅で切れている。周堀は上幅1.67m，下幅0.3mと比較的均一に掘られている。

石室前には平面形が台形を呈する前庭状の掘り込みが良く残っている。

主体部　ほとんど側壁は除去されていたが，羨門を含めた羨道部の根石と床面の敷石が残存していた。又，石の据え方が良く残っていた為，石室の形状を想定することができた。

石室は「掘り方」を有する安山岩自然石による乱



第45図　A－1号墳　床面図第2層

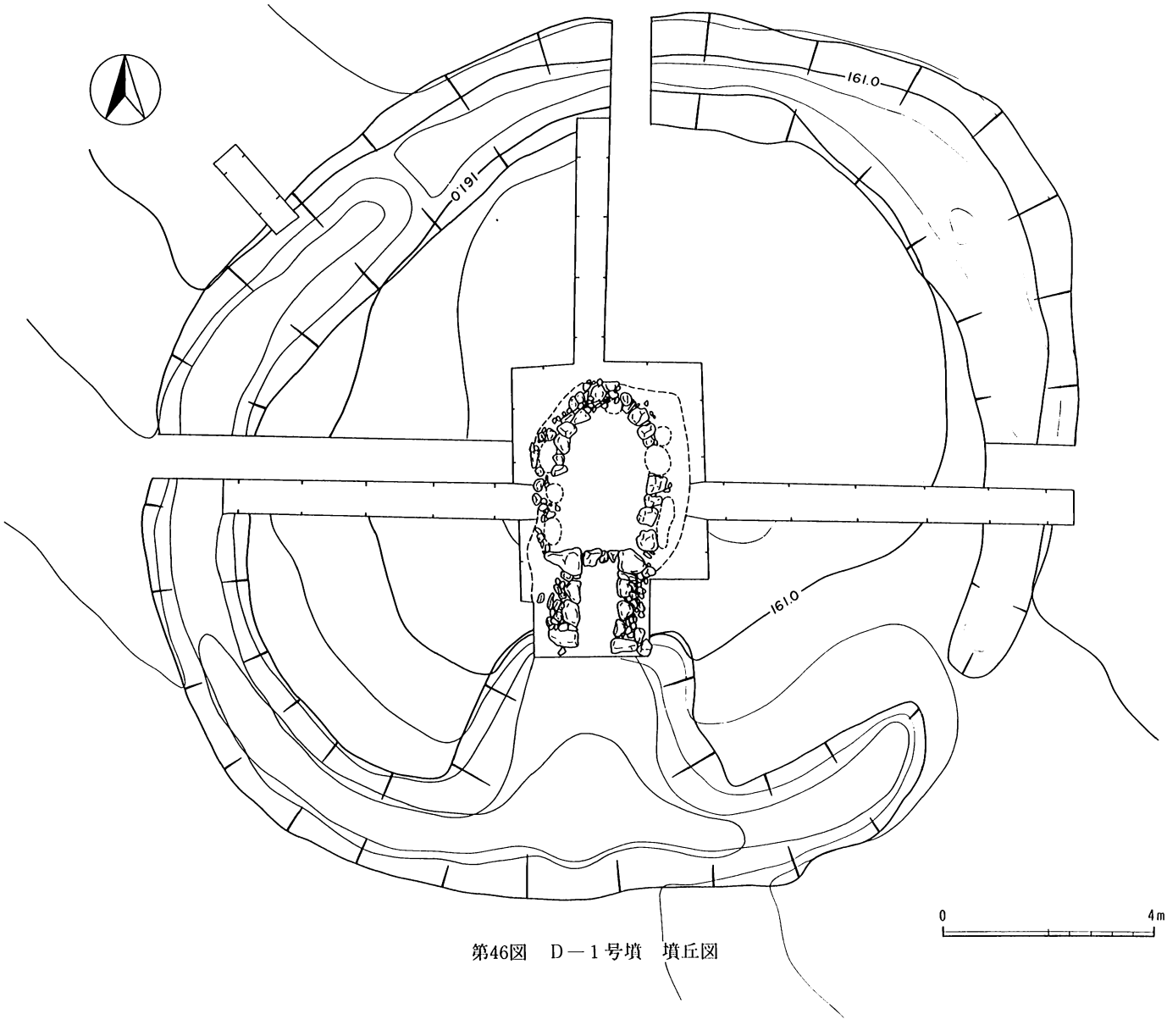
石積の両袖型横穴式石室であると考えられる。

主軸方向はＳ－３°－Ｗを示し，主軸長は4.30mを測る。

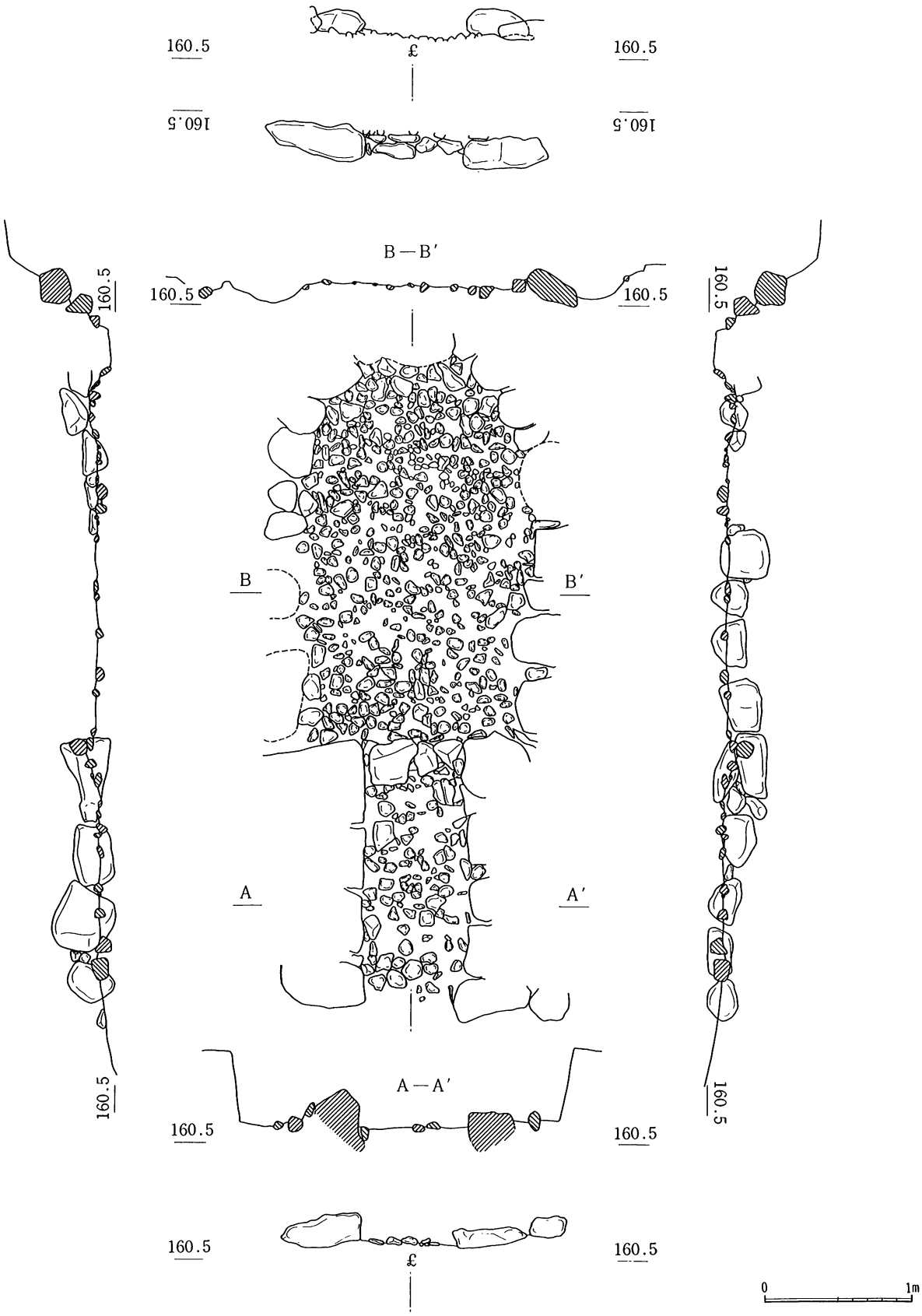
玄室は長さ2.5m，幅1.5mを測る。左右の壁は僅かに胴張りを有するものと思われる。奥壁部分も緩い弧を描く。羨道との境には玄門と３石からなる框石が置かれている。羨門は数石で構成されるものと思われる。羨道は長さ1.80m，幅0.7mを測る。右壁は緩やかな弧を描くが左壁は直線的である。

出土遺物　石室内より直刀１振，それに附属すると考えられる刀装金具類４点，金環１点が検出された。前庭部からは須恵器の大型甕１点，高台付坏１点，土師器の坏１点が検出された。

大型甕は高さ45.8cm，口径25.1cm，胴部径44.6cmを測るものであり，口縁部は折り返し口縁状を呈する。器面特に内面は非常に荒れている。外面調整は平行叩きの上に指撫でが施されている。



第46図　Ｄ－１号墳　墳丘図



第47図　D－1号墳　石室展開図

(12)　D－2号墳

位　置　発掘対象地区の西端部に位置する。D－1号墳の南東部にあたる。

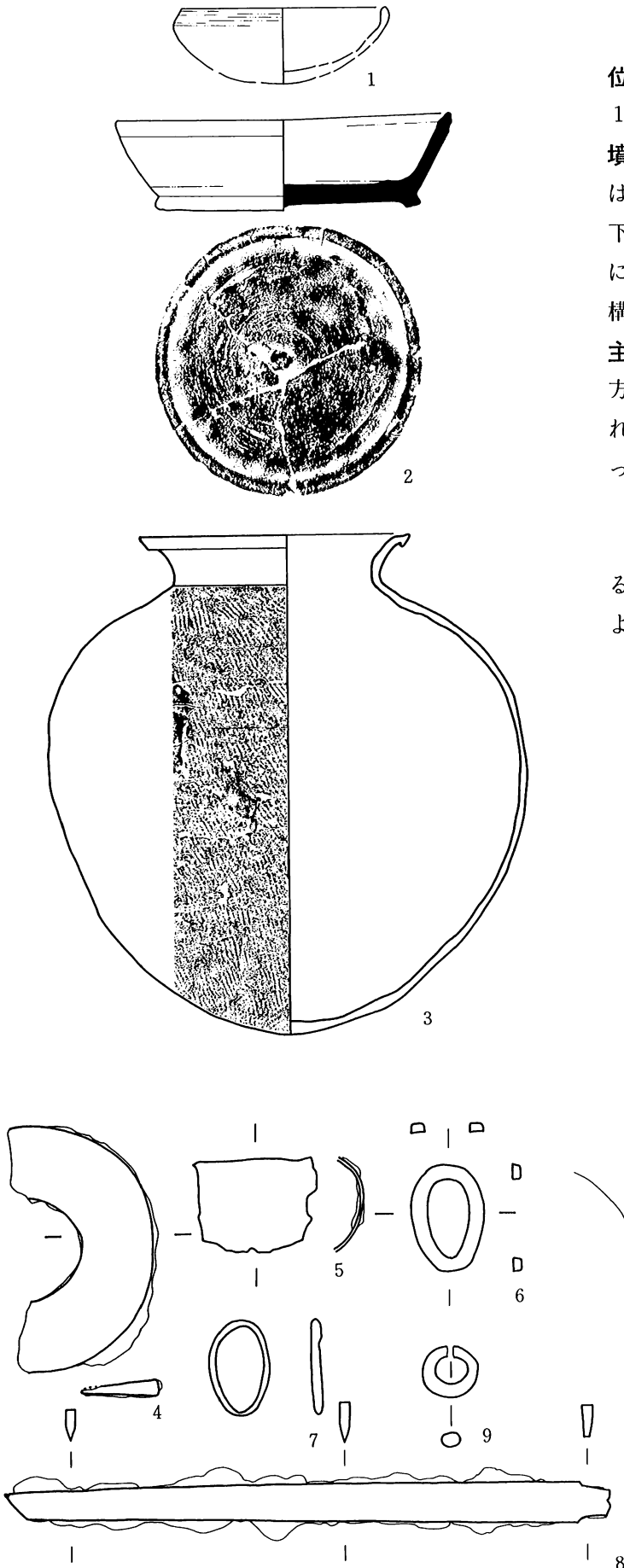
墳　丘　直径8mを測る小型の円墳である。周堀は全周せず西側では途切れている。周堀は上幅1m，下幅0.5mを測り，深さも0.2m前後と浅い。石室前には直径3m，深さ0.6m程の円形を呈する前庭状遺構が付設されている。

主体部　袖無型横穴式石室である。明瞭な「掘り方」を有しない。したがって裏込め等の処置も施されない。むしろ，石の使い方などからは小礫郭と言った方が適切かもしれない。

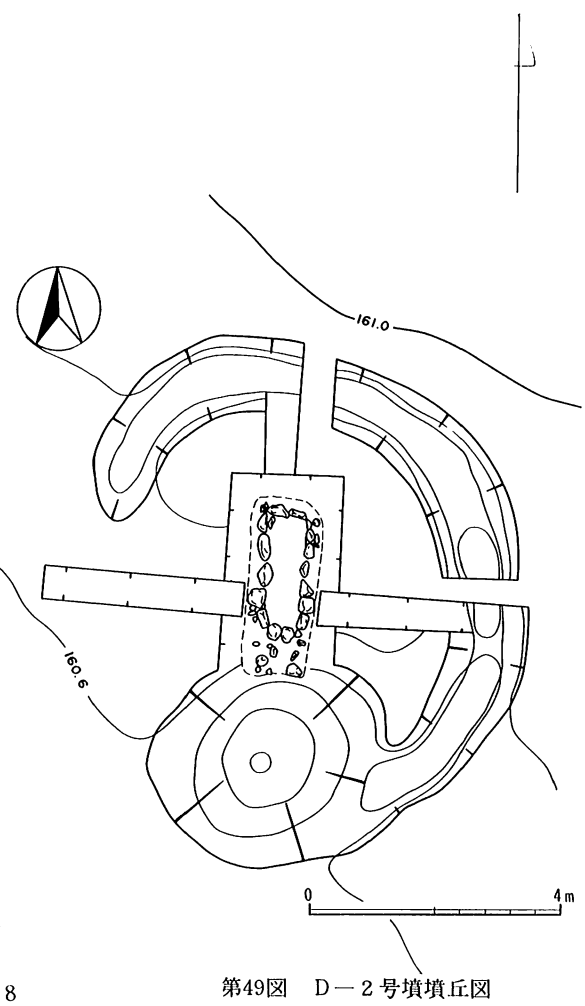
主軸方向はS－5°－Wを示す。

石室の全長は2.5m，幅0.55m，羨道は不明瞭であるが框石と考えられる2石が置かれている為，それより前を羨道部として捉えられよう。

遺物は全く検出できなかった。



第48図　D－1号墳　遺物実測図



第49図　D－2号墳墳丘図

(13)　E－1号墳

位　置　A，D区とF，I区との間に単独で存在していた。北西方向約50mにはE－2号墳が位置している。

墳　丘　石室の北側にのみ周堀を巡らすものであり，南北方向で11.81mを測る。周堀は上幅2.15m，下幅1.13mを測り，深さも0.8mとしっかりと掘られている。

石室の前には前庭状の掘り込みが認められる。

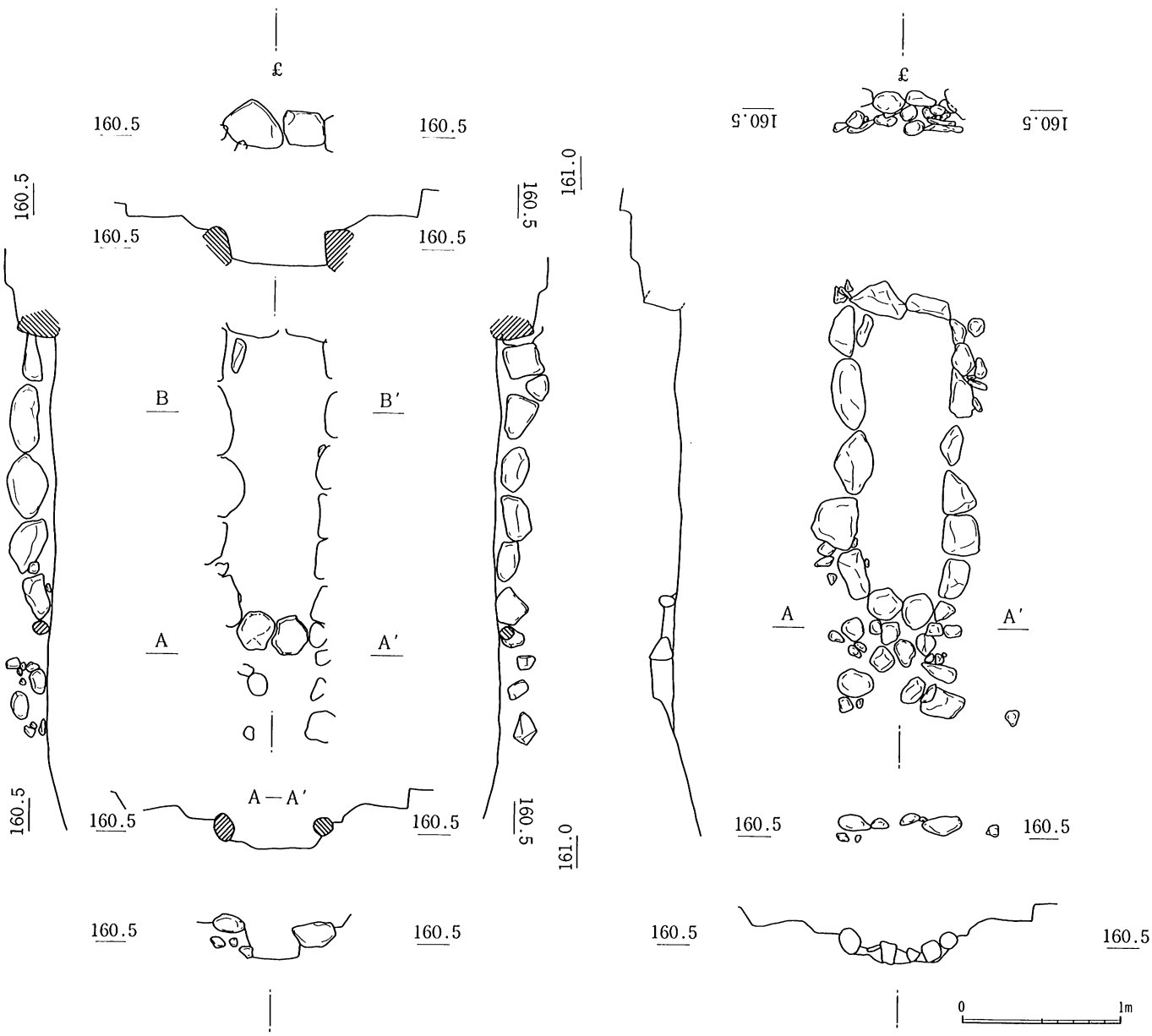
主体部　「掘り方」を有する安山岩自然石の乱石積による両袖型横穴式石室である。

主軸方向はS－2°－W，長さは2.91mを測る。

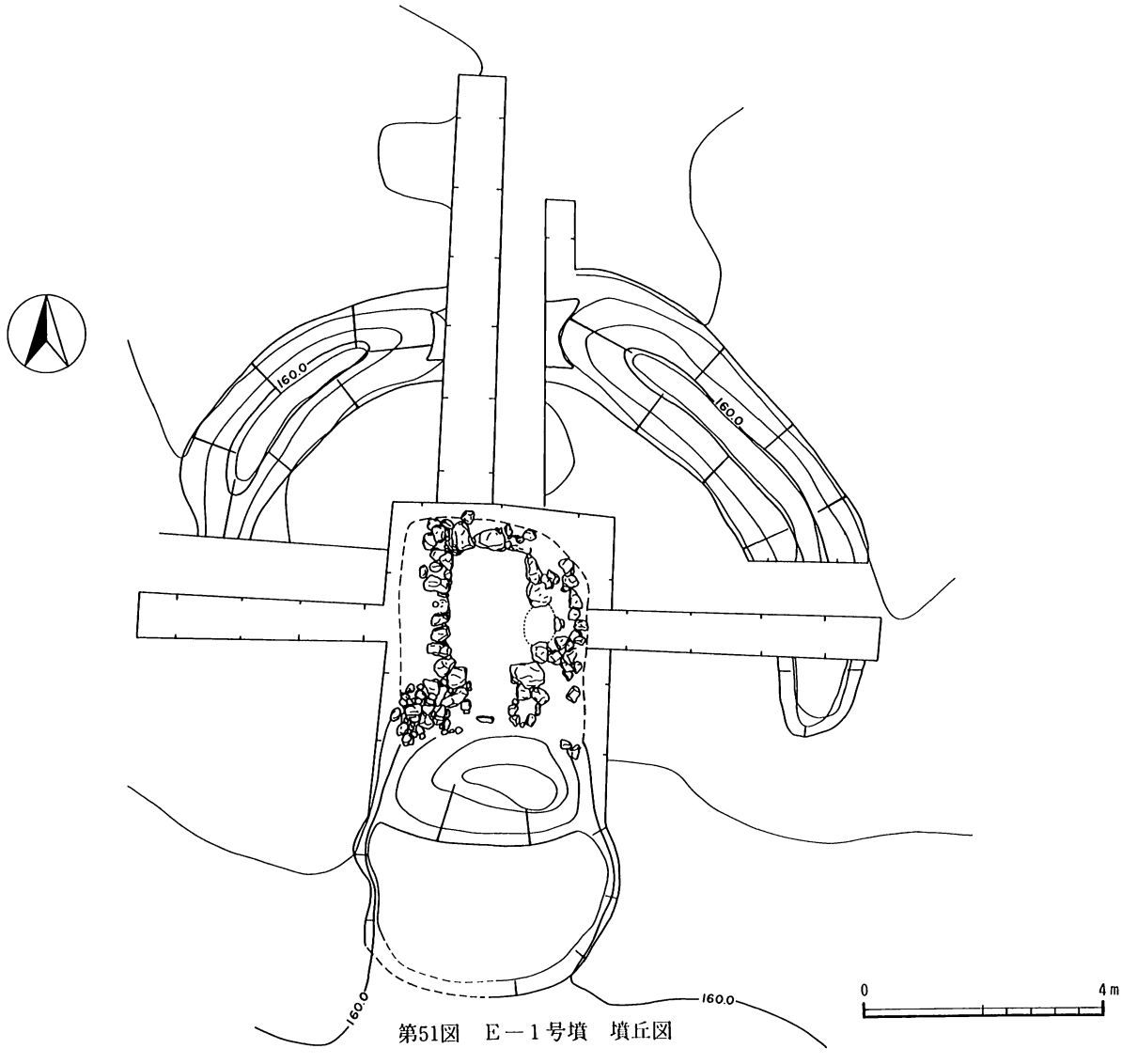
玄室は長さ1.97m，幅1.38mを測り，床面には小円礫が敷かれていた。奥壁は3石で構成されている。羨道との境には玄門が付設されている。

羨道は確認し得た長さで0.94mと極端に短く，幅は0.77mを測る。

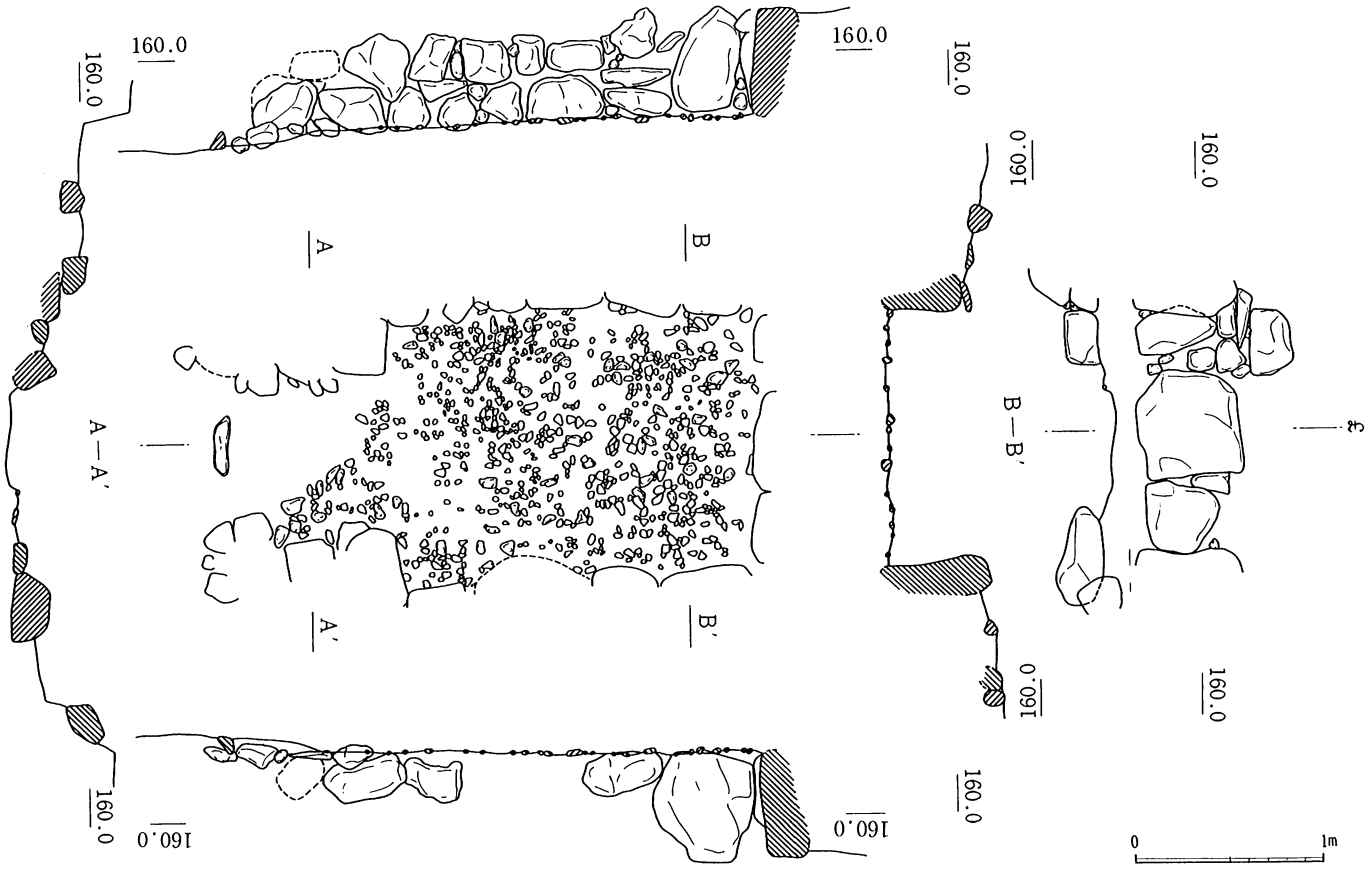
出土遺物　石室内より刀子5点，鉄鏃2点，刀装金具1点が検出されている。又，前庭部からは還元炎焼成による土師質の坏1点が検出されている。底部は手持ちの篦削りである。



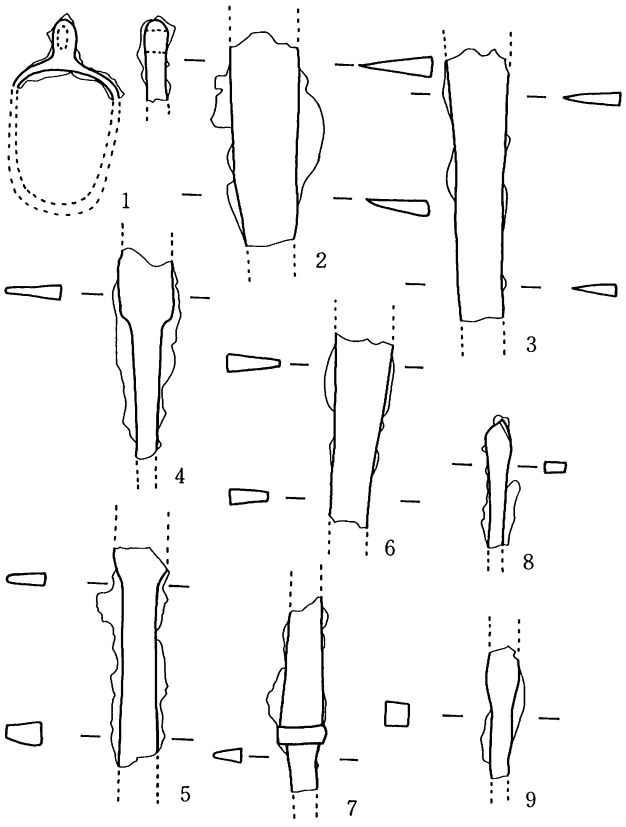
第50図　D－2号墳　石室展開図、閉塞部展開図



第51図　E－1号墳　墳丘図



第52図　E－1号墳　石室展開図



(14)　E－2号墳

位　置　南にE－1号墳，東20mのところにはF－1号墳が位置している。

墳　丘　石室の北側にのみ周堀を巡らすものである。南北の長さ14.8mを測る。周堀は上幅2.62m，下幅0.6m，深さ0.4mを測る。周堀内埋土上面には浅間B軽石の純層が見られた。

石室前には直径5.4mを測る前庭状の円形を呈する掘り込みが存在する。

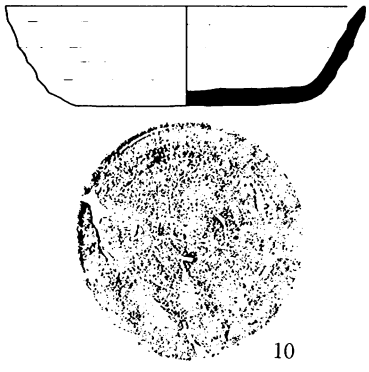
主体部　本古墳群中，I－1号墳とならんで残存状態の良好な古墳である。

石室は「掘り方」を有する安山岩自然石の乱石積による両袖型横穴式石室である。主軸方向はほぼ座標北を示し軸長は3.07mを測る。

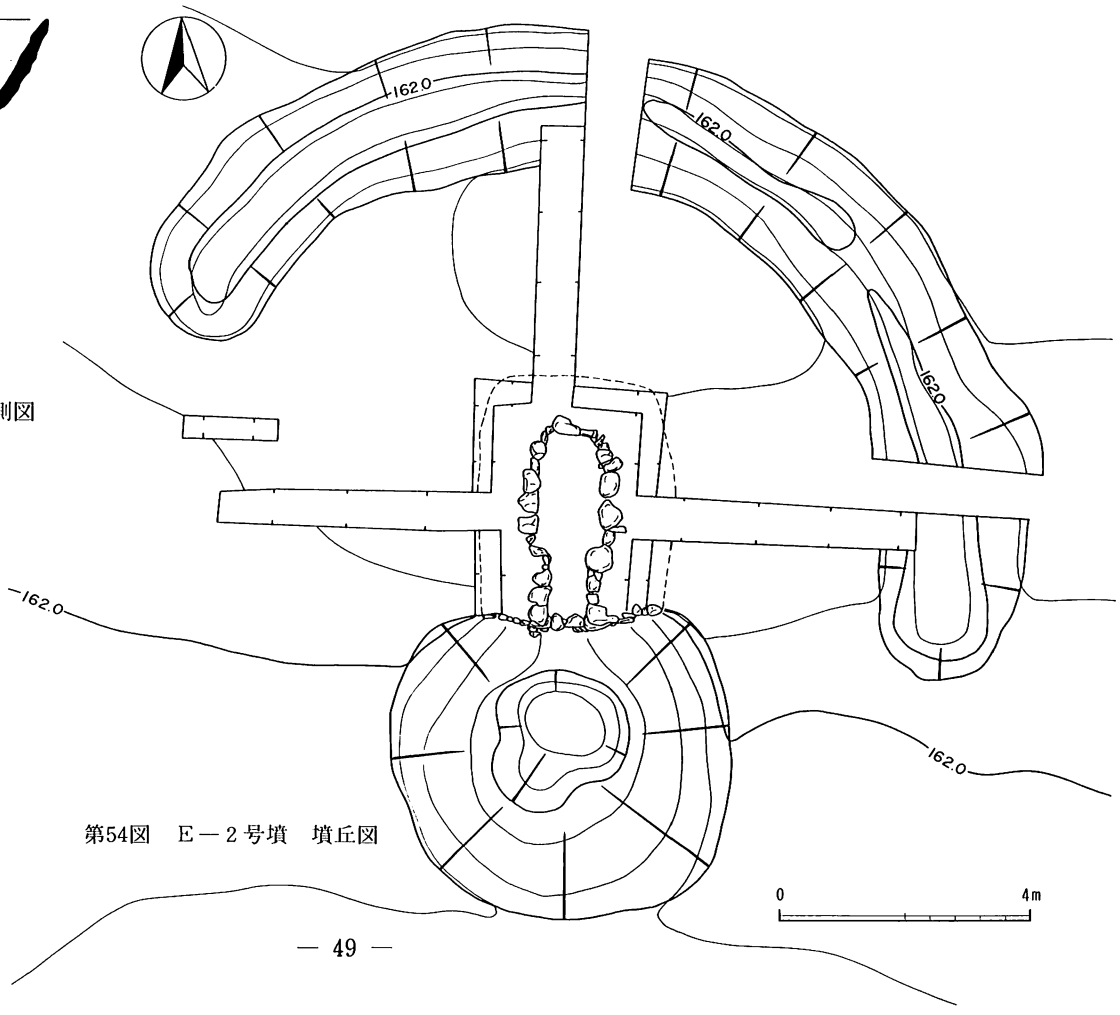
玄室は長さ1.96m，幅1.17mを測り，右壁は緩やかな弧を描くが，左壁はあまり顕著ではない。奥壁は1石構成であり，床面には敷石が施される。床面は奥壁に向かってやや狭くなる。羨道との境には玄門が付設されている。

羨道は長さ1.38m，幅0.72mを測る。羨道部の両壁はどちらも緩やかな弧を描いている。

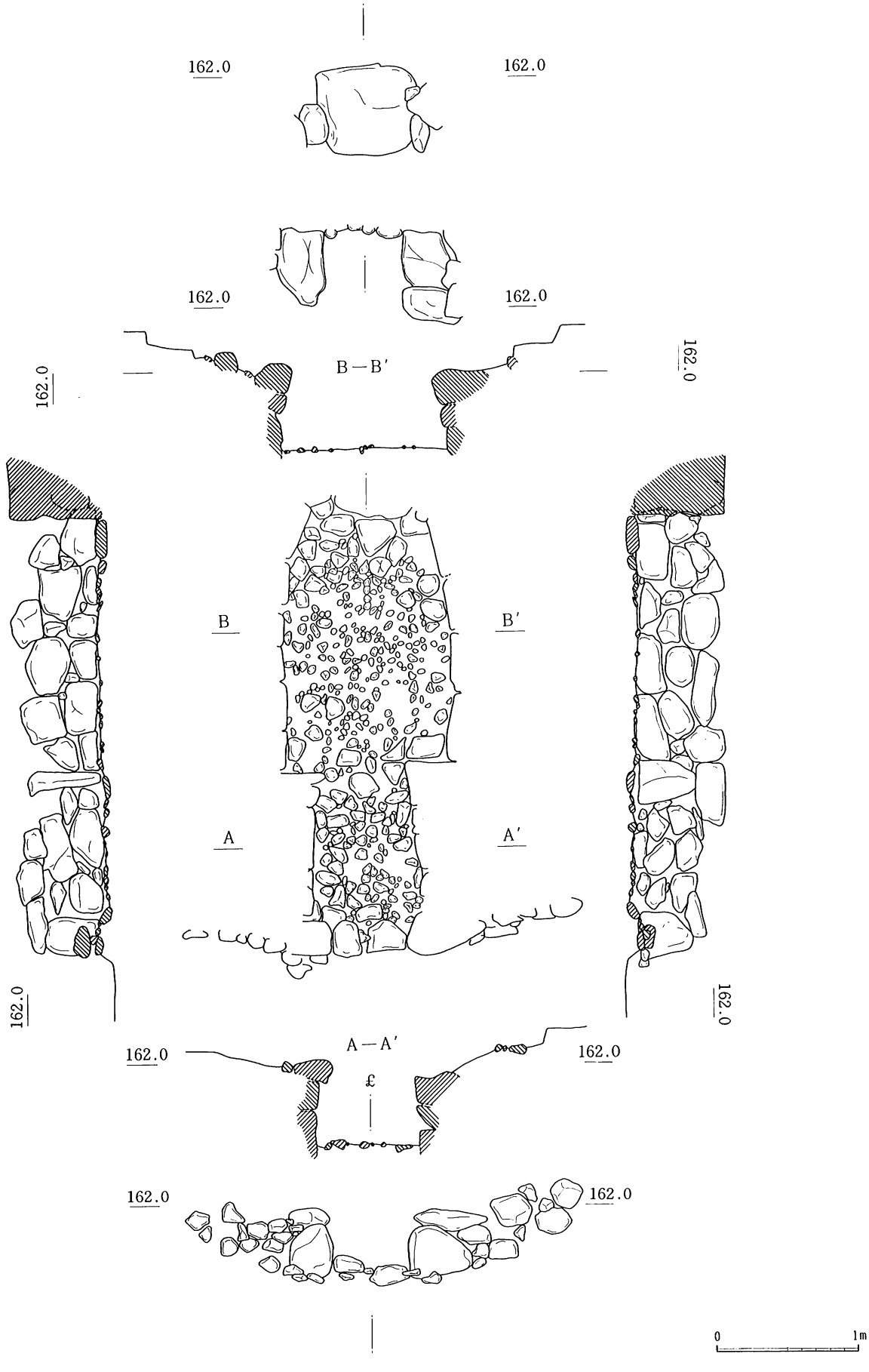
出土遺物は全く検出されなかった。



第53図　E－1号墳　遺物実測図



第54図　E－2号墳　墳丘図



第55図　E－2号墳　石室展開図

(15)　B－1号墳

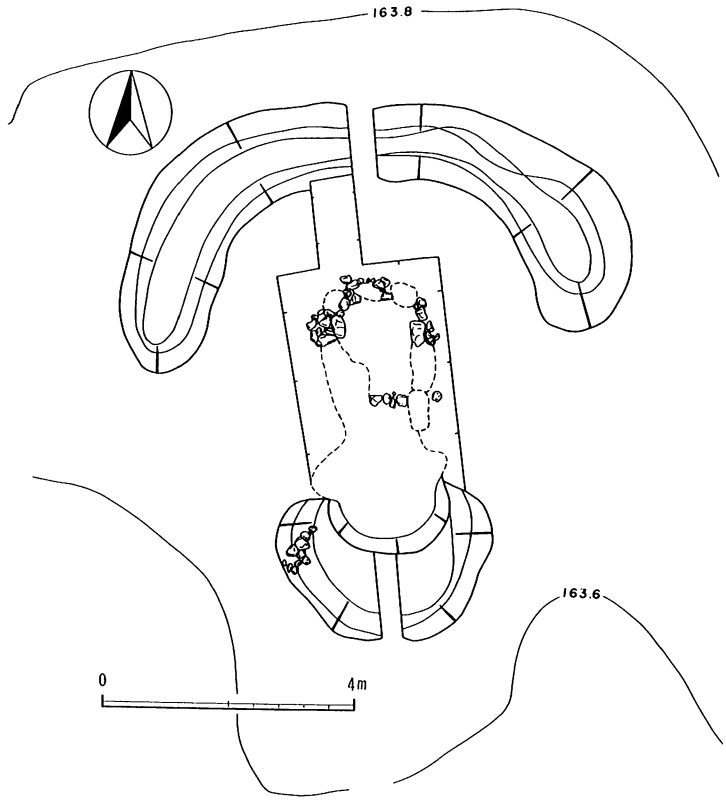
位　置　発掘対象区域の北端部に位置している。50m程南にE－2号墳が存在している。

墳　丘　北側に巡る周堀とかろうじて残った根石の一部で古墳ということが判明した。

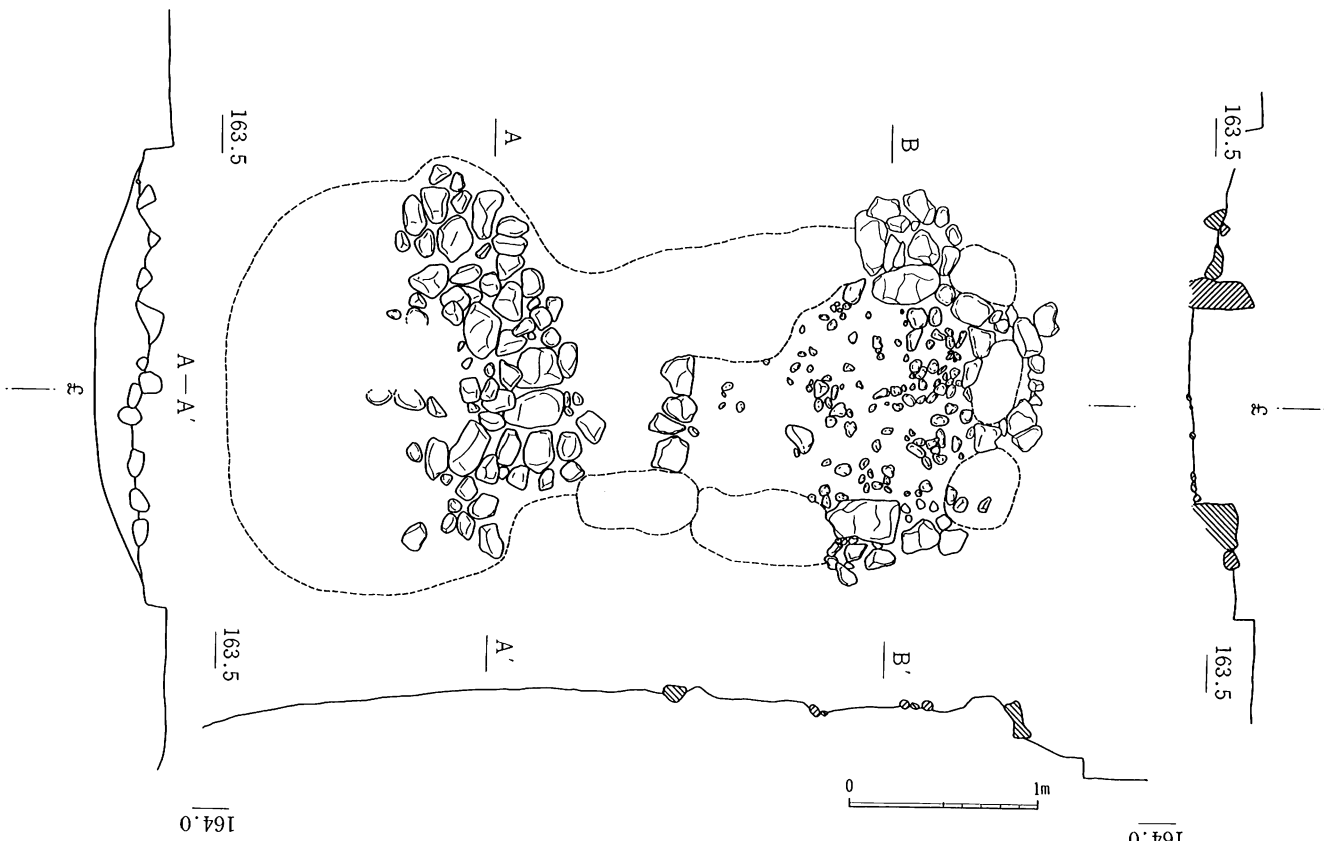
墳丘の規模は南北の主軸方向の長さで8.40mを測る。

葺石や埴輪は全く検出されなかった。

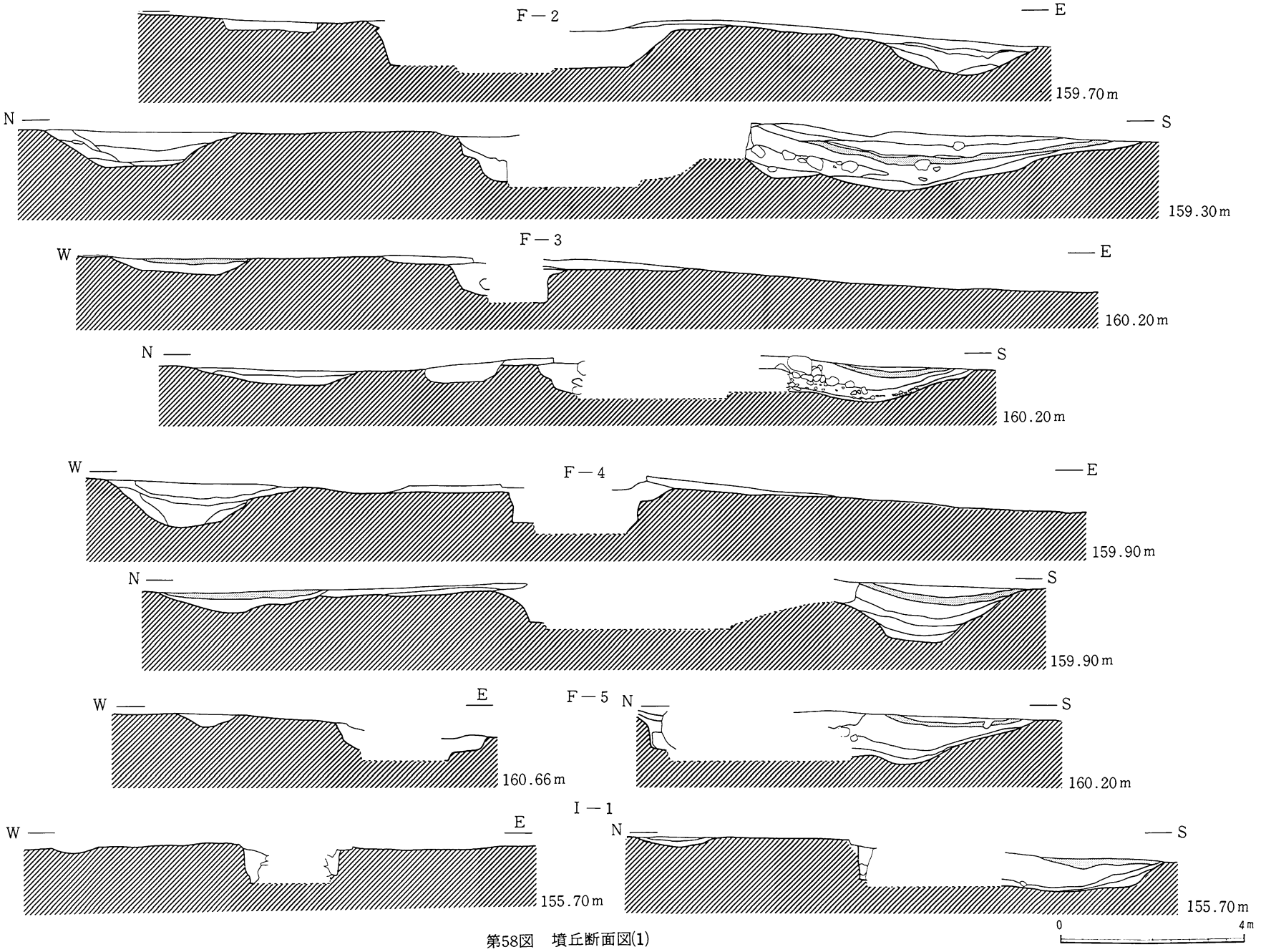
主体部　攪乱が激しく不明瞭であるが石の抜かれた後の据え方や周堀などの位置から想定して主軸方向はS－7°－Eを示すものと思われる。石室の主軸長は約2.0m，幅1.0mを測る。一部の床面には小円礫による補石が確認できた。入口部分には拳大の小円礫による前庭状の石組がみとめられるとともに浅間B軽石の純層が埋土上層に堆積した円形の落ち込みを検出し得た。



第56図　B－1号墳　墳丘図



第57図　B－1号墳　石室展開図


F－2
E
159.70m
N
S
159.30m
F－3
W
E
160.20m
N
S
160.20m
W
F－4
E
159.90m
N
S
159.90m
W
E
F－5
N
S
160.66m
160.20m
I－1
W
E
N
S
155.70m
155.70m
0
4m

第58図　墳丘断面図(1)

2．住居跡の調査

（1）　ＩＨ－１号住

発掘調査地区の南端に位置している。ＩＨ－２号住と近接している。

平面形は隅丸長方形を呈する。

規模は長軸長4.34ｍ，短軸長3.70ｍを測り，長軸方向はＮ－40°－Ｅを示す。壁高は確認面から0.8ｍを測りかなり深い。

床面は柔らかく不明瞭である。ただ床面に接して炭化材が多く検出された。

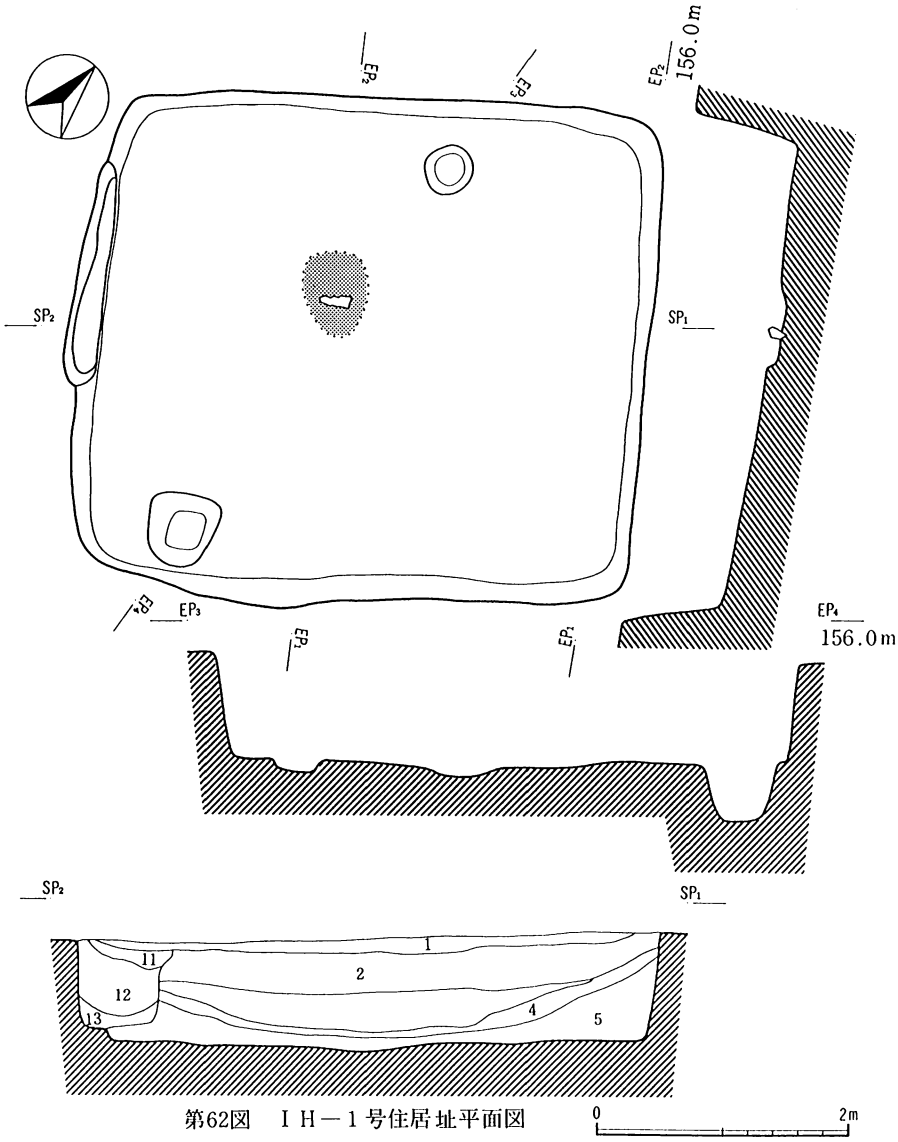
住居跡の中央やや西よりには１石を据えた地床炉が検出されている。又，南東の隅には一辺0.5ｍ，深さ0.5ｍの方形の土壙が在り，貯蔵穴と考えられる。

出土遺物（第63図）は住居跡埋土内に掘られた土壙内出土の墨書の有る坏１点（第63図）を除いて総て床面直上からの出土である。

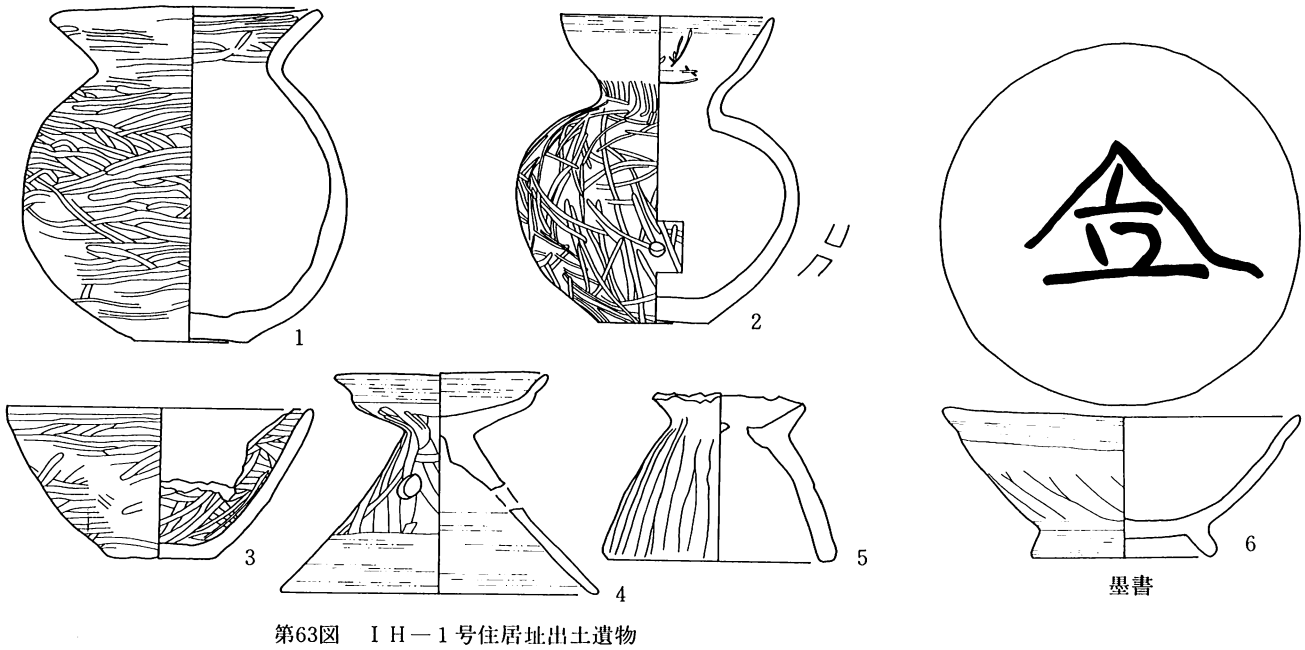
１は小型壺である。器高13.1cm，口径10.35cmを測る。

やや下脹れの胴部に頸部から「くの字」に屈曲する口縁部を有する。

整形はほぼ器面全面に箆による磨きが施されている。



第62図　ＩＨ－１号住居址平面図



第63図　ＩＨ－１号住居址出土遺物

２は小型壺である。器高12.1cm，口径8.5cmを測る。

球形の胴部にやや受口状の口縁部を有する。胴部には焼成前穿孔による小孔を有している。

整形は胴部は縦方向の篦磨き，口縁部は撫でが顕著である。

３は碗である。器高６cm，口径12.1cm、底径4.25cmを測る。

やや小さな底部から内湾ぎみに立ち上がり口縁部に至る。

整形は全面に横位の篦磨きが施されている。

４は小型器台である。器高８.８cm，器受部の口径8.3cm，脚部の底径12.3cmを測る。

器受部には段を有し，脚部は直線的に「ハの字」に開き，３孔を有する。

整形は脚部には縦方向の篦撫で，口縁部及び裾部には横撫でが施されている。

５は台付甕の脚部と考えられ，底径8.8cmを測る。

以上の出土遺物及び住居の形態より考えて本住居跡は古墳時代前期に位置付けることができよう。

（２）　ＩＨ－２号住

ＩＨ－１号住の北東に隣接して位置している。

平面形はＩＨ－１号住と同様に隅丸長方形を呈する。

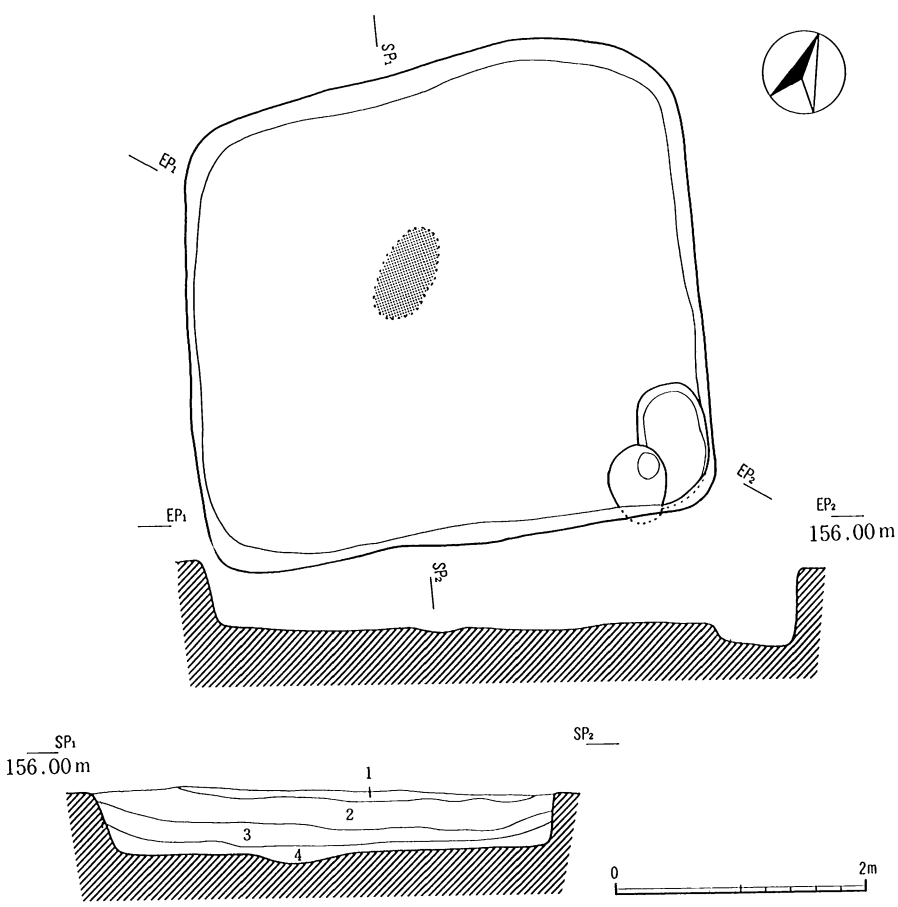
規模は長軸長4.0ｍ，短軸長3.50ｍを測り，長軸方向はＮ－60°－Ｅを示す。壁高は確認面より0.5ｍを測る。

床面は柔らかく不明瞭である。中央やや西よりには地床炉が設けられている。又，南東隅には不整円形の土壙が掘られている。

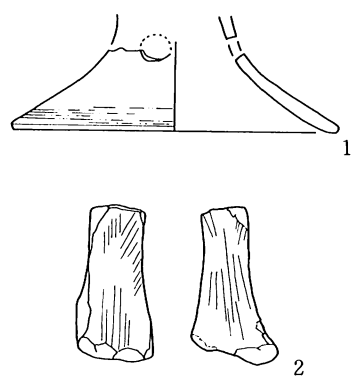
出土遺物は少なく，小型器台の脚部の破片と土壙中より小型の砥石の出土を見ている。（第65図）

小型器台は４孔を有し，大きくラッパ状に開く脚部になるものと推定される。

本住居跡もＩＨ－１号住と同様に古墳時代前期に属するものと考えられる。

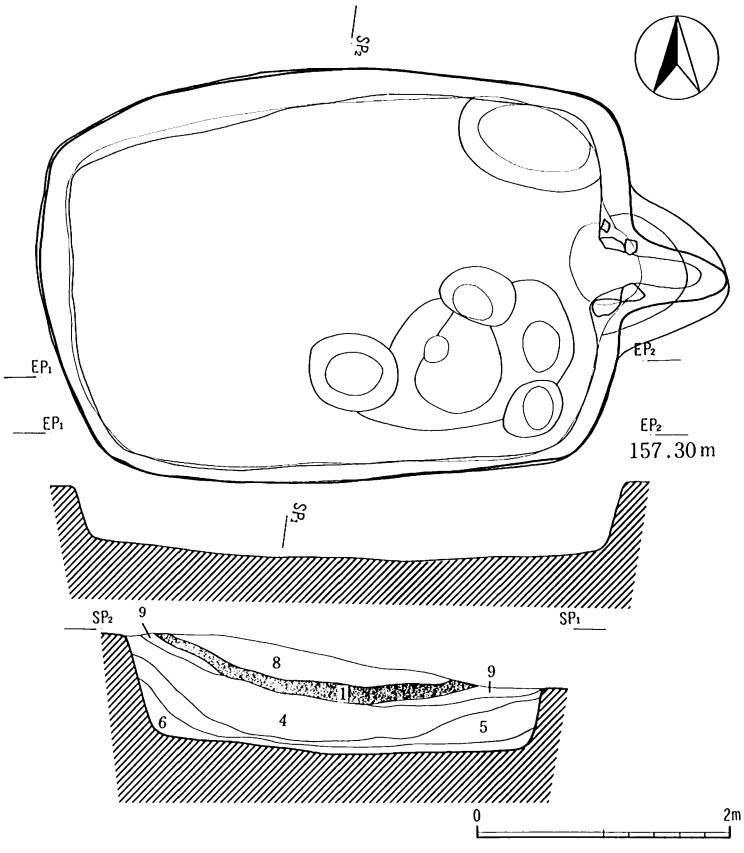


第64図　ＩＨ－２号　住居址平面図

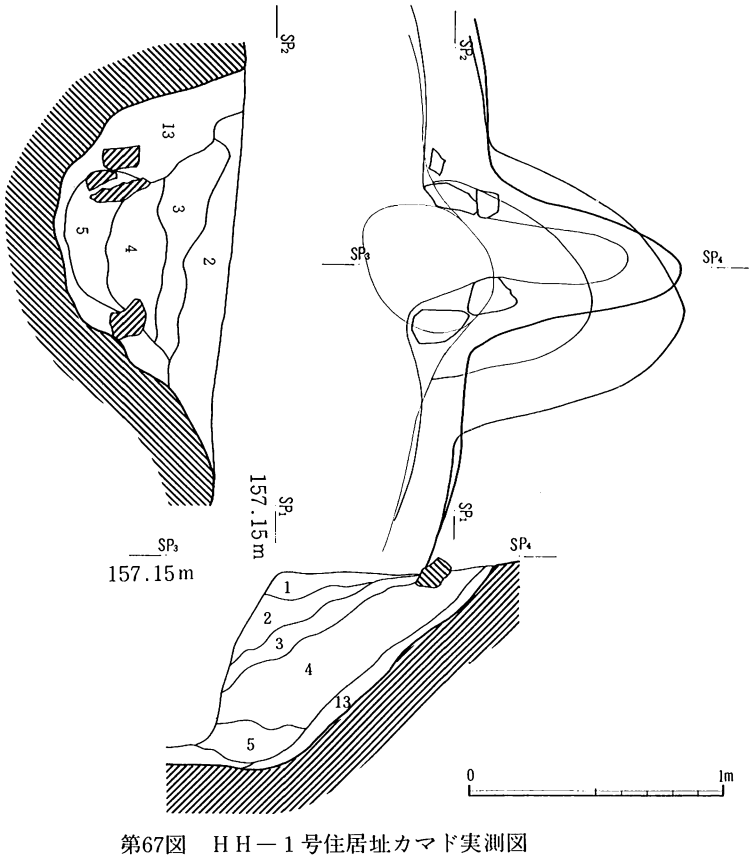


第65図　ＩＨ－２号住居址出土遺物

（3） ＨＨ－１号住



第66図　ＨＨ－１号住居址平面図



第67図　ＨＨ－１号住居址カマド実測図

発掘対象区の南西部，西を流れる東神沢川に面した急斜面に占地している。ほぼ同時期と考えられる３軒の住居跡が南北に並んで検出された。

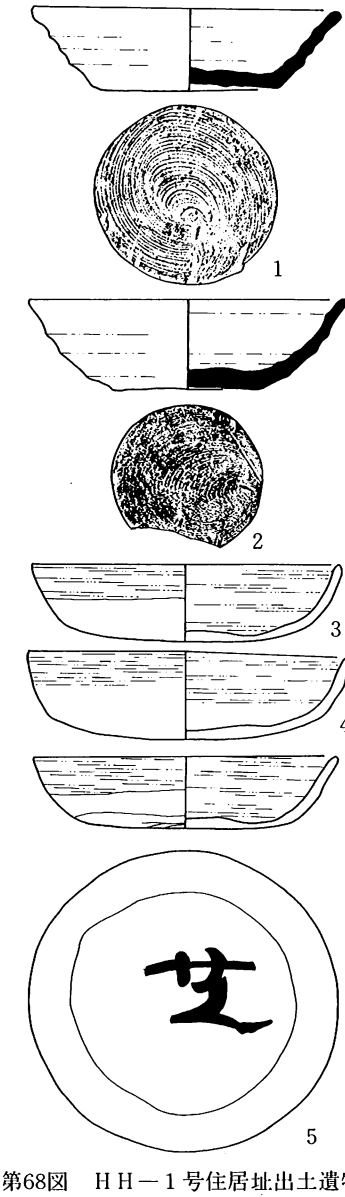
ＨＨ－１号住は最も北，斜面の最上位に位置する住居である。

平面形は東西に長い長方形を呈し，東壁中央には竈を有している。

規模は長軸長4.50ｍ，短軸長3.24ｍを測る。主軸方向は，ほぼ真東，Ｎ－90°－Ｅを示す。

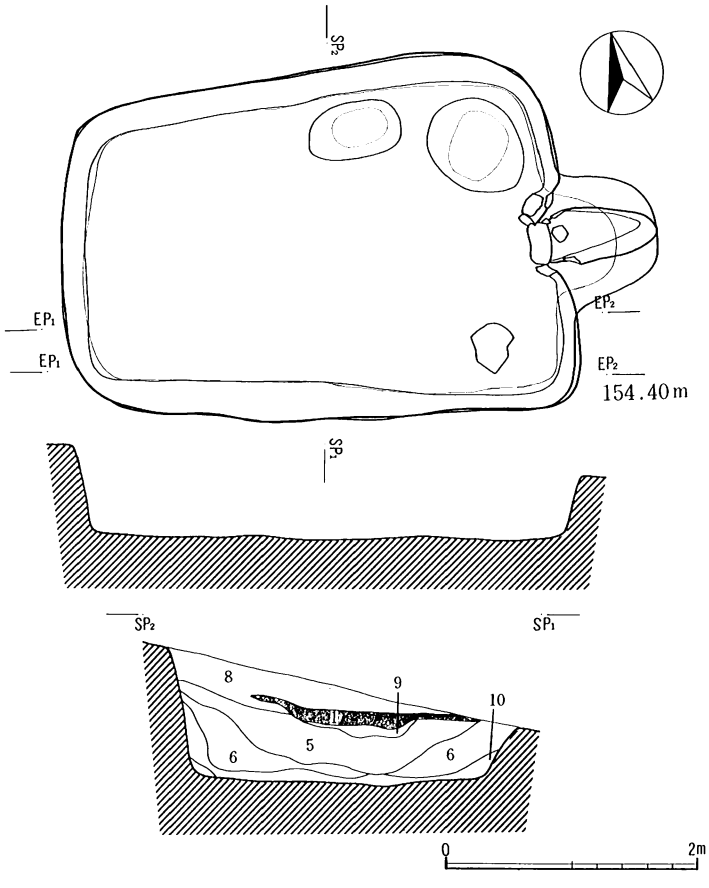
竈内埋土には焼土などの焼けた痕跡は検出されなかった。焚き口及び袖の部分には割石を用いている。

出土遺物は須恵器の坏２点，土師器坏３点が検出されている。土師器坏の内，１点には「芝」の墨書が認められる。

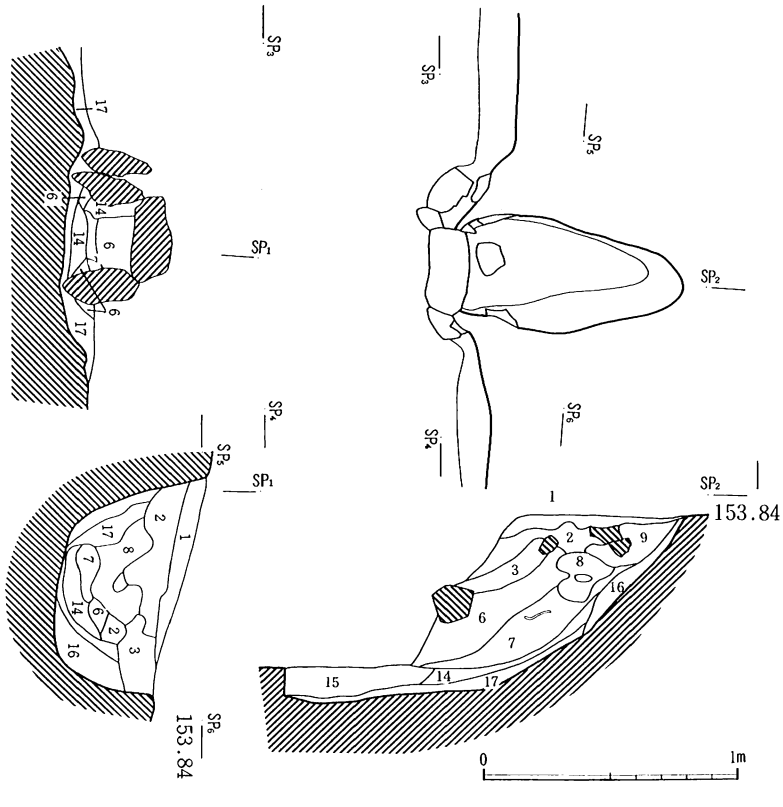


第68図　ＨＨ－１号住居址出土遺物

（4） ＨＨ－２号住居跡



第69図　ＨＨ－２号住居址平面図



第70図　ＨＨ－２号住居址カマド実測図

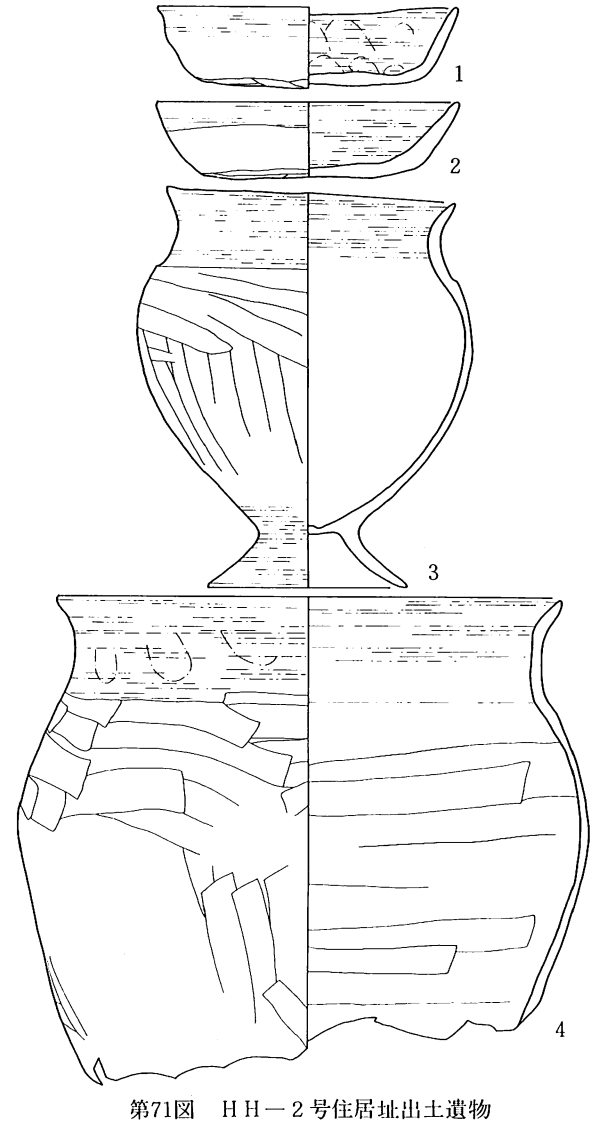
３軒並列した南，最も低位に位置している。

平面形は東西に長い長方形を呈し，東壁中央には竈を有している。

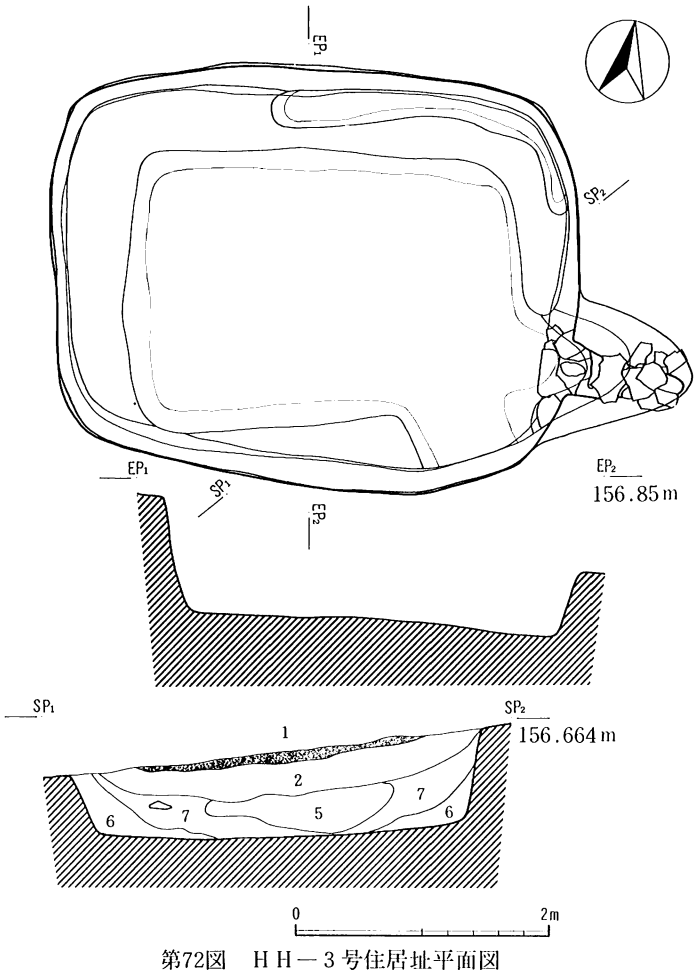
規模は長軸長4.04ｍ，短軸長2.84ｍを測る。主軸方向はＮ－100°－Ｅを示す。

竈は焚き口部に石を用い，鳥居状に組んだものであり，焚き口部は住居の壁に付いた状態で造られているが竈本体は大きく住居跡の外に張り出している。焚き口部からは甕（第７図４）が出土している。

出土遺物は総て土師器であり，坏２点，小型台付甕１点，甕１点が検出された。小型台付甕及び甕は頸部から口縁部にかけて「コの字」形に屈曲を持つものである。



第71図　ＨＨ－２号住居址出土遺物



第72図　ＨＨ－３号住居址平面図

（５）　ＨＨ－３号住居跡

ＨＨ－１号住の南に近接している。

平面形は東西に長い長方形を呈し，東壁やや南よりに竈を有している。

規模は長軸長4.16ｍ，短軸長3.30ｍを測り，主軸方向はＮ－80°－Ｅを示す。

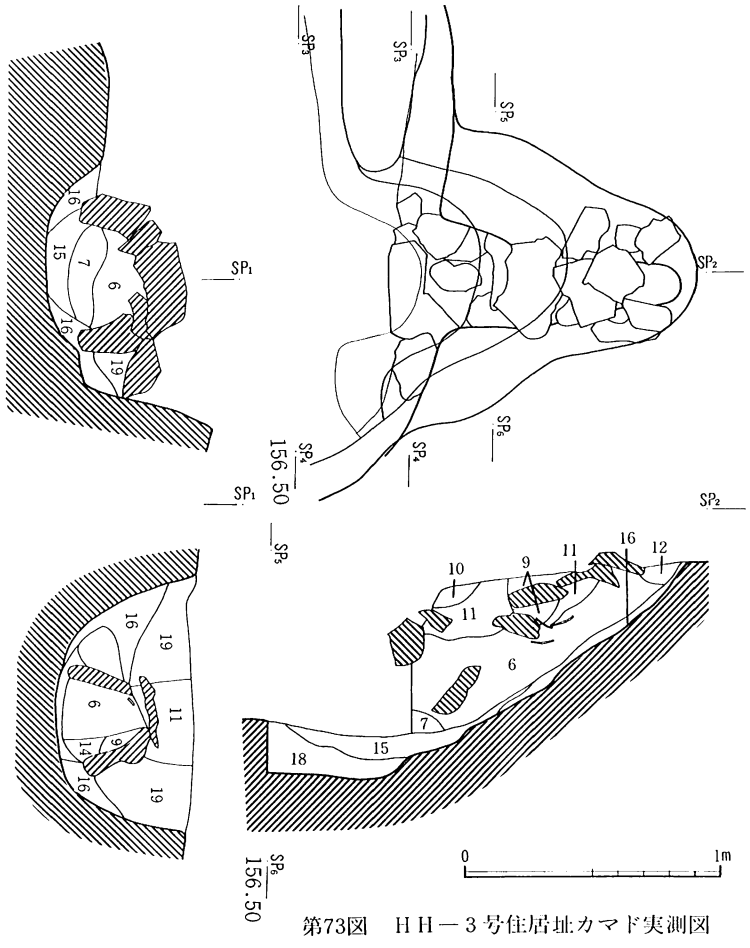
竈は焚き口部，本体共に割れ石を用いて構築されている。焚き口部は鳥居状に石を組み、煙道部には偏平な石を用い天井としている。ただ，ちょうど焚き口部には甕を架ける為の隙間が設けられ、火床面には礫を用いた支脚が設置されていた。

出土遺物は総て土師器である。坏３点，甕１点が検出されている。

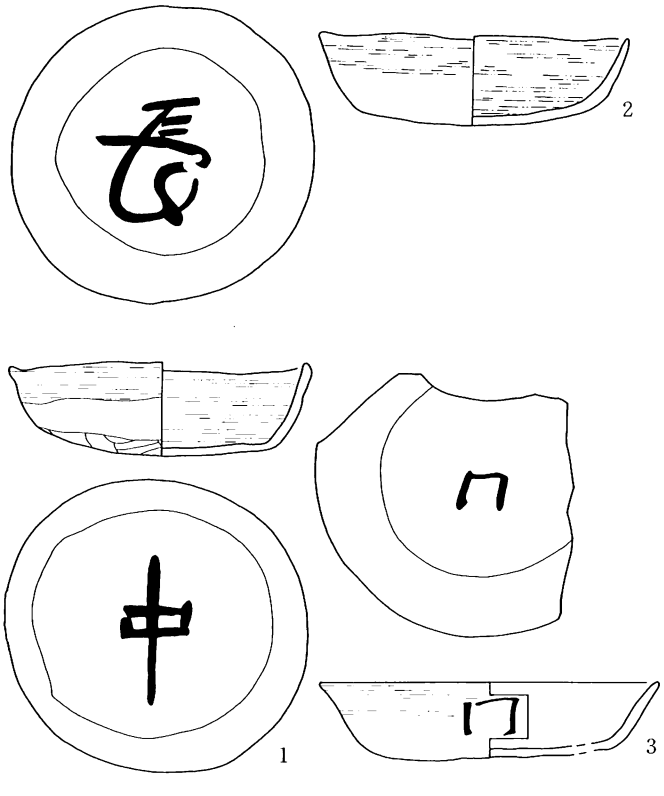
坏は２点に墨書が認められ，一つには「長」と「中」，他には「門」の文字が判読できる。

甕は所謂「コの字」状の口縁を有するものである。

以上，ＨＨ－１号住から３号住は出土遺物や住居埋土に認められる浅間Ｂ軽石の堆積状態などから，ほぼ同時期の所産と考えられる。すなわち、平安時代前期，９世紀前半代に比定されようか。



第73図　ＨＨ－３号住居址カマド実測図



第74図　ＨＨ－３号住居址出土遺物（１）

3．その他の遺構と遺物

（1） C区円形土坑

発掘対象区域の東端，東向きの斜面に位置する。

直径3.6m，深さ2.1mを測る円形の土壙である。土壙は2段掘りになっており，底面には直径0.7mの円形の穴がさらに掘り込まれている。埋土上層にはB軽石が含まれ，下底面からは土師器の坏1点と焼土塊が検出された。同様な形態の土壙は村内の白藤遺跡や稲荷山遺跡などで検出されている。

（2） I区古墳前庭部出土の縄文土器

I区の古墳前庭部出土の遺物を検討していく中で縄文時代草創期の撚糸文土器が5片確認できた。

いずれも口唇部が肥厚するものである。

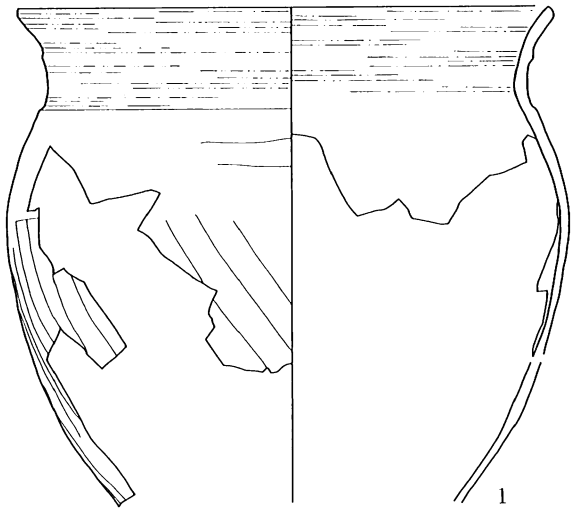
1は口唇端部にLRの縄文，胴部にはRの撚糸文が施されている。焼成は良好，胎土も良く精選され，長石が顕著である。色調　赤褐色。

2は口唇部及び胴部にRの撚糸文が施されている。焼成，胎土ともに良好。色調　赤褐色。

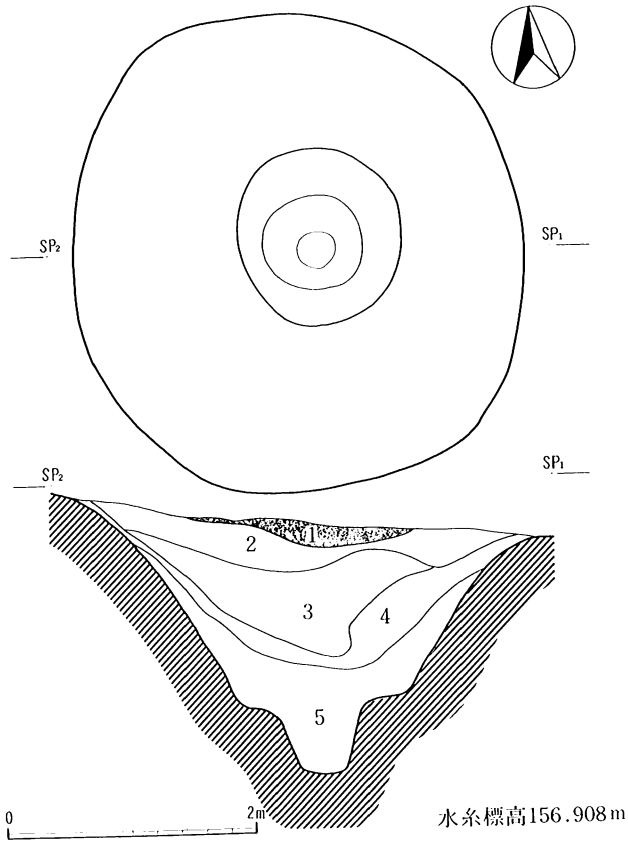
3は口唇部及び胴部にLの撚り糸か。焼成，胎土ともに良好。色調　淡褐色。

4は胴部にのみRの撚糸文が施される。焼成，胎土ともに良好。色調　赤褐色。

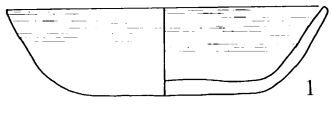
5は胴部にのみRの撚糸文。焼成，胎土ともに良好。色調　赤褐色。



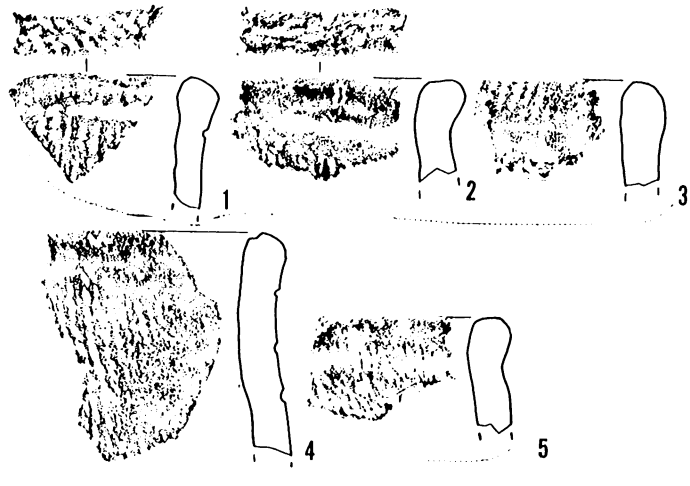
第75図 HH－3号住居址出土遺物（2）



第76図　C区円形土壙平面図



第77図　土壙内出土遺物実測図



第78図　西原古墳群出土の撚糸文土器

（3） H区の木炭窯

発掘区の西南部、Ｉ－３号墳の20ｍ西に位置する。西を流れる東神沢川に面して斜面が急になるその落ちぎわに４基の木炭窯が存在した。窯体はローム層を掘り込んだ地下式のものである。

１号窯

４基の内最も東に位置している。平面形は入口部から奥に向かって緩やかに脹らみ、先端が太くなる昆棒状を呈している。途中，焚き口部と推定される箇所では窯体の幅が狭まり，括れ部を持つ。

全長7.60ｍ，幅は焼成部中央で1.70ｍ，最も狭まくなる焚き口部で0.78ｍを測る。主軸方向はＮ－28°－Ｅを示す。窯壁は大きく内湾し赤く焼けていた。

煙道は先端部東壁を僅かに掘り窪めて煙道としているが，調査中にここから多くの石やスサ入り粘土の塊が検出されている。このことは，後述する２号窯に見ることのできる竈の焚き口状の構造を有したものが取り付けられてたのではないかと推定される。

窯体埋土最上層にはＢ軽石の純層が確認できる。しかし，窯の天井部と考えられる赤く焼けたローム塊は土層断面及び発掘中の所見では確認されなかった。

２号窯

１号窯の西に並んで検出された。平面形はほとんど１号窯と変らない。

全長9.80ｍ，幅は焼成部中央で1.67ｍ，焚き口部で0.76ｍを測る。主軸方向はＮ－11°－Ｅを示す。

窯壁は内湾し，赤く焼けていた。

煙道はただトンネル状に窯体から外に坑を開けるのではなく，窯体からの煙出部には第79図に見るように石とスサ入り粘土を用いて鳥居状に石を組合せ，竈の焚き口状に造られた排煙施設を設けている。

窯体埋土最上層にはＢ軽石の純層が確認できる。しかし，１号窯と同様に窯体天井部は確認できなかった。ただ灰層などから２号窯は少なくとも２回にわたって木炭の焼成を行ったことが推測できる。

３号窯

１号窯と２号窯との間に検出された。４号窯とは互いに切り合関係を有している。平面形は１，２号窯とは異なり，比較的，窯体の幅に変化を持たない先の丸い長方形を呈する。

全長11.60ｍ、幅は焼成部中央で1.48ｍ、焚き口部で0.8ｍ，前室部で1.22ｍを測る。主軸方向はＮ－45°－Ｅを示す。

窯壁は内湾し，赤く焼けていた。

煙道に相当する施設は検出されなかった。

本窯は土層断面（第82図）で明らかなように４号窯にその一部を切られている。

４号窯

１号窯と３号窯との間に検出された。１，４号の各窯とは互いに切り合い関係を有している。平面形は１，２号窯に近く，先端部に向かって脹らむ昆棒状を呈する。

現存長は9.10ｍ，幅は焼成部中央で1.67ｍを測る。主軸方向はＮ－94°－Ｅを示す。

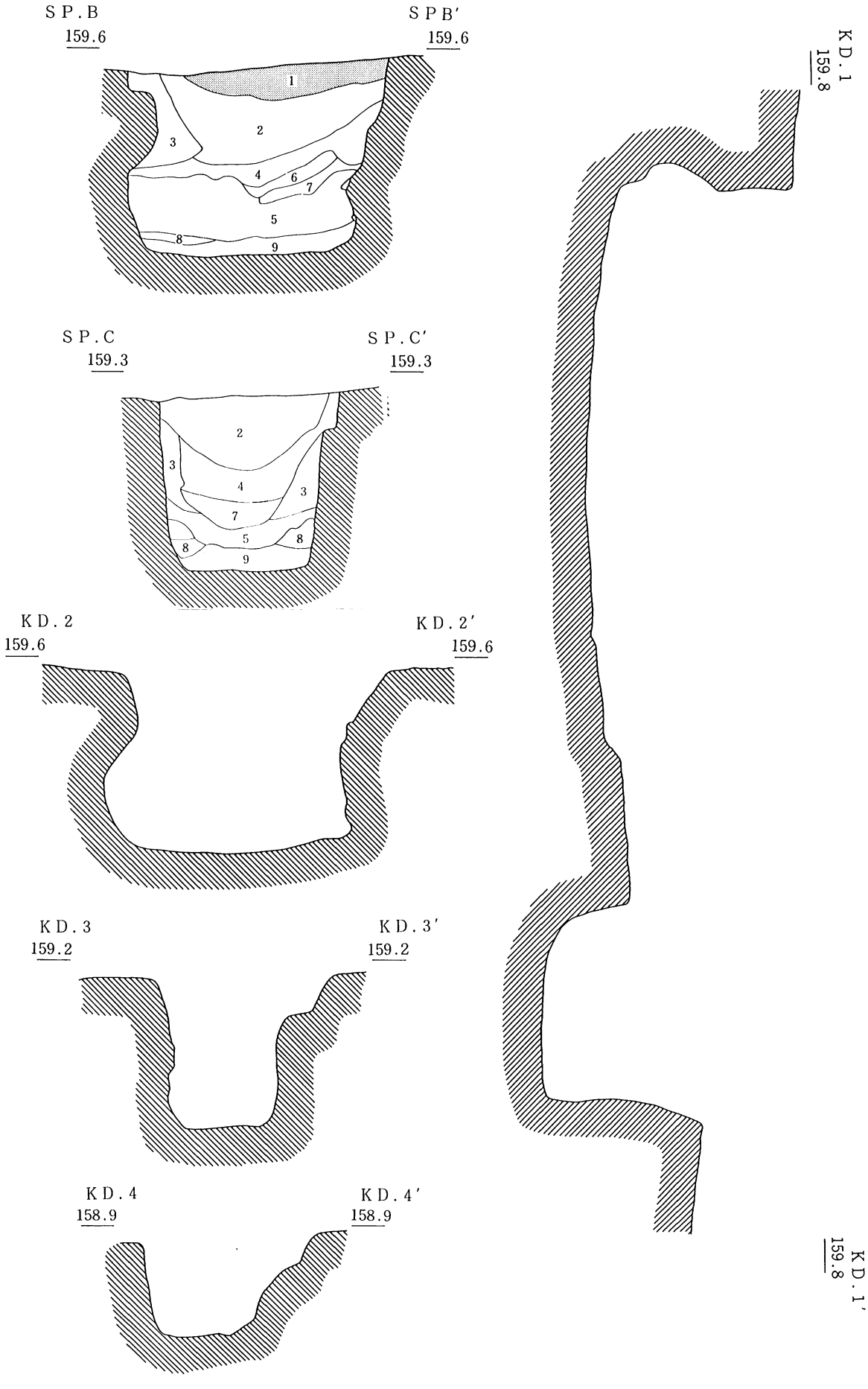
窯壁はあまり内湾せずに立ち上がり，やはりよく焼けて赤化している。

煙道は先端部南壁にトンネル状に縦坑が開けられている。

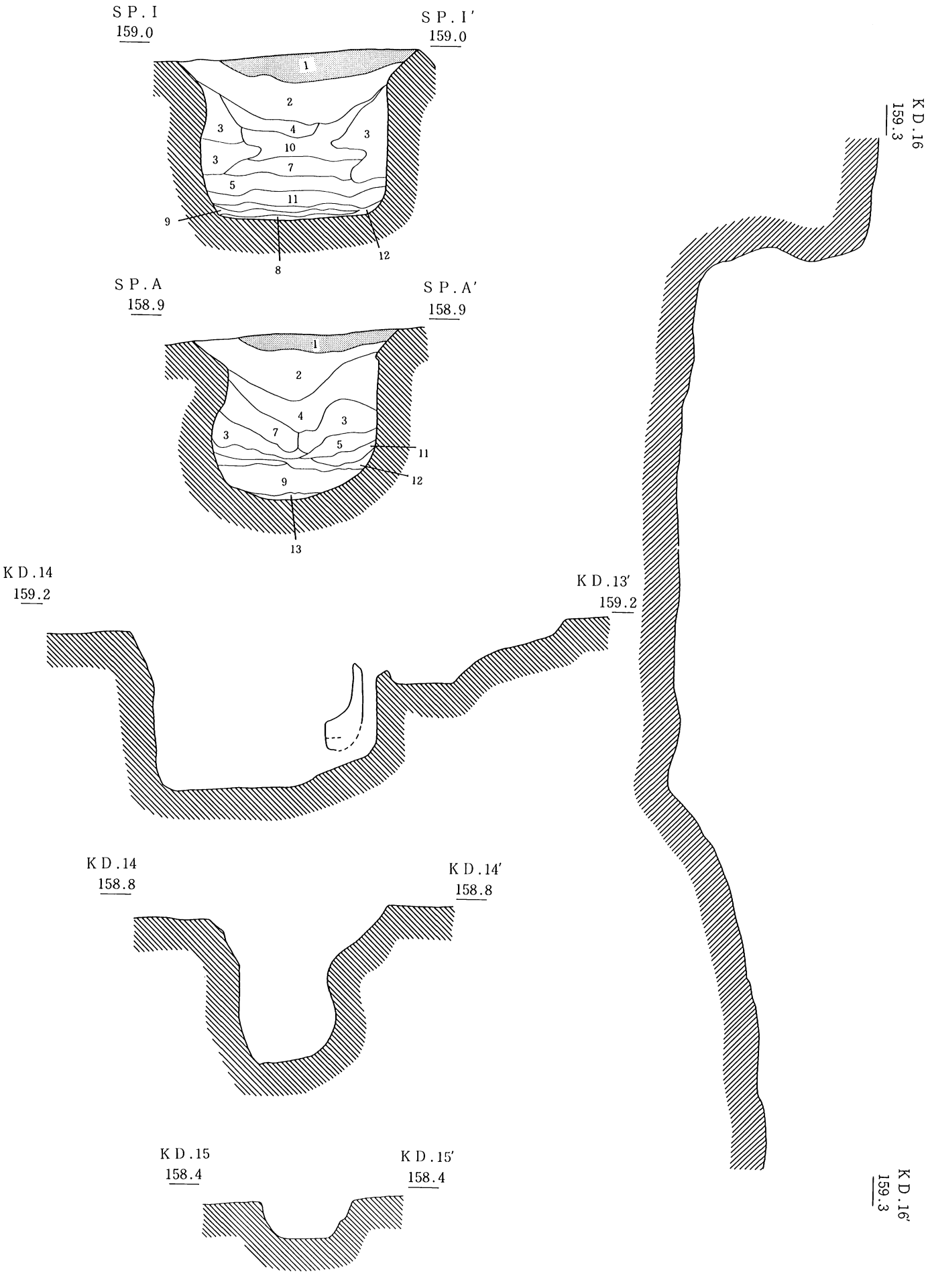
本窯は３号窯の一部を切り，１号窯にその先端部の一部を切られている。

以上のことよりＨ区で検出された４基の木炭窯は１，３，４号窯における切り合い関係，１，２号窯における形態的共通性や埋土に確認されるＢ軽石などから本遺跡における木炭窯の形態的変遷と年代的な下限を押えることができた。

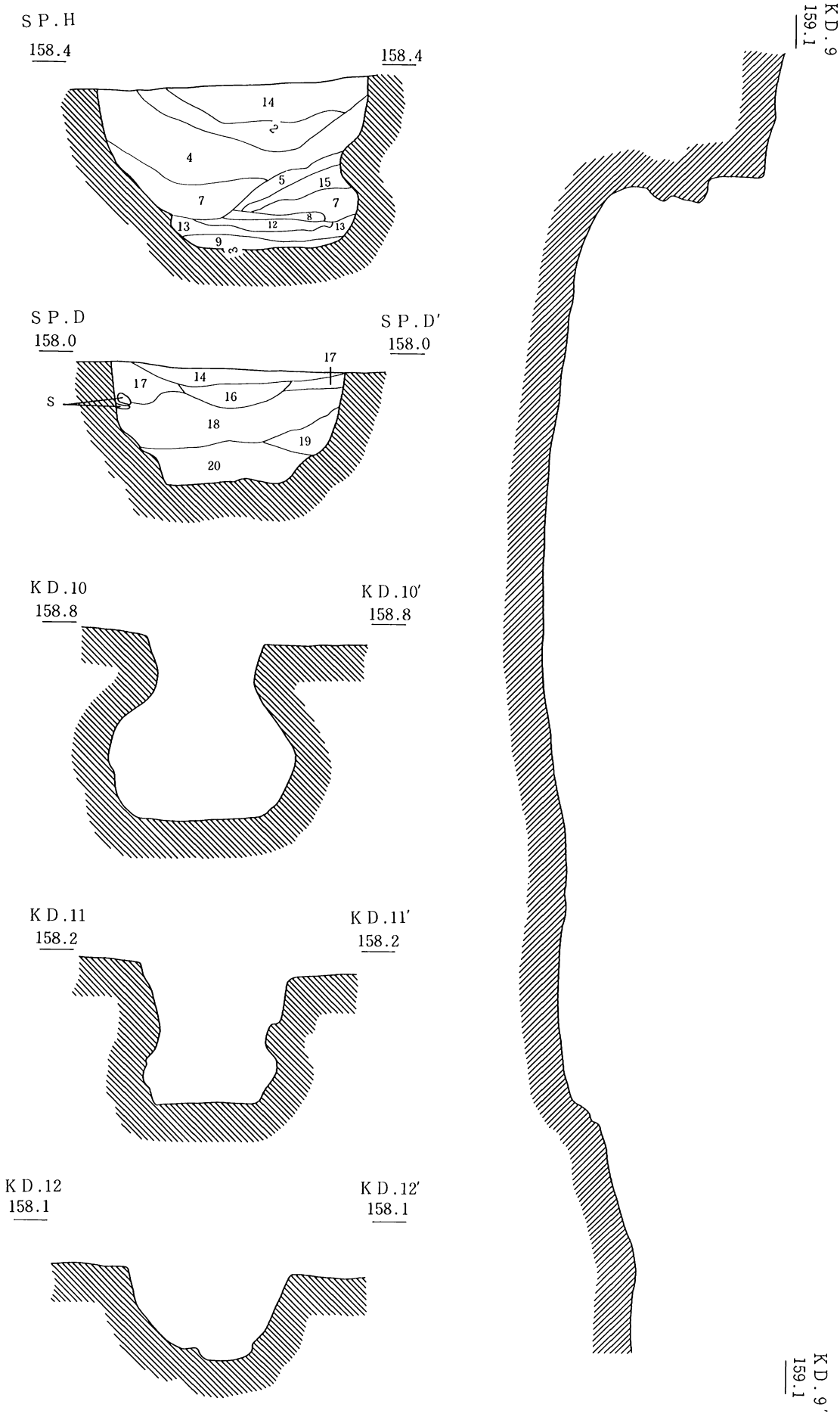
すなわち，３号窯→４号窯→１，２号窯という時間的変遷が層位的に明らかであり，時間的に新しくなるにつれて窯体の長さが短くなるとともに煙道部に新たな施設を設けるという形態的な変遷が想定される。時間的にはＢ軽石降下前，平安時代後半にはこのような形態的変遷をすでに完了したものと考えられよう。



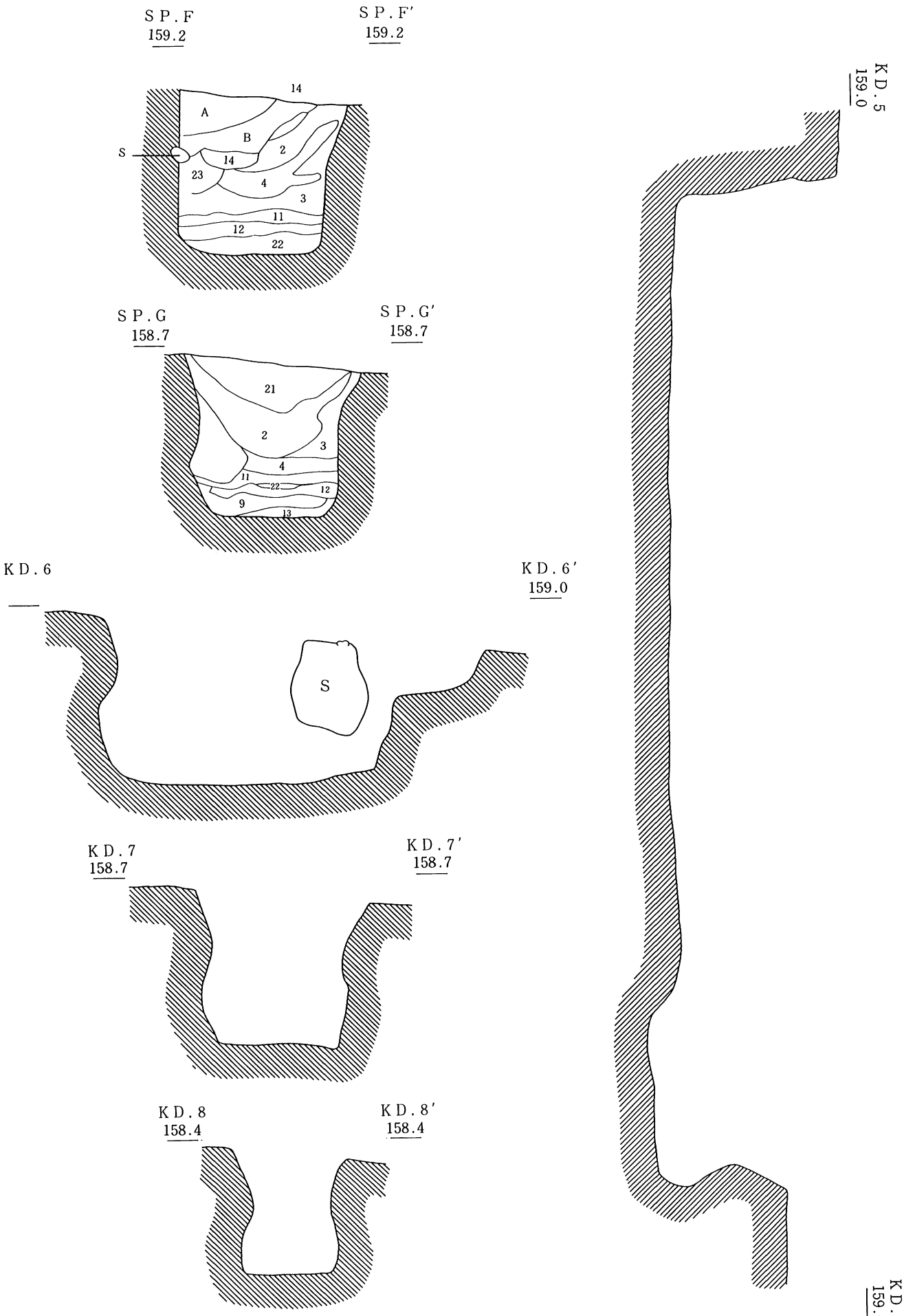
第80図　1号木炭窯断面図



第81図　2号木炭窯断面図



第82図　3号木炭窯断面図



第83図　4号木炭窯断面図

Ⅳ　調査の意義と問題点

（1）　古墳群の調査

粕川村ではこれまでに月田古墳群，膳・白藤古墳群という県内でも有数な２つの古墳群の調査を実施してきた。ここで報告した西原古墳群はそれらに次ぐ古墳群の調査である。

西原古墳群は，既に昭和の初年にはその存在が知られていたが，どうしたわけか昭和10年の「上毛古墳総覧」には１基も記載されていない。今回の調査はこの消された古墳群の再発掘でもあった。

発掘調査では15基の古墳が検出されたが，これに加えて，今回の調査対象区域外であと２～３基の古墳の存在が確認できる。総数18基程の古墳からなる群集墳として促えられよう。

これらの古墳は袖無型横穴式石室を主体部として人物や器材などの形象埴輪群を持った帆立貝式の前方後円墳であるＦ－１号墳を初現として６世紀中葉から７世紀にかけて作られていったものと考えられる。

ところで同じ粕川村内にあり，西原古墳群の北西約４㎞に位置する月田古墳群は６世紀中葉に構築されたと考えられる鏡手塚古墳，地蔵塚古墳などの帆立貝式古墳や唯一の前方後円墳である月田二子塚などを中心として６世紀後半代から７世紀代に展開された古墳群であり，50基程の古墳からなっている。このような古墳の形成過程及び内容は，古墳群の規模の大小の差はあるが西原古墳群のそれとよく類似している。しかし，これらの古墳群を形成する為の背景すなわち周辺における集落や生産域の存在を考えた場合この２者の古墳群の間には現在のところ大きな差が存在している。それは，西原古墳群がその背後に弥生時代後半から開始され，奈良・平安時代まで継続される集落つまり伝統集落（能登・小島1984）[注1]を基盤として形成された古墳群として捉えられるのに対して今のところ月田古墳群の周辺にはその成立の背景となる基盤を見出し得ないのである。この差が何に起因し，何を示しているのか今後の大きな課題となるところである。幸い粕川村では遺跡の詳細分布調査を58年度より実施しており，その結果の公表も迫っている。その中で上記のような課題に対し何らかの答が出るものと期待される。

注１　能登健，小島敦子，内田憲治他「新里村の遺跡」1984

（2）　住居跡の調査

古墳時代前期に比定できるもの２軒，平安時代に属するもの３軒の調査が実施されている。

今回報告地区の南側に位置する西原遺跡，後原遺跡では弥生時代後期から古墳時代中期にかけての集落が検出されている。今回検出された古墳時代前期の住居跡はこれらの延長としてとらえられよう。

平安時代の住居跡は本遺跡が所在する台地上ではその存在は十分予測できたにもかかわらず今回が初めての検出例であった。そして，今回検出の住居跡はその占拠する地形，つまり他に平坦な所が有るのにもかかわらず急な斜面に住居を構えるという特殊性が指摘できる。このことは，短絡的かもしれないが近接して存在する木炭窯との関係を想起させる。

（3）　木炭窯の調査

木炭窯は４基が検出されている。

これまで群馬県内では新里村外擂山遺跡や同村十三塚遺跡，笠懸村稲荷山遺跡，などで検出されている。

今回の調査で確認した３号窯から１，２号窯に至変遷はこれらの古代末の木炭窯の型式的な変遷を想定する好資料となろう。

又，今回の調査で古代末の木炭窯を検出したことは，この地に残っている「タタラ沢」という小字名が古代の製鉄跡の存在を暗示しているのをさらにより確実性の高いものとした。

以上，今回調査を実施した区域の中では縄文時代草創期から平安時代に及ぶ遺物や遺構が検出された。しかし，検出された遺構は各時代を通してけして同じ内容のものではない。まず縄文時代草創期に人の活動の痕跡が認められ，古墳時代前期になって初めて人の本格的居住が始まる。しかし，６世紀後半か

ら7世紀にかけては死者の住む奥津城とされ，少なくとも8世紀の前半まではこの地は人間の生活する場所として顧みられることはなかったのである。そして，平安時代になって，製鉄あるいは炭焼きという集団によって再び人間の活動が開始されるのである。

しかし，ここが何故，突如として死者の奥津城と成ってしまうのか？当時の人の生活域はどこだったのか？何故平安時代に再び人の生活の舞台となるのかという根本的な質問にたいしては本調査の結果からは何も答えることはできない。そしてそれらに答える為には，周辺のより詳細な遺跡の分布調査や発掘調査を積み重ねていかなくてはならないだろう。これらの問いは今後の大きな課題としておきたい。

註2　昭和54年度調査　C軽石で埋る大溝や古式土師や樽式土器を出土する住居3軒などが検出されている。

註3　昭和56年度調査　和泉期の住居5軒や縄文中期の敷石住居2軒などが検出されている。

註4　新里村教育委員会「十三塚遺跡」1982

註5　笠懸村教育委員会「笠懸村稲荷山遺跡」1980

付表1　土器観察表

遺構名	番号	器種	法量 口径　底径　器高	出土位置	①胎土　②焼成 ③色調④残存率	成形・調整の特徴
F－1号墳	6－1	須恵器 提瓶	頸部径(5.5) 胴部径 22.3 胴部高(19.5)	石室前方の周溝内	①砂粒多い ②還元 ③暗灰色　④⅗	環状把手を有するものと考えられる。外面にカキ目，内面は，回転を伴うナデを施す。
F－2号墳	15－3	須恵器 長頸壺	(13.5) 頸部径7.4	前庭状遺構埋土	①精選　②還元 ③灰色　④⅓	口唇端部は，折返し状を呈する。胴部と頸部との接合部には段をもつ。 内外面ともに回転を伴うナデ。
F－3号墳	18－5	土師器 坏	11.7 ―― 3.7	周溝内	①精選　②酸化 ③橙色　④完形	口縁と胴部との境に段をもつ。 口縁部横ナデ，胴部ヘラナデ，内面ナデ。 外面ヘラケズリ，口縁端部のみナデ，内面横ナテ
	18－6	土師器 坏	11.0 ―― 3.4	前庭状遺構	①小礫を含む②酸化 ③橙色 ④完形	口唇端部は内湾，やや厚みをます。
	18－7	須恵器 提瓶	頸部径 5.7 胴部径18.5 胴部高13.6	前庭状遺構脇周溝内	①精選　②還元 ③暗灰色 ④口縁部のみ欠	頸部に波状文，6－1に比べ全体の形は，まるみを帯びる。 外面，底面は荒いカキ目。上面は細かなカキ目。頸部接合部はカキ目の後ナデ。
F－4号墳	22－1	土師器 坏	11.3 ―― 3.6	前庭状遺構	①砂粒を含む ②酸化　③橙色 ④½	外面口縁部横ナデ，内面横ナデ 胴部ヘラケズリ
	22－2	土師器 坏		前庭状遺構	①砂粒を含む ②酸化　③橙色 ④½	外面口縁部横ナデ，内面横ナデ。
	22－3	土師器 坏	10.6 ―― 3.4	前庭状遺構	①砂粒を含む ②酸化 ③暗灰色　④⅚	口縁部にわずかに陵 外面口縁部横ナデ，胴部ヘラケズリ。 内面横ナデ。
F－5号墳	29－1	土師器 坏	11.6 ―― 3.15	前庭状遺構	①砂粒を含む ②酸化　③橙色 ④ほぼ完形	外面　口縁部横ナデ，胴部ヘラケズリ。 内面横ナデ。
	29－2	土師器 坏	11.3 ―― 3.6	同上	①砂粒を含む ②酸化良好③茶褐色④ほぼ完形	外面口唇部横ナデ，胴部ヘラによるミガキ状のナデ。 内面横ナデ。
	29－3	須恵器 長頸壺	10.3　11.7　28.1	同上	①精整　②環元 ③淡灰色　④⅔	外面口縁部回転を伴うナデ，頸部カキ目，胴上半部ナデ，胴下半部ヘラケズリ，内面回転を伴うナデ。
I－2号墳	35－3	土師器 坏	9.5 ―― 3.6	同上	①砂粒を含む ②酸化　③橙色 ④⅙	外面口縁部横ナデ，胴部ヘラケズリ。 内面横ナデ。
	35－4	同上	(10.2)	同上	①砂粒を含む ②酸化　③褐色 ④½	外面口縁部横ナデ，胴部ヘラケズリ。 内面横ナデ。
	35－5	同上	3.05	同上	①砂粒を含む ②酸化③暗褐色 ④½	外面口縁部横ナデ，胴部ヘラケズリ。 内面横ナデ。
	35－6	同上		同上	①砂粒を含む，比較的精選②酸化③暗褐色④⅓	外面口縁部横ナデ，胴部ヘラケズリ。 内面横ナデ。
	35－7	同上	(10.7)　3.8	同上	①砂粒を含む ②酸化③暗褐色 ④½	外面口縁部横ナデ，胴部ヘラケズリ。 内面横ナデ。
	35－8	同上		同上	①砂粒を含む ②酸化　③橙色 ④⅖	外面口縁部横ナデ，胴部ヘラケズリ。 内面横ナデ。
	35－9	同上	(12.1)　(3.7)	同上	①砂粒を含む ②酸化　③橙色 ④⅚	外面口縁部横ナデ，胴部ヘラケズリ。 内面横ナデ。
	35－10	須恵器 細頸瓶	8.5	同上	①精整　②環元 ③緑灰色　④⅚	口縁部に陵を有する，全体に緑色の自然釉がかかる。 内面回転を伴うナデ。
	35－11	須恵器 大形甕	30.2　48.6 胴部径51.2	同上	①小礫を含む ②環元　③灰色 ④½	口縁部は肥厚し，陵を有する。 外面格子風の叩き。 内面同心円の叩き。
I－3号墳	39－12	須恵器 坏	(10.6)　(3.0)	同上	①小礫を含む ②環元　③灰色 ④⅖	内外面ともに回転を伴うナデ。 底部は糸切りの後，周辺部手持ヘラケズリ。
	39－13	須恵器 坏	15.5　(2.95)	同上	①精選　②環元 ③灰白色　④⅚	内外面ともに回転を伴うナデ。 底部は，回転ヘラケズリ。
	39－14	土師器 坏	13.5　3.6	同上	①砂粒を含む ②酸化③橙褐色 ④完形	外面口縁部横ナデ，胴部ヘラケズリ。 内面横ナデ。

遺構名	番号	器種	法量 口径 底径 器高	出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調④残存率	成形・調整の特徴
Ⅰ－3号墳	39—15	土師器 坏	13.1 3.8	前庭状遺構	①砂粒を含むが精選 ②酸化 ③橙褐色 ④3/6	外面口縁部横ナデ，胴部ヘラケズリ。 内面横ナデ。 底部は平底に近い。
	39—16	須恵器 蓋	13.4 2.4 つまみ径 4.6 かえり高 0.7	同上	①砂粒を含む ②環元 ③灰色 ④5/6	中くぼみのボタン状つまみを持つ。 外面天井部は回転ヘラケズリ，かえり部横ナデ。 内面回転横ナデ。
	39—17	須恵器 蓋	(16.1) かえり高 0.7	同上	①精選 ②環元 ③灰白色 ④5/6	外面天井部上半部回転ヘラケズリ以下横ナデ。 外面回転を伴う横ナデ。
	39—18	須恵器 蓋	20.7 4.3 つまみ径 5.8 かえり高 1.0	同上	①精選 ②環元 ③灰白色 ④5/6	ボタン状つまみを持つ，外面天井部上半回転ヘラケズリ。内面天井部ナデ，外周部回転横ナデ。
	39—19	須恵器 鉢	9.1 19.5 13.1 高台高 2	同上	①砂粒を含む ②環元③灰白色 ④1/2	大きく外方に開く高台を持つ。 外面口縁～胴上半部横ナデ，胴下半回転ヘラケズリ。内面横ナデ，底部回転ヘラケズリ？
	39—20	須恵器 鉢	12 3.1 つまみ径 4.9 かえり高 1.7	同上	①砂粒を含む ②環元③灰白色 ④5/6	中くぼみのボタン状つまみを有する。天井部は平で一条の陵を有する。肩部は張り出す。内外面ともに横ナデ。
	39—21	須恵器 短頸壺	10.05 (11.4) 14.1	同上	①砂粒を含む ②環元 ③灰色 ④3/6	口縁部は直に立ち上がる，底部には陵を有する高台を持つ。 外面脚下半肩部まで回転ヘラケズリ以下回転を伴うナデ。 内面ナデ，胴中央に焼成後の穿孔あり。
	39—22	須恵器 長頸壺	8.0 頸部径 2.8	同上	①砂粒を含む ②環元③暗灰色 ④頸中のみ	内外面とも横ナデ。
	39—23	須恵器 台付の坏		同上	①砂粒を含む ②環元③淡灰色 ④1/6高台部のみ	内外面とも横ナデ。
	48—1	土師器 坏	9.4 3.5	同上	①精選 ②酸化 ③褐色 ④3/6	外面口縁部横ナデ，胴部ヘラケズリ。 内面横ナデ。
	48—2	須恵器 高台付坏	15.6 12.3 4.3	同上	①砂粒を含む②環元③灰色④3/6	内外面横ナデ，底部は回転ヘラケズリ。
	48—3	須恵器 大型甕	25.1 45.8 胴部径44.6	同上	①砂粒小石を含む ②環元 ③灰色 ④1/2	口縁部折返し状を呈する。 外面平行叩きの後，指ナデ。
Ｅ－1号墳	53—10	須恵器 坏	17.2 9.05 3.9	一括	①精選 ②酸化 ③暗灰褐色 ④ほぼ定形	内外面とも回転を伴う横ナデ。 底部は手持ちヘラケズリ。
ⅠＨ－1号住居	63—1	土師器 小型壺	10.35 4.9 13.1	床面	①精選 ②酸化 ③茶褐色④完形	外面横方向ヘラミガキ。 内面口辺部ヘラミガキ，胴部は剝落。
	63—2	土師器 小型壺	(8.4) 4.3 12.1	床面	①精選 ②酸化 ③赤褐色④完形	外面口縁部横ナデ，頸部縦方向ヘラミガキ，胴部ヘラミガキ，内面口縁部横ナデ，頸部一部にヘラミガキ，胴部に小孔有り。
	63—3	土師器 椀	12.1 4.25 6.0	床面	①精選 ②酸化 ③茶褐色 ④5/6	外面ヘラミガキ。 内面ヘラミガキ。
	63—4	土師器 小型器台	8.0 12.3 8.8	床面	①精選 ②酸化 ③茶褐色④完形	外面口縁部横ナデ，接合部から脚上半部縦方向のヘラミガキ，裾部横ナデ，内面横ナデ。
	63—5	土師器 台付き 甕の脚	8.8	床面	①小礫を含む ②酸化③茶褐色 ④脚部のみ	外面縦方向のヘラケズリ。 内面ナデ。 台部中央に小孔を有する。器台に転用か？
	63—6	土師器 坏	14.2 7.4 6.05	1住内埋土中土壙出土	①砂粒を含む。長石が顕著②酸化 ③茶褐色④完形	高台を有する坏 外面口縁部横ナデ，胴部縦方向ヘラケズリ。 内面ナデ，「金」の墨書有り。
ⅠＨ－2号住居	65—1	土師器 小型器 台脚部	(19.2)	一括	①砂粒を含む ②酸化 ③褐色 ④脚部のみ1/2	内外面ともに底部横ナデ。
ＨＨ－1号住居	68—1	須恵器 坏	11.9 7.3 3.2	床面	①小礫を多く含む ②環元 ③灰色 ④4/5	外面回転を伴うナデ。 内面 〃 底部は回転糸切り無調整
	68—2	須恵器 坏	12.3 (5.5) 3.5	床面	①精選 ②環元 ③灰色 ④5/6	わずかに底部一段高くなる。内外面ともに回転を伴うナデ，底部は，回転糸切り無調整。
	68—3	土師器 坏	12 9.4 3.05	かまど周辺	①精選 ②酸化 ③橙色 ④完形	外面口縁部横ナデ，胴部ヘラケズリ。 内面ナデ，外面黒斑あり。
	68—4	土師器 坏	12.7 3.4	床面	①砂粒を含む ②酸化 ③橙色 ④ほぼ完形	外面口縁部横ナデ，胴部ヘラケズリ。 内面ナデ

遺構名	番号	器種	法量 口径	底径	器高	出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調④残存率	成形・調整の特徴
HH－1号住居	68－5	土師器 坏	11.8	8.8	3.15	床面	①砂粒を含む ②酸化 ③橙色 ④完形	外面口縁部横ナデ，底部にヘラケズリ。内面横ナデ。底部に「芝」の墨書有り。
HH－2号住居	71－1	土師器 坏	11.6	8.8	3.15	床面	①砂粒を含む ②酸化 ③橙色 ④完形	外面口縁辺のみ横ナデ。底部へラケズリ。内面横ナデ。
	71－2	土師器 坏	11.8	8.65	3.2	床面	①砂粒を含む ②酸化 ③橙色 ④完形	外面口縁部横ナデ，胴部は無調整。底部へラケズリ。内面横ナデ。
	71－3	土師器 小型台付甕	11.3	7.8	15.4	床面	①砂粒を含む ②酸化③暗褐色 ④ほぼ完形	外面口縁部横ナデ，胴部へラケズリ。脚部横ナデ。内面横ナデ。
	71－4	土師器 甕		19.6		カマド内	①砂粒を含む ②酸化③暗橙色 ④上半部のみ	外面口縁部横ナデ，肩部横方向へラケズリ。胴部縦方向へラケズリ。内面ナデ。
HH－3号住居	74－1	土師器 甕		21.3		カマド周辺	①砂粒を多く含む②酸化③橙色 ④上半部のみ	外面口縁部横ナデ指頭押え，肩部横方向のへラケズリ，胴部縦方向へラケズリ。内面へラナデ。
	75－1	土師器 坏	11.5	9.45	3.65	床面	①わずかに砂粒を含む②酸化③褐色④完形	外面横ナデ，底部へラケズリ。内面横ナデ。内面底部に「長」，外面底部に「中」の墨書有り。
	75－2	土師器 坏	12.0	10.15	3.55	床面	①砂粒をわずかに含む②酸化③褐色④ほぼ完形	外面横ナデ，底部へラケズリ。内面横ナデ。
	75－3	土師器 坏	13.4	(9.2)	3.1	一括	①砂粒を含む ②酸化 ③褐色 ④¾	外面横ナデ，胴部無調整，底部へラケズリ。内面ナデ。内外面に「冂」の墨書有り。
C区土壙	77－1	土師器 坏	12.2	8.0	3.5	埋土内	①砂粒を含む ②酸化③赤褐色 ④⅙	外面口縁部横ナデ，底部へラケズリ。内面ナデ。

付表2　土層観察表

木炭窯

1．B軽石純層
2．黒色土　FP・Cスコリア混り
3．黄褐色土　ローム層，天井部または側壁部の崩落土
4．暗茶褐色土　ローム粒を多く含む
5．暗黄褐色土　天井部または側壁部の崩落土を多く含む
6．明褐色土　5層よりやや暗い
7．暗茶褐色土　4層に似るが、焼土粒を含む。
8．赤褐色土　焼土層
9．黒色土　灰層
10．淡黒色土　EP・Cスコリア混り，2層よりもやや明るい
11．暗灰黒色土　灰層，白色粘土を含む
12．橙白色土　粘土及び焼土層，最終時床面
13．赤褐色土　焼土層，最終時前床面
14．黄褐色土　ローム土
15．〃　ローム土，張り床
16．黒色土　白色粘土，焼土ブロック，木炭片等を多く含む
17．暗褐色土　焼土粒，木炭粒を含む
18．明褐色土　ロームブロック，木炭ブロックを含む
19．赤褐色土　木炭ブロックを含む
20．褐色土　焼土ブロック，ロームブロックを含む
21．暗茶褐色土　ロームブロックを多く含む
22．淡黄褐色土　焼土ブロックを含む
23．茶褐色土　カーボン粒，焼土粒を含む
A，B　溝覆土

土坑

1．B軽石純層
2．黒褐色土　C軽石及びFPを含む。良くしまっている。
3．黒色土　C軽石及びFPを含む。良くしまっており，粘性がある。
4．暗褐色土　C軽石及びFPを含む
5．暗褐色土　多量のローム粒及び，極く少量の炭化物を含む。ややしまりなし。

住居

1．B軽石純層
2．黒色土　FPを多く含む。C軽石を含みややしまっている。
3．黒褐色土　極く少量のFPとC軽石を含む
4．黒褐色土　3層に較べC軽石の量は少なくFPは含まない
5．暗褐色土　ローム粒を含み，少量の炭化粒焼土粒焼土粒を含む。ややしまりなし
6．褐色土　ロームブロックを多く含み，しまりがない
7．暗褐色　5層より黒味が強く，炭化物及び少量の焼土粒を含む
8．暗灰褐色土　砂質土，多量のB軽石を含み，しまりなし
9．黒褐色土　やや砂質味を帯び，C軽石を含む
10．ローム土
11．黒色土　ローム粒及びロームブロックを多く含む
12．黒褐色土　10層より褐色味が強い
13．暗褐色土　部分的にロームブロックを含むが，全体的には暗い。しまりがあまりない。

カマド

1．暗灰褐色土　B軽石を含む砂質土
2．黒褐色土　C軽石及び極く少量のFP・焼土粒を含む
3．暗褐色土　2層に似るが，褐色土を多く含み，やや明るい
4．暗褐色土　少量の焼土を含み，わずかに粘性がある
5．暗赤褐色土　焼土粒を含む，4層より粘性が強い
6．暗赤褐色土　焼土粒及び炭化物を含み，しまりなし
7．暗赤褐色土　6層に較べ，焼土粒を多く含む
8．明赤褐色土　焼土層，天井あるいは壁の崩落土，または壁
9．赤褐色土　焼土を含むが，8層より少ない
10．暗褐色土　C軽石を含む，焼土粒を含まない
11．暗褐色土　少量の焼土粒を含む
12．褐色土　極く少量の焼土を含む。ややしまりがある
13．褐色土　少量の焼土を含む。やや粘質
14．淡黄褐色土　ロームブロック及び，極く少量の焼土を含む。
15．暗赤褐色　7層に較べ焼土粒の量が少い。ややしまっている。
16．褐色土　ローム粒を多く含む
17．暗褐色土　少量のローム粒を含む。ややしまりがある。
18．暗褐色土　少量の焼土粒を含む。ややしまりがある
19．暗褐色土　極く少量の焼土を含む。しまりなし

付表3　鉄器類計測表

刀

図	No.	残存状態	全　長	刃　部	茎　部	目釘穴
第6図	2	刃～茎	(40. 65)	(34. 85)	(5.8)	
第23図	4	刃～茎	(54. 45)	(48. 25)	(6.2)	
	5	〃	(67. 6)	(61. 4)	(6.2)	
第44図	1	刃～茎	(38. 7)	(33. 7)	(5.0)	
第48図	8	刃～茎	(37. 4)	(37. 4)	(1.8)	

刀子

図	No.	残存状態	全　長	刃　部	茎　部	備　考
第6図	20	刃～茎	(6.55)	(2.0)	4.55	
	21	〃	(3.45)	(1.35)	(2.1)	
	22	〃	(3.8)	(1.85)	(1.95)	
	23	〃	(3.6)	(1.4)	(2.2)	
第23図	1	刃～茎	(11.7)	(8.15)	(3.55)	
	2	刃	(5.0)	(5.0)	—	
	3	刃～茎	(7.2)	(2.0)	(5.2)	
第26図	1	刃	(8.1)	(8.1)		
第35図	1	刃～茎	(8.9)	(8.2)	(0.7)	
	2	刃～茎	(4.7)	(3.2)	(1.5)	
第39図	1	刃～茎	(5.6)	(3.4)	(2.2)	
	2	〃	(7.6)	(1.8)	(5.8)	
	3	〃	(12.7)	(6.5)	(6.2)	口巻遺存
第53図	2	刃刃	(5.6)	(5.6)		
	3	〃	(7.1)	(7.1)		
	4	刃～茎	(5.95)	(2.0)	(3.95)	
	5	刃～茎	(5.8)	(0.85)	(4.95)	
	6	刃	(5.0)	(5.0)		
	7	〃	(5.1)	(3.3)	(1.8)	

釘

図	No.	a	b	c	d
第15図	2	(2.75)	0.9	0.4	0.45
第39図	4	(4.8)	1.0	0.45	0.55
	5	(5.5)	1.0	0.4	0.5
	6	(4.2)	1.1	0.35	0.45
	7	(5.5)	1.0	0.4	0.5
	8	(3.05)	0.8	0.4	0.45
	9	(3.15)	1.05	0.5	0.45
	10	(4.55)	——	0.4	0.3
	11	(1.5)	0.9	——	——

金環

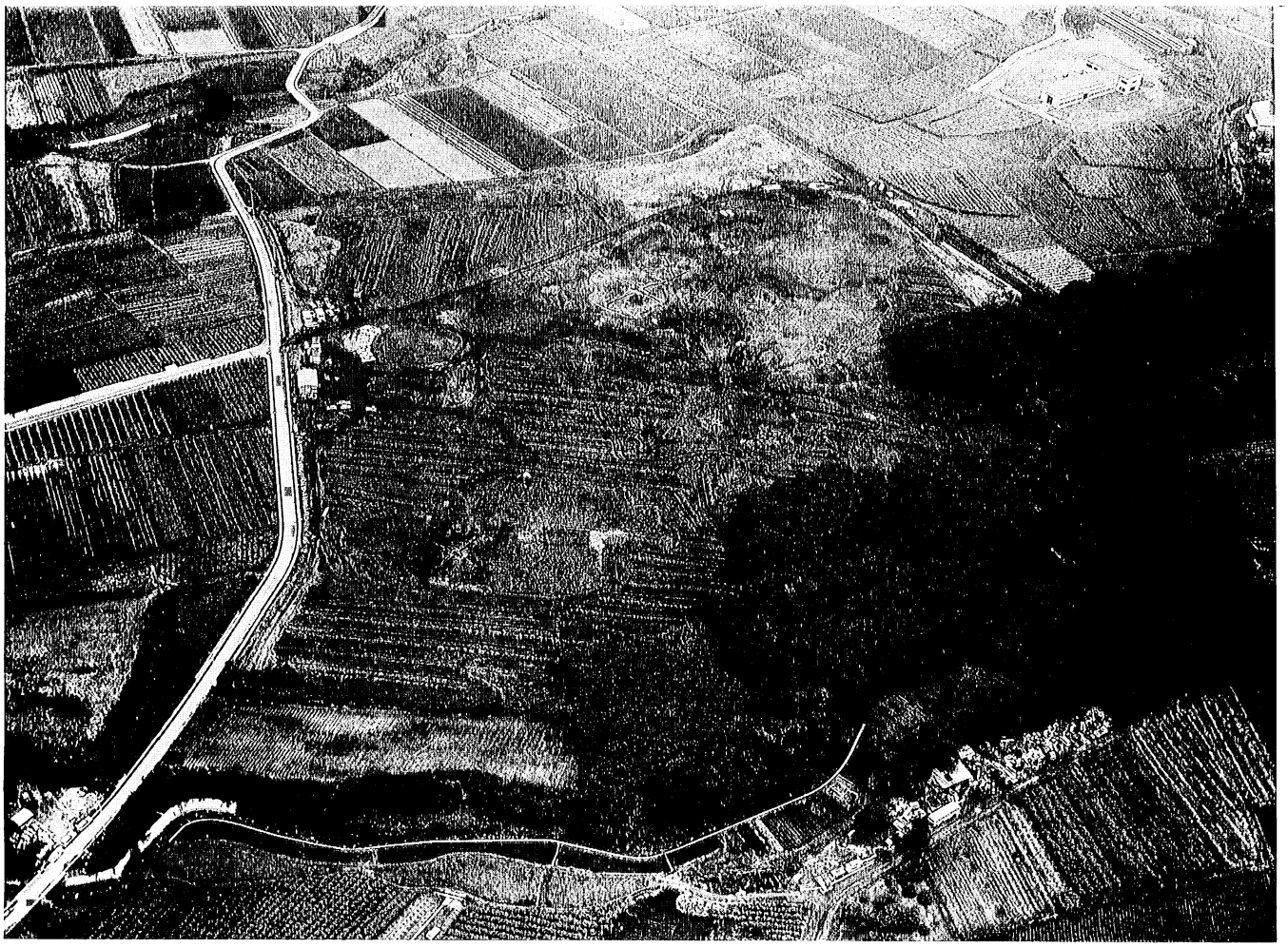
図	No.	残存状態	外径 (cm)		内径 (cm)		断面 (cm)	
			a	b	c	d	e	f
第18図	2	ほぼ完形	1.95	(1.7)	1.05	0.95	(0.8)	(0.45)
	3	完形	1.9	1.75	1.0	1.0	0.7	0.4
	4	ほぼ完形	1.55	1.6	0.85	0.9	0.6	0.4
第24図	12	完形	2.1	1.85	1.2	1.05	0.7	0.45
	13	ほぼ完形	1.8	1.65	1.1	0.95	0.6	0.4
第48図	9	完形	1.6	1.65	1.0	0.9	0.55	0.4

図	No.	足　金　具	吊　金　具	鍔	把　　頭	把　頭　縁
第23図	6	(3.95) ×3.05				
	7	4.15×2.45				
	8		(0.95×　　厚み0.6			
	9		3.65×1.9　厚み0.7			
第48図	4			7.6×		
	5				(2.9)×(3.8)	
	6	3.3 ×2.25				
	7					3.25×1.85　厚み0.3
第53図	1		(1.95)×(2.85) 厚み0.7			

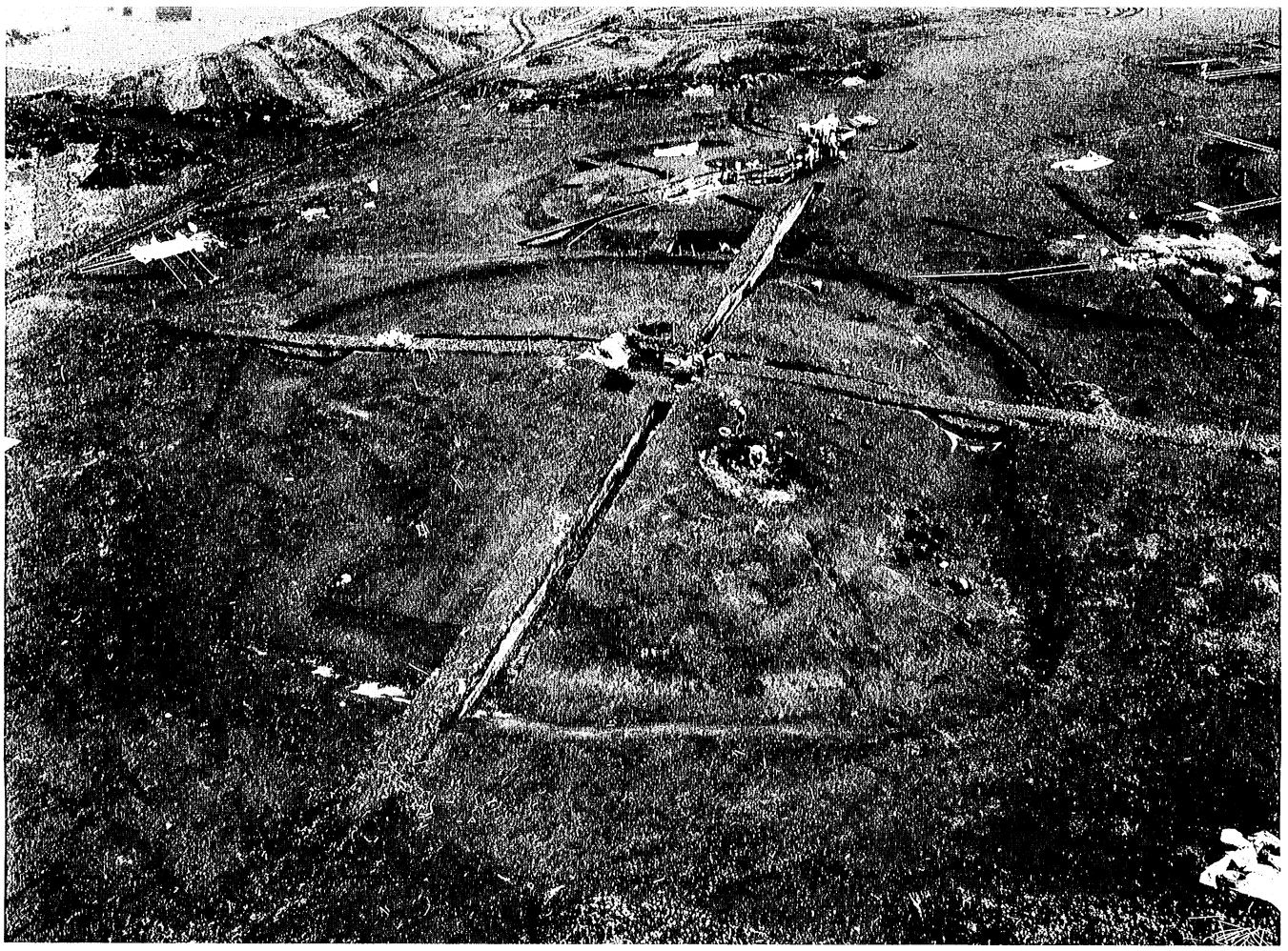
鉄鏃

図	No.	残　存　状　態	全　長	鏃　身　部			箆　被　部			茎　　部			備　　考
			a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	
第6図	3	刃～柄	(9.1)	(3.0)	1.1	0.2	(6.1)	0.6	0.3				
	4	刃～柄	(9.1)	1.85	0.95	0.35	(7.25)	0.7	0.35				
	5	〃	(7.6)	4.35	1.0	0.25	(3.25)	0.55	0.3				
	6	〃	(4.7)	1.6	0.75	0.3	(3.1)	0.7	0.35				
	7	〃	(6.1)	4.75	0.8	0.25	1.35	0.5	0.25				
	8	〃	(7.4)	1.8	0.85	0.35	5.6	0.65	0.4				
	9	〃	(2.75)	1.9	1.0	0.45	8.5	0.9	0.25				
	10	〃	(3.6)	3.0	0.95	0.2	0.6	0.55	0.25				
	11	〃	(3.35)	2.25	0.8	0.3	1.1	0.6	0.3				
	12	柄～茎	(7.05)	——	——	——	(5.0)	0.55	0.25	(2.05)	0.4	0.35	口巻遺存
	13	〃	(7.9)	——	——	——	(4.0)	0.7	0.4	(3.9)	0.4	0.25	〃
	14	〃	(6.5)	——	——	——	(6.0)	0.55	0.4	(0.5)	0.5	0.3	〃
	15	〃	(5.95)	——	——	——	(4.05)	0.6	0.35	(1.9)	0.5	0.35	〃
	16	〃	(4.15)	——	——	——	(1.45)	0.6	0.3	(2.7)	0.3	0.3	〃
	17	〃	(5.8)	——	——	——	(3.45)	0.6	0.35	2.35	0.45	0.35	
	18	〃	(3.75)	——	——	——	(2.9)	0.6	0.4	0.85	0.5	0.3	
	19	〃	(3.8)	——	——	——	(2.6)	0.7	0.4	(1.2)	0.45	0.4	
第15図	1	刃～柄	(7.3)	(6.7)	2.5	0.3	(0.8)	0.7	0.7				
第24図	1	刃～柄	14.1	0.85	0.75	0.4	10.35	0.7	0.6	2.9	0.5	0.5	
	2	〃	(12.3)	1.6	0.7	0.4	8.7	0.5	0.5	(2.0)	0.45	0.4	
	3	刃～柄	(6.2)	1.9	0.6	0.35	4.3	0.3	0.4				
	4	〃	(4.95)	0.95	0.85	0.25	(4.0)	0.4	0.4				
	5	柄	(8.3)				(8.3)	0.55	0.4				
	6	柄～茎	(5.25)				(3.05)	0.4	0.2	(2.2)	0.2	0.2	
	7	〃	(5.25)				(1.3)	0.55	0.25	(3.95)	0.4	0.25	
	8	〃	(7.2)				(5.6)	0.5	0.25	(1.6)	0.4	0.2	
	9	〃	(7.3)				(2.4)	0.4	0.2	(4.9)	0.4	0.35	
	10	〃	(6.35)				(2.95)	0.45	0.5	(3.4)	0.35	0.25	
	11	〃	(6.95)				(1.9)	0.45	0.2	(5.05)	0.35	0.25	
第53図	8	刃～柄	(3.4)	1.4	0.55	0.3	(2.0)	0.45	0.45				
	9	〃	(3.45)	(1.55)	0.95	0.55	(1.9)	0.6	0.6				

写 真 図 版



1．西原古墳群全景(北西より)



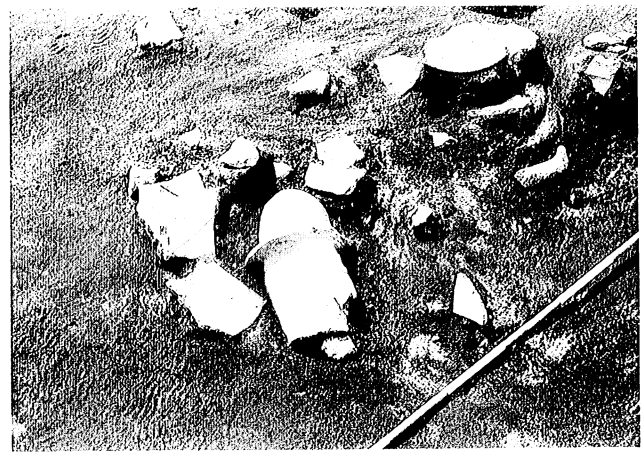
2．F—1号墳全景(北より)

1．F—1号墳石室全景(西より)

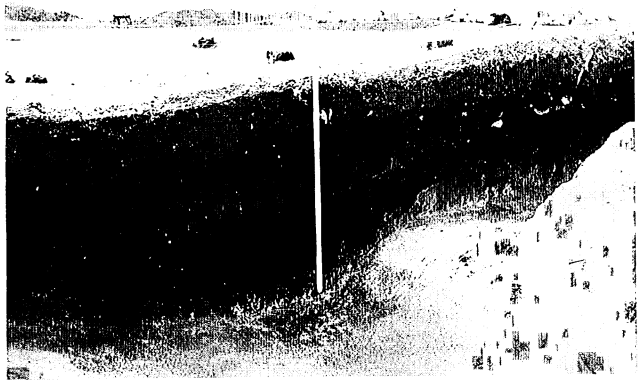
2．石室部閉塞状況

3．石室部全景(閉塞除去後北より)

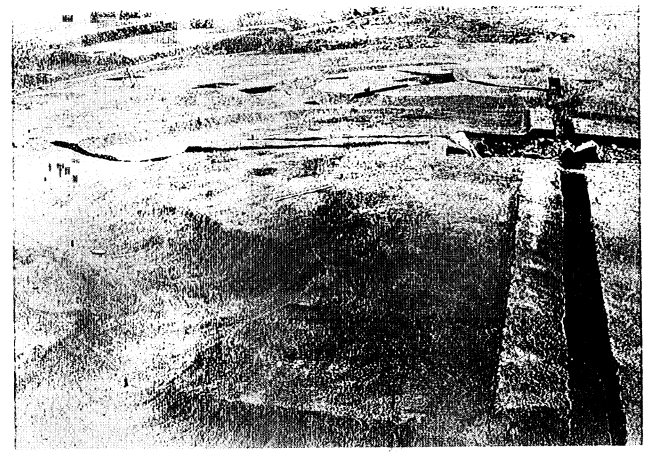
4．墳丘遺物出土状態



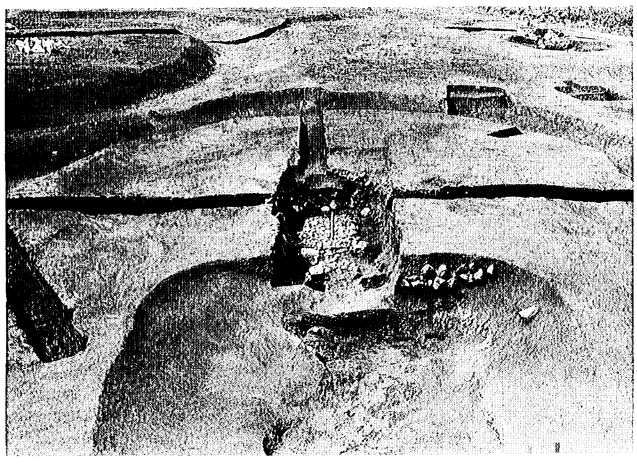
5．遺物出土状態(人物埴輪)



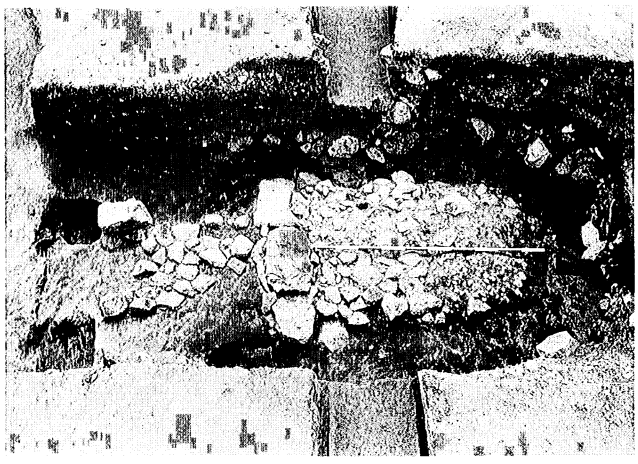
6．周溝及び墳丘土層断面



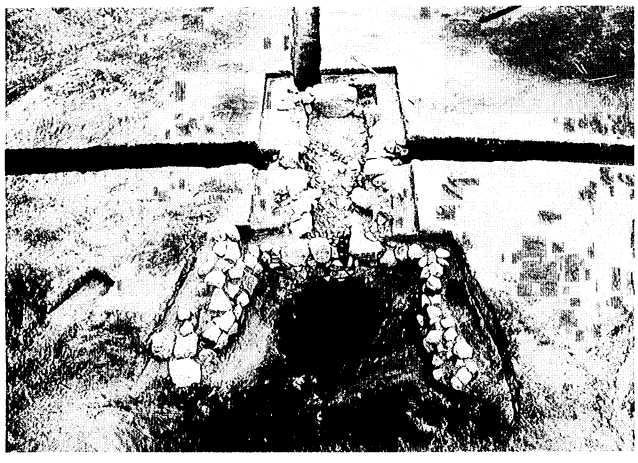
7．円筒埴輪配列状態(東くびれ部)



1．F—2号墳全景(南より)

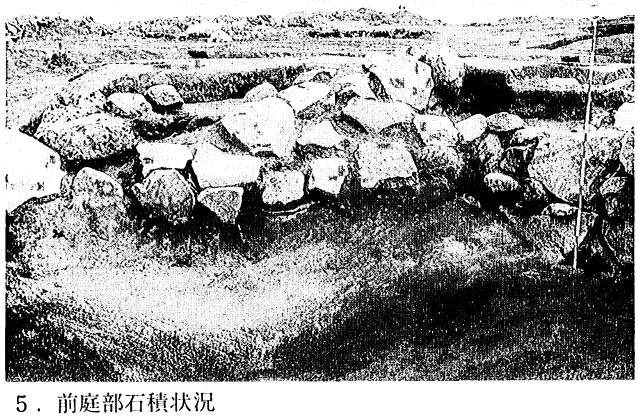


2．石室部全景(東より)

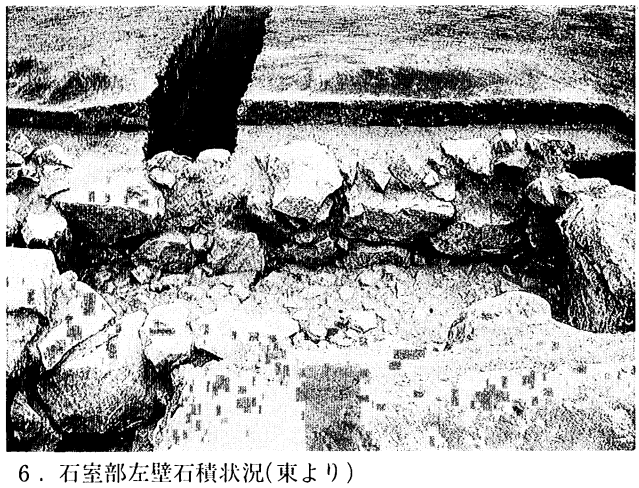


3．F—3号墳全景(南より)

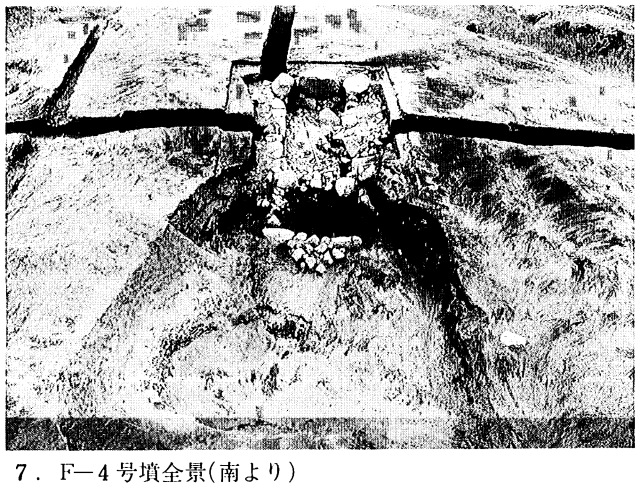
4．石室閉塞状況



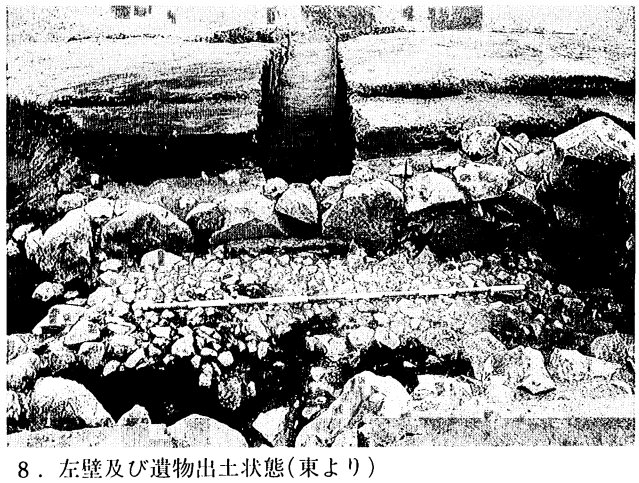
5．前庭部石積状況



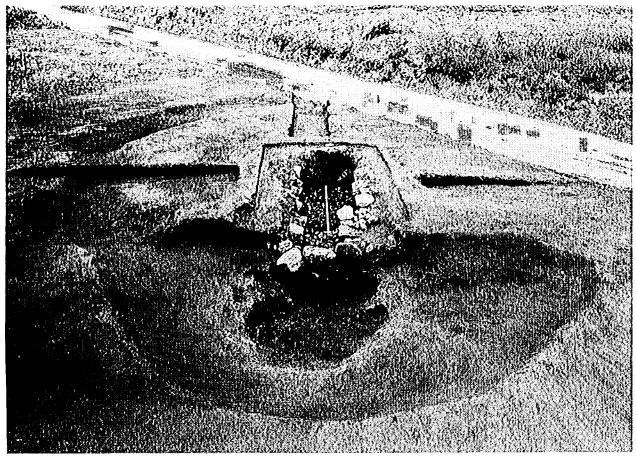
6．石室部左壁石積状況(東より)



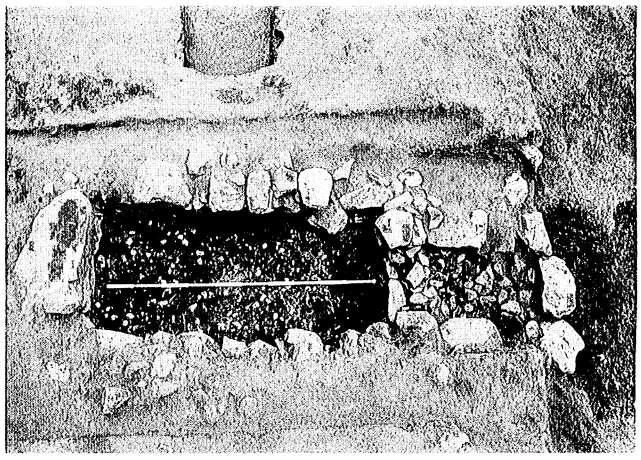
7．F—4号墳全景(南より)



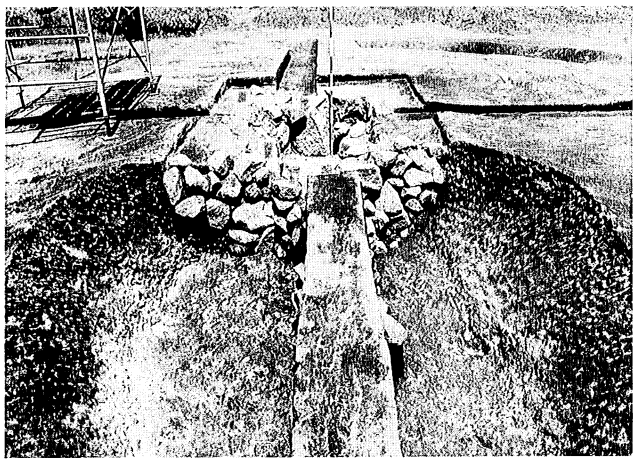
8．左壁及び遺物出土状態(東より)



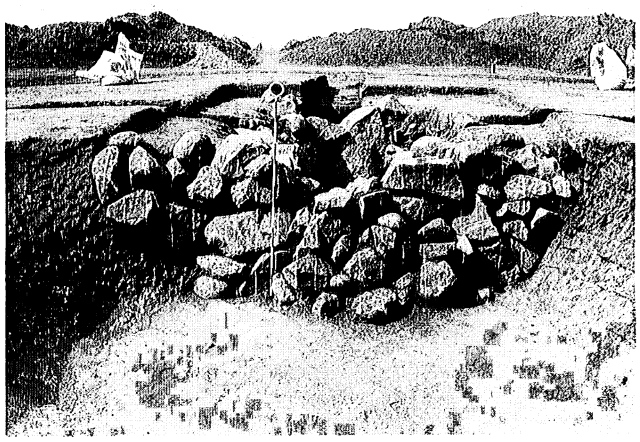
1．F—5号墳全景(南より)



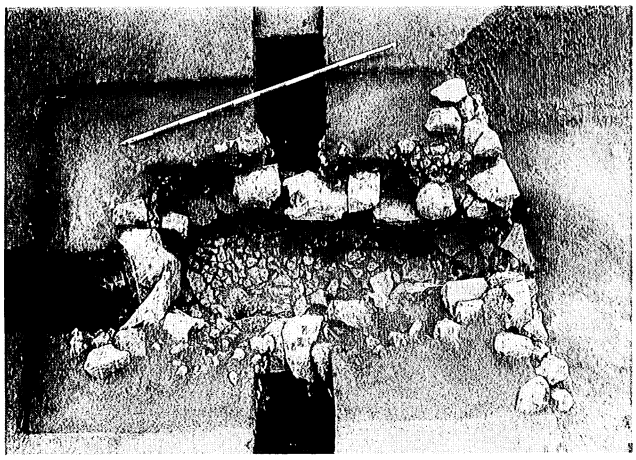
2．石室部全景(西より)



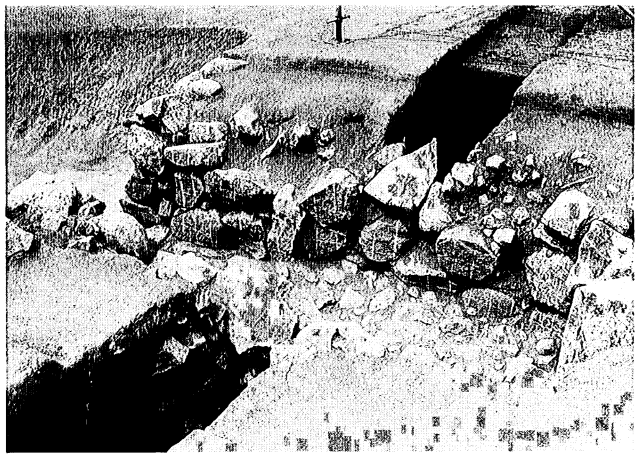
3．I—1号墳全景(南より)



4．石室部閉塞状況

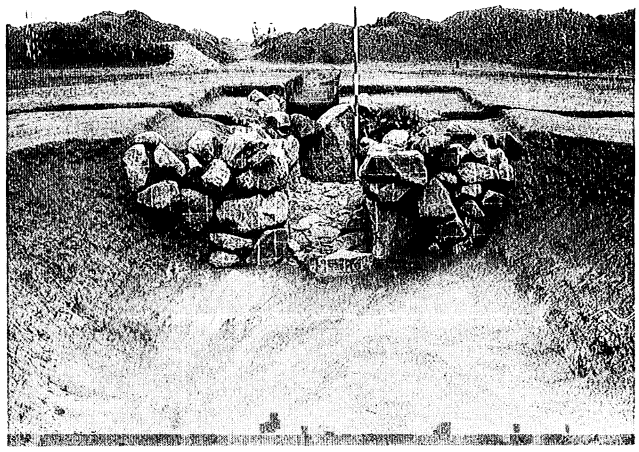


5．石室部全景(閉塞除去後)



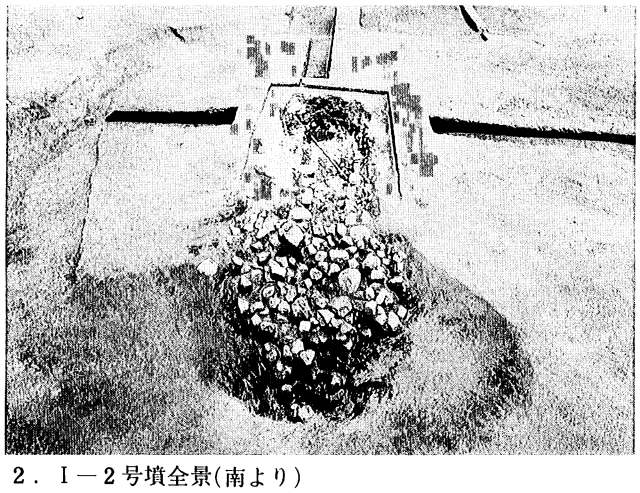
6．石室部左壁石積状況

7．石室部右壁石積状況



8．前庭部正面

1．Ⅰ・F区全景(南より)



2．Ⅰ－2号墳全景(南より)

3．石室部全景(北より)

4．石室部左壁石積状況(東より)

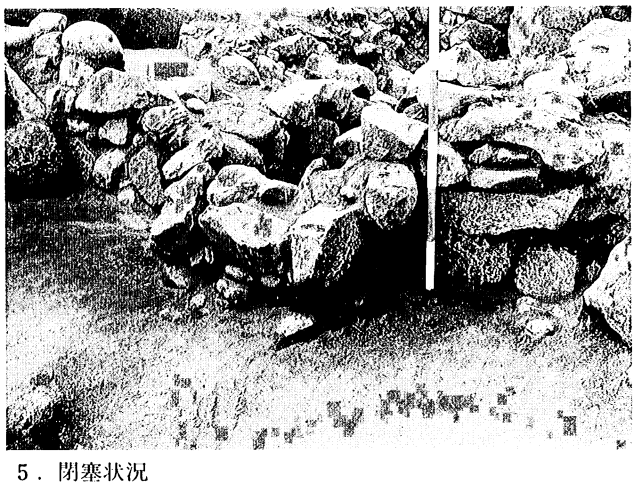
5．石室部右壁石積状況(西より)

1．Ⅰ－3号墳全景(南より)

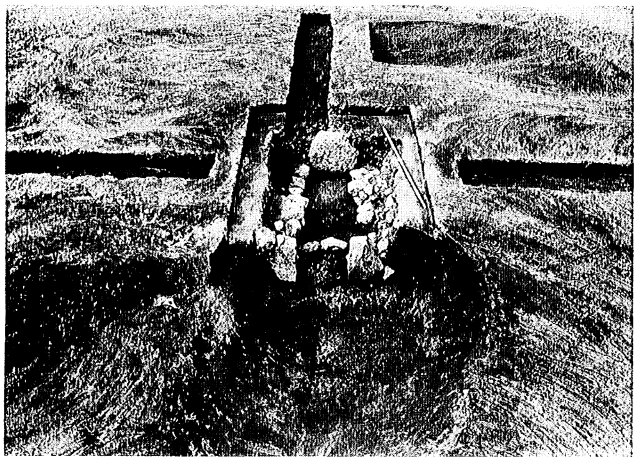
2．石室部全景(閉塞除去前)

3．石室部開口状況(北より)

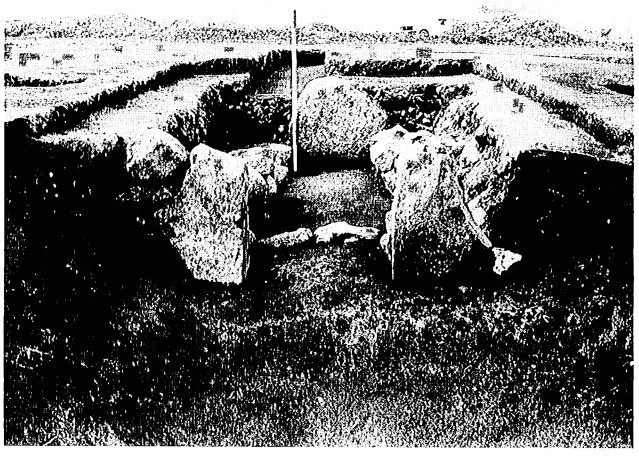
4．前庭部正面



5．閉塞状況

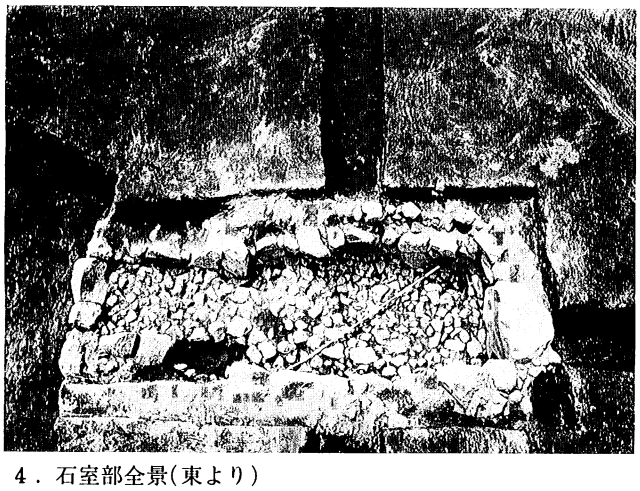


1．Ⅰ－4号墳全景(南より)

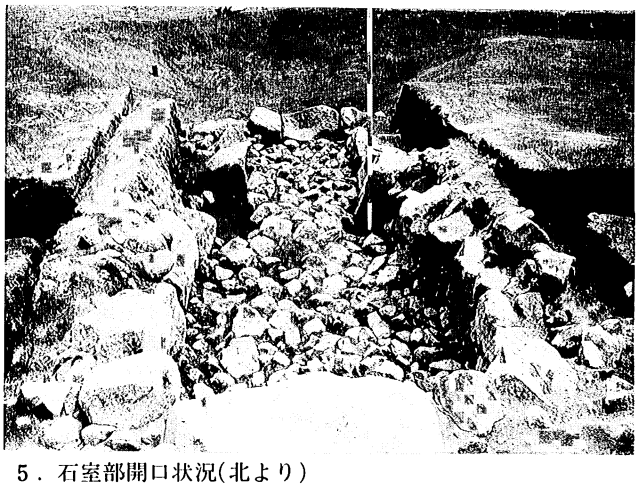


2．石室部正面

3．A－1号墳全景(南より)

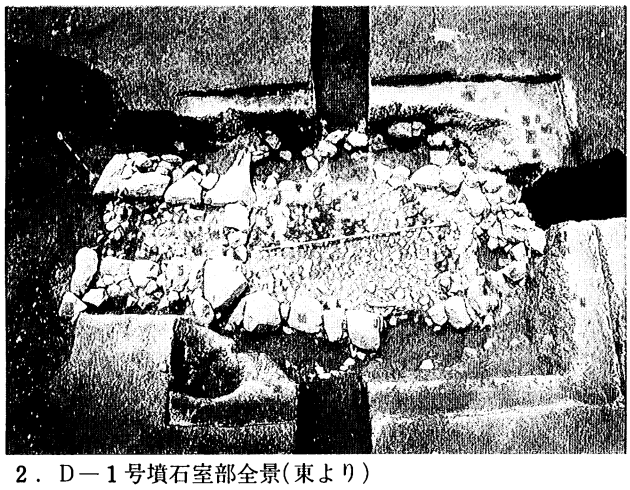


4．石室部全景(東より)

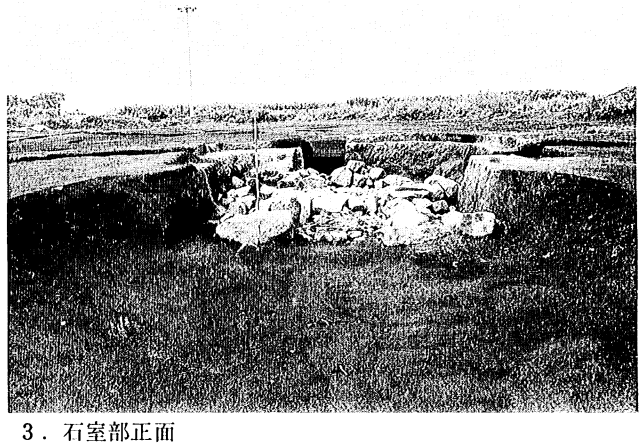


5．石室部開口状況(北より)

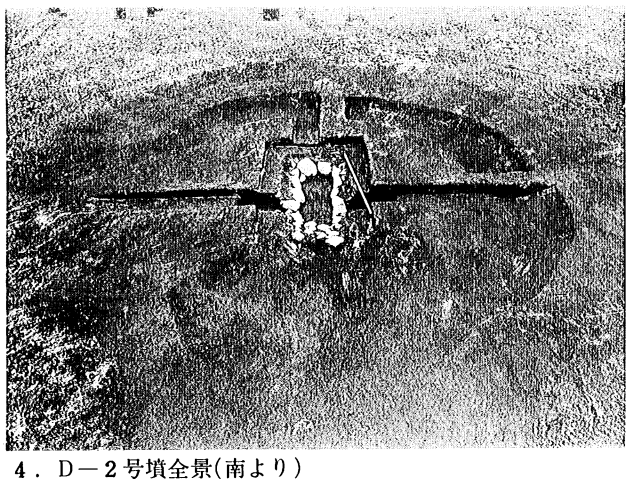
1．D区全景(南より)



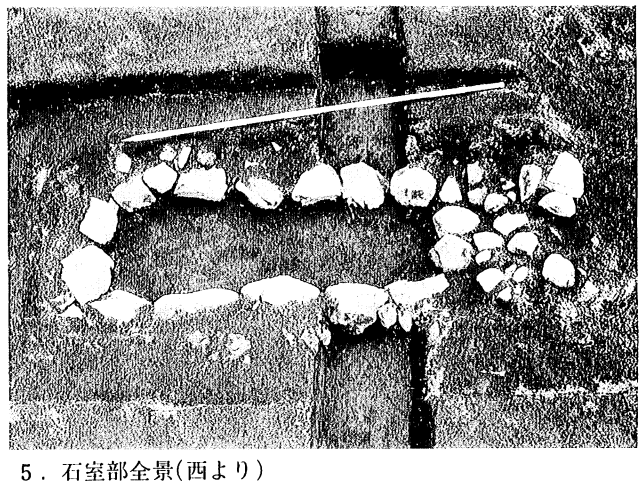
2．D－1号墳石室部全景(東より)



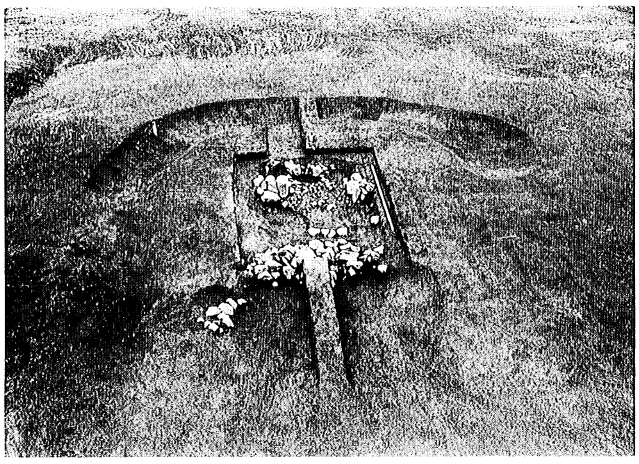
3．石室部正面



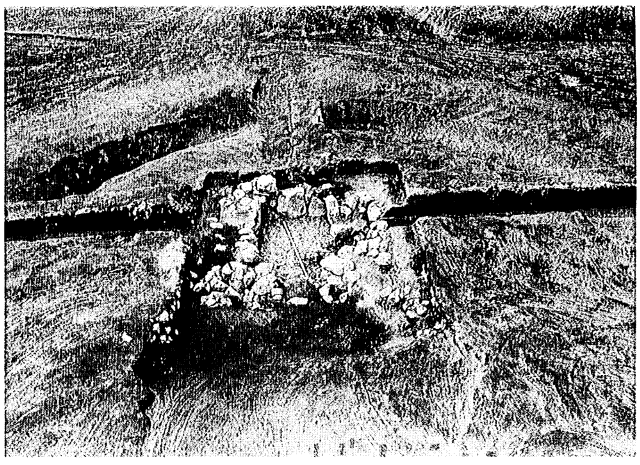
4．D－2号墳全景(南より)



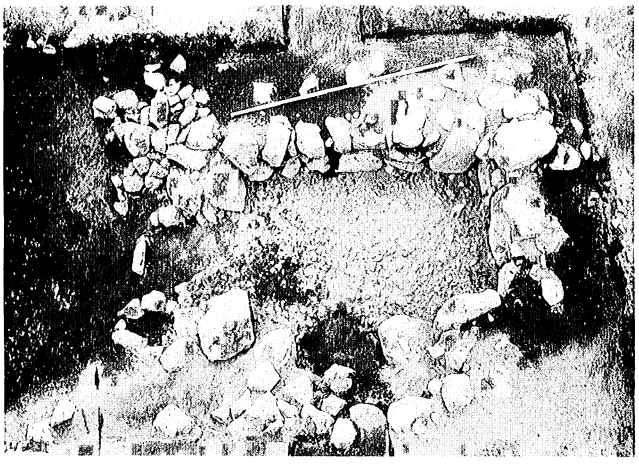
5．石室部全景(西より)



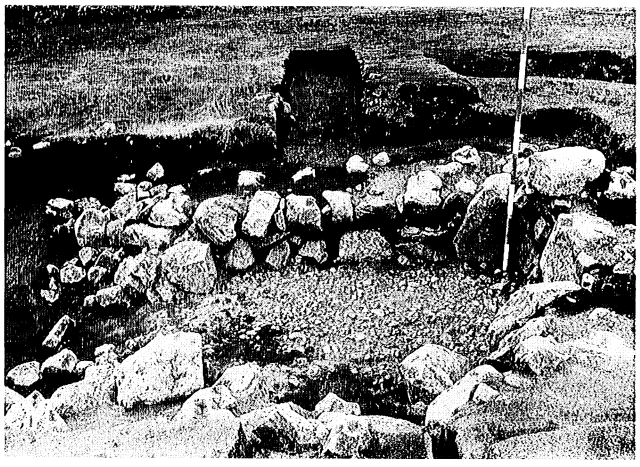
1．B－1号墳全景(南より)



2．E－1号墳全景(南より)

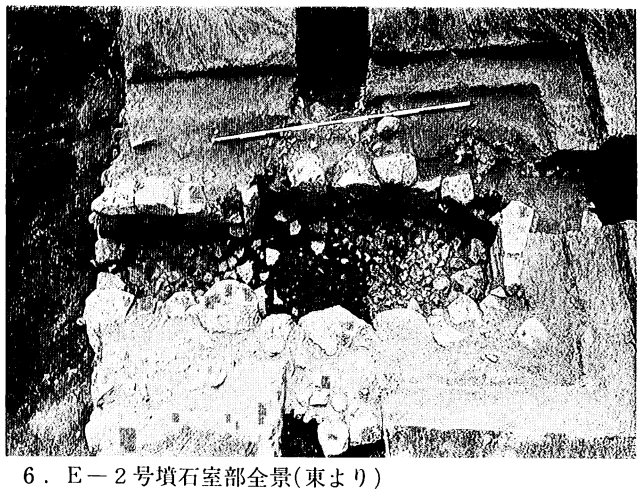


3．E－1号墳石室部全景(西より)

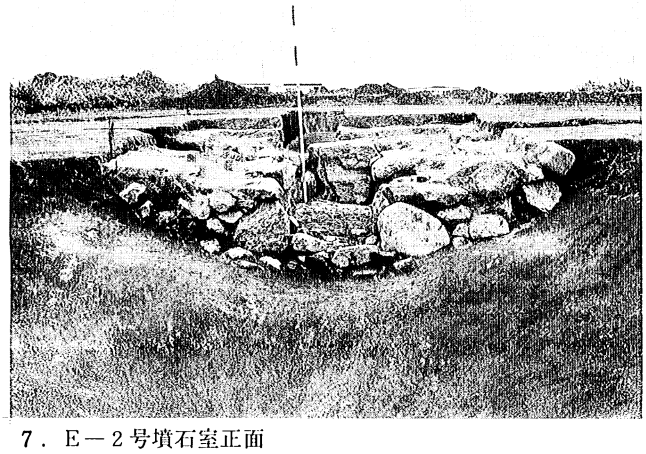


4．E－1号墳石室部左壁石積状況

5．E－2号墳全景(南より)

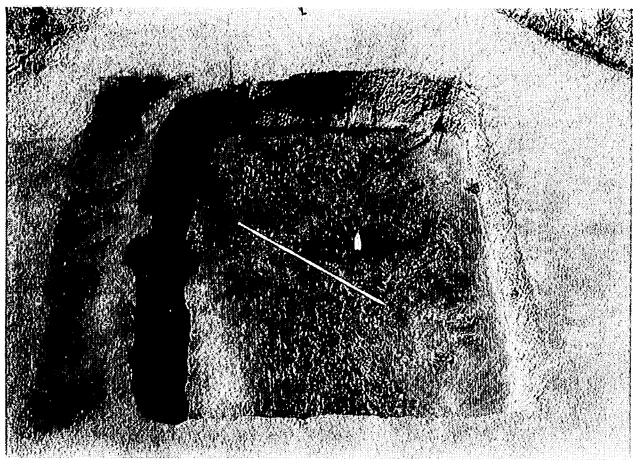


6．E－2号墳石室部全景(東より)

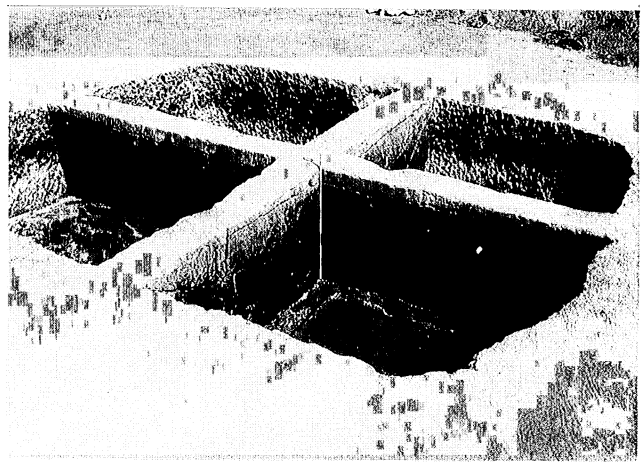


7．E－2号墳石室正面

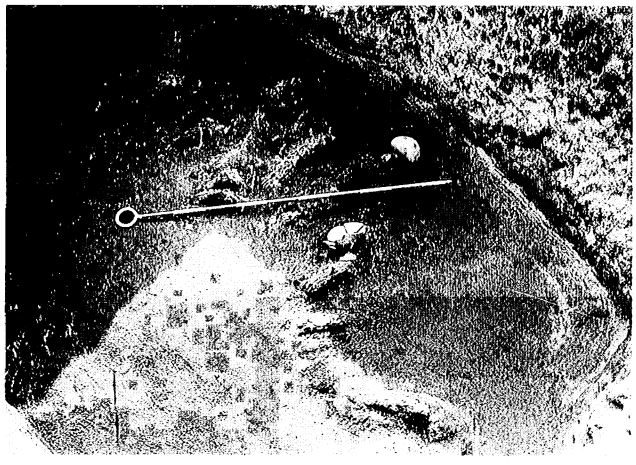
8．E－2号墳石室部開口状況(北より)



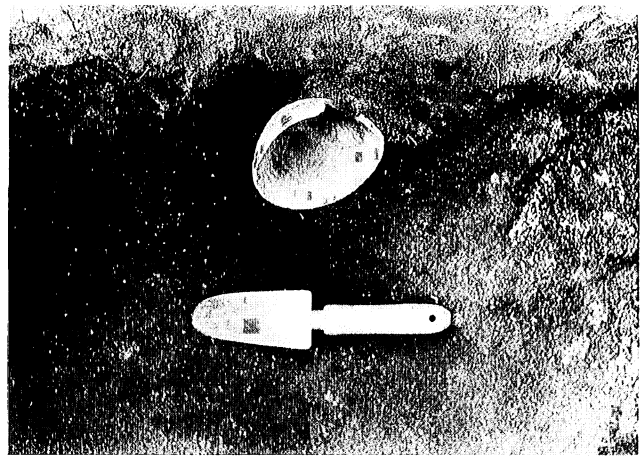
1．IH—1号住全景(東より)



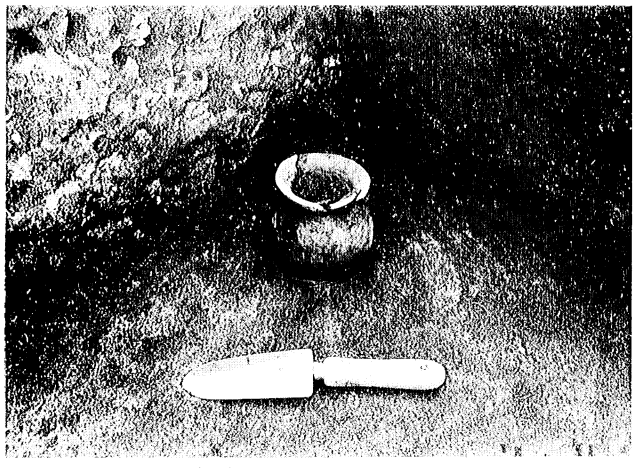
2．土層断面(北より)



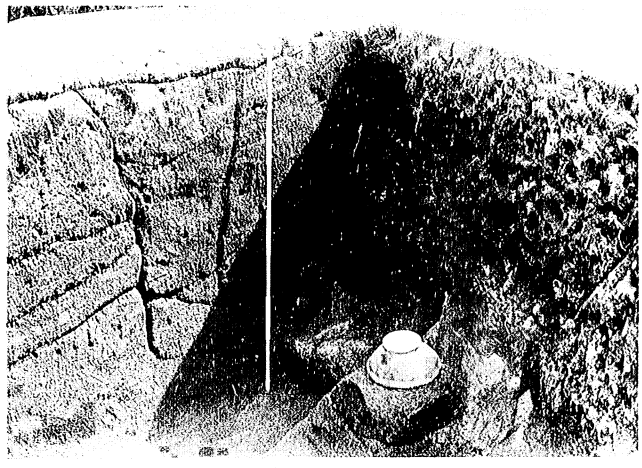
3．北壁より遺物出土状態(東より)



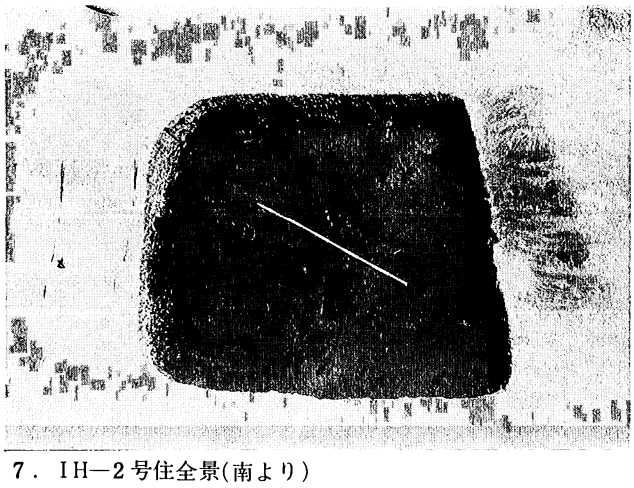
4．遺物出土状態(埦)



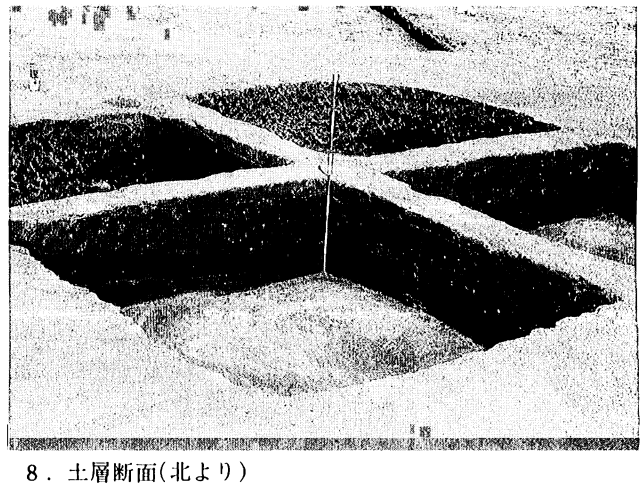
5．遺物出土状態(壺)



6．IH—1号住内土壙遺物出土状態



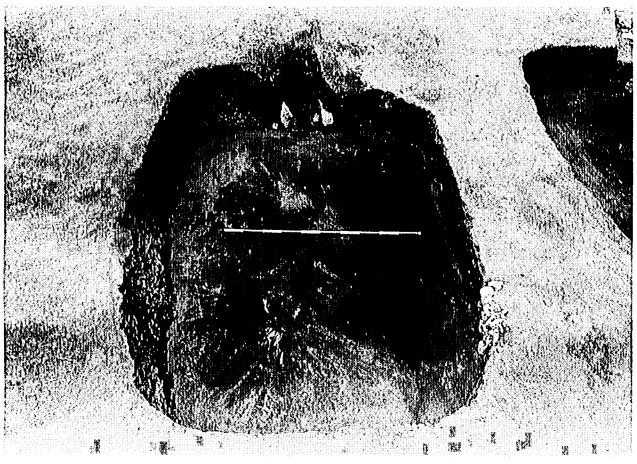
7．IH—2号住全景(南より)



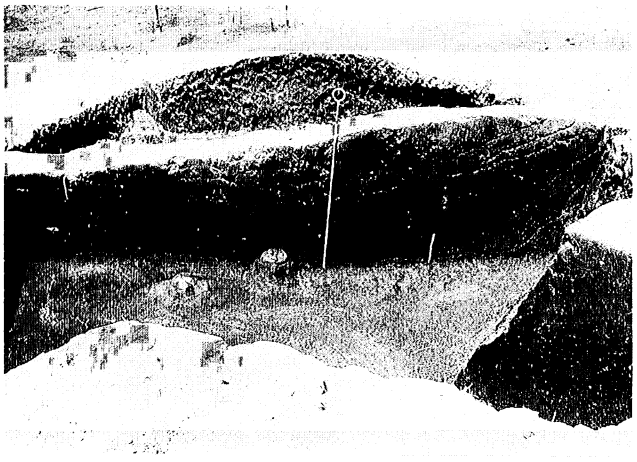
8．土層断面(北より)

1．H区遠景(東より)

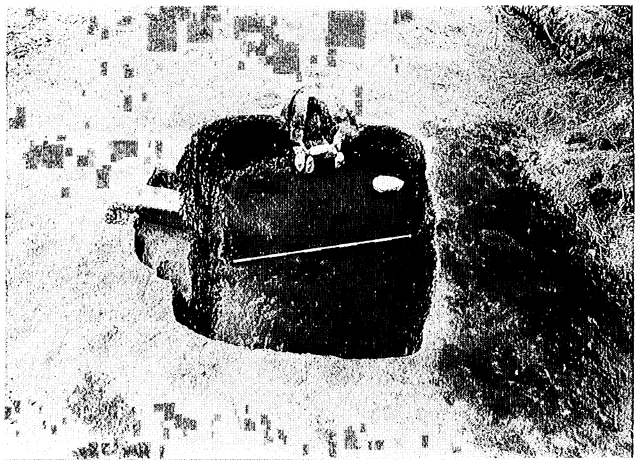
2．H区住居全景(北より)



3．HH—1号住全景(西より)

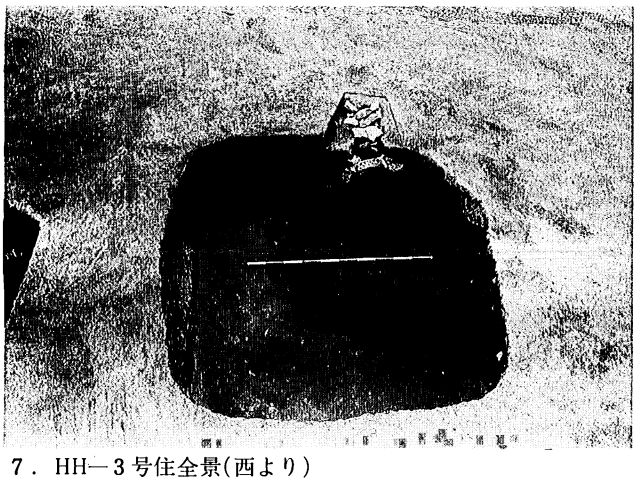


4．土層断面(南より)



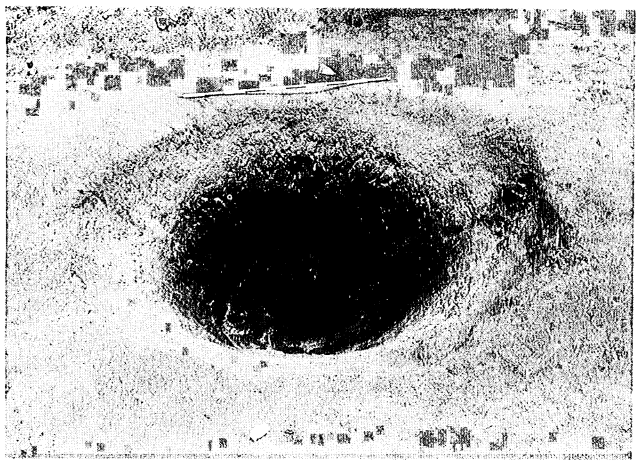
5．HH—2号住全景(西より)

6．遺物出土状態

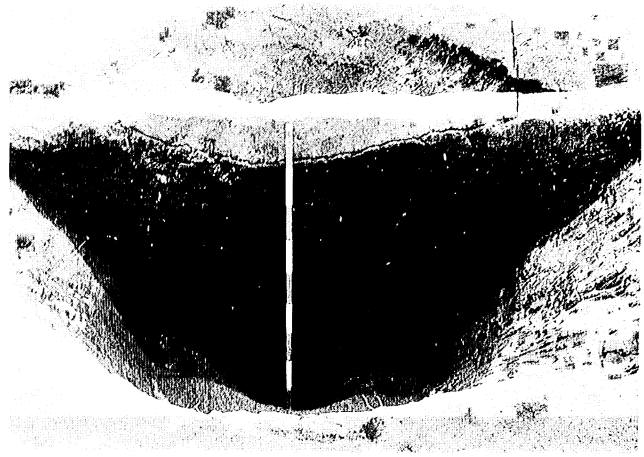


7．HH—3号住全景(西より)

8．カマド部全景

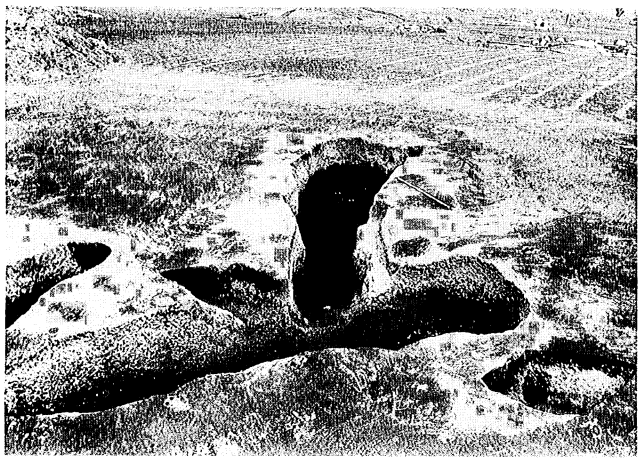


1．C区円形土壙全景(西より)

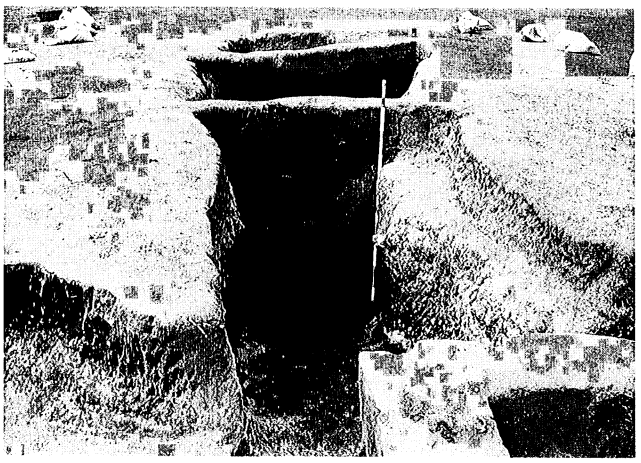


2．土層断面

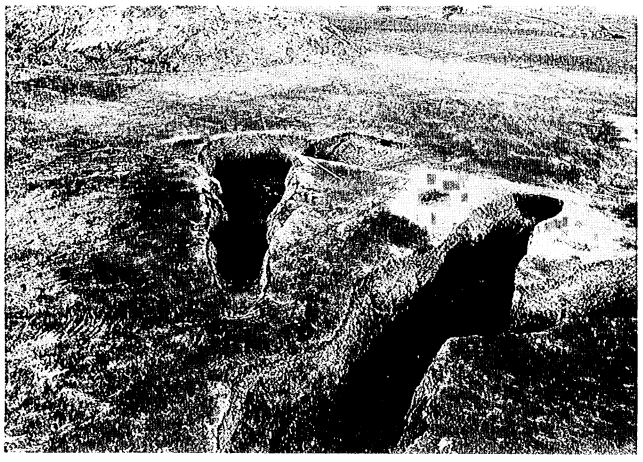
3．H区木炭窯全景(南より)



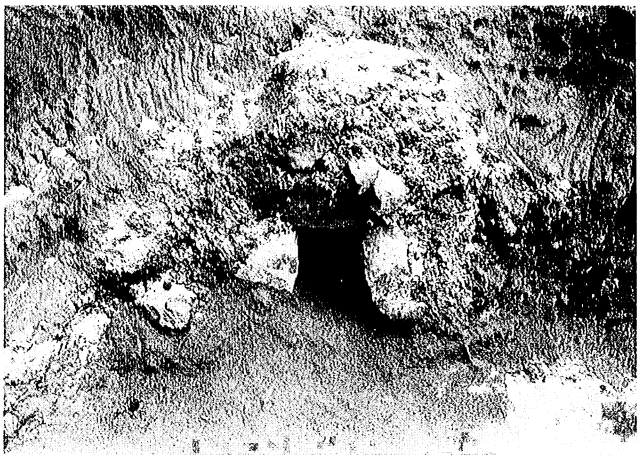
1．1号，4号木炭窯全景(南より)



2．1号木炭窯土層断面

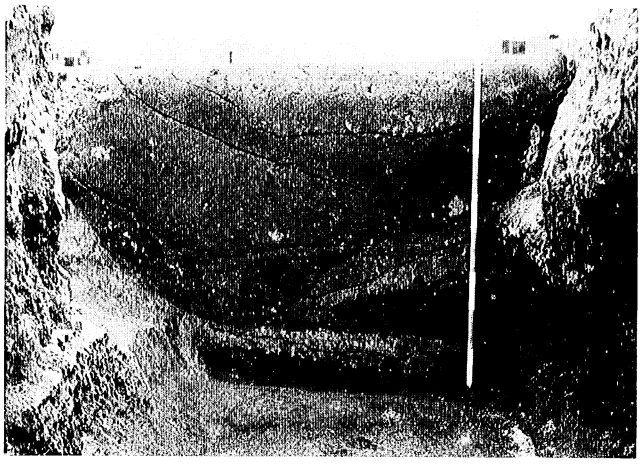


3．2号木炭窯全景(南より)



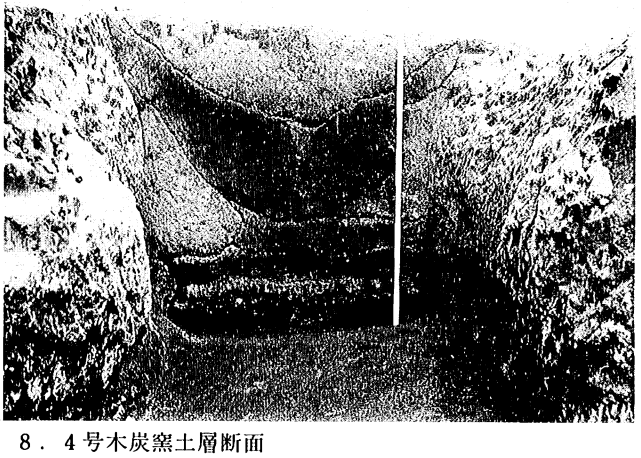
4．煙道部

5．3号木炭窯全景(南より)



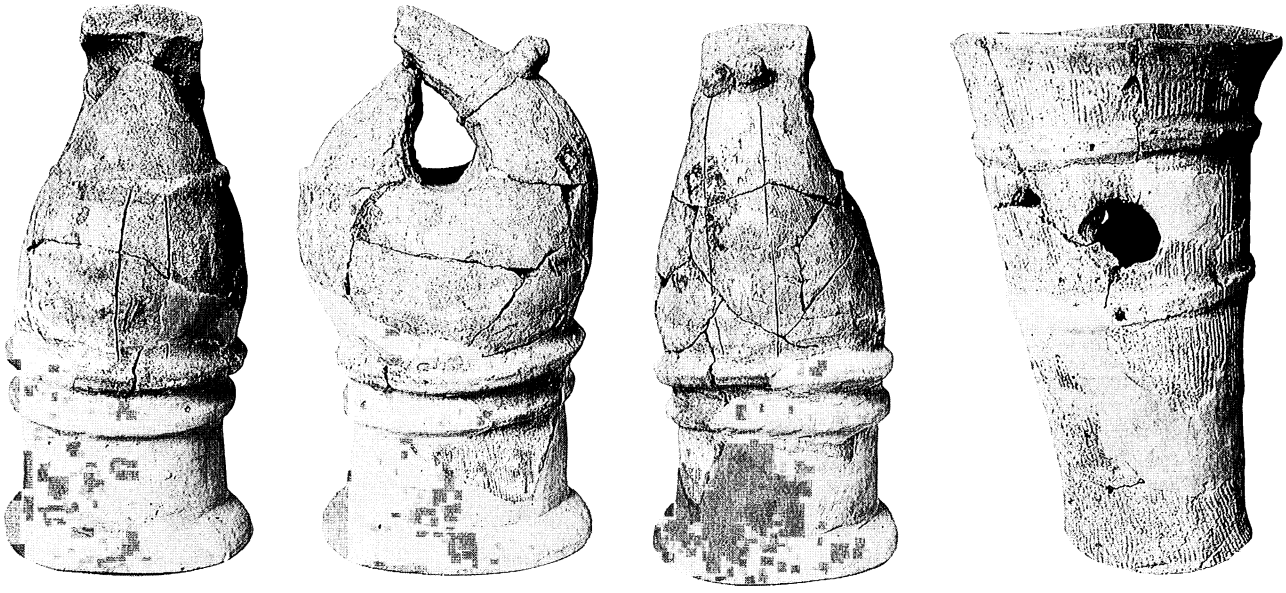
6．3、4号木炭窯土層断面

7．4号木炭窯全景(西より)

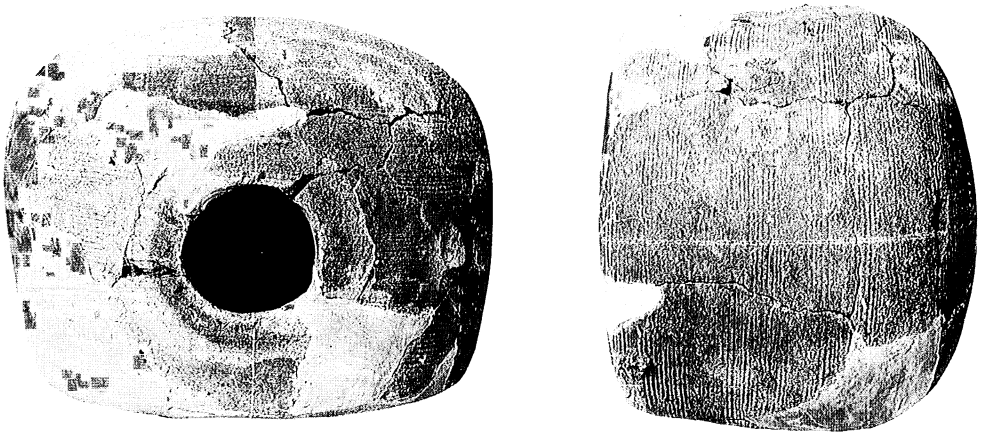


8．4号木炭窯土層断面

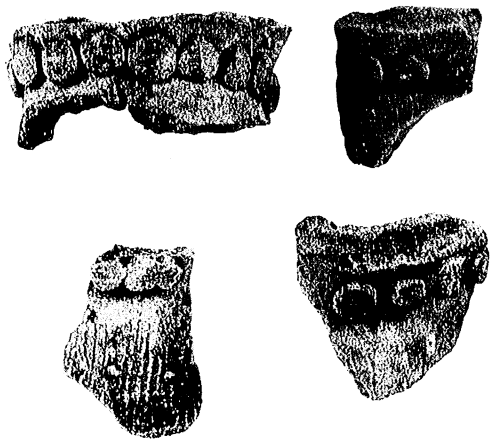
9-1



10-1

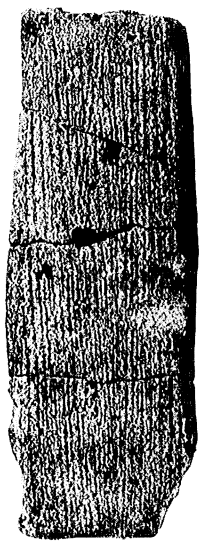


6-1

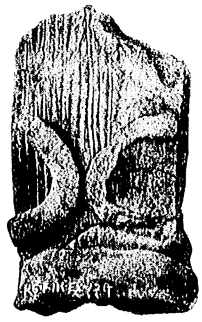


9-3~6

18-1

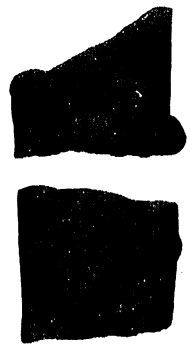


10-9



10-7

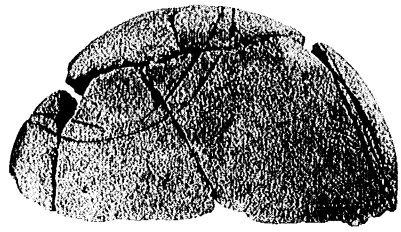
10-8



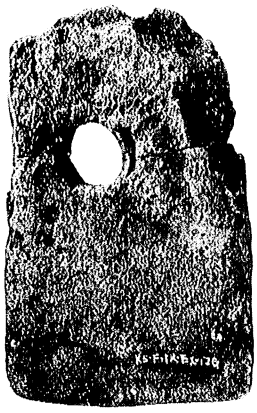
10-4,5

10-6

9-8

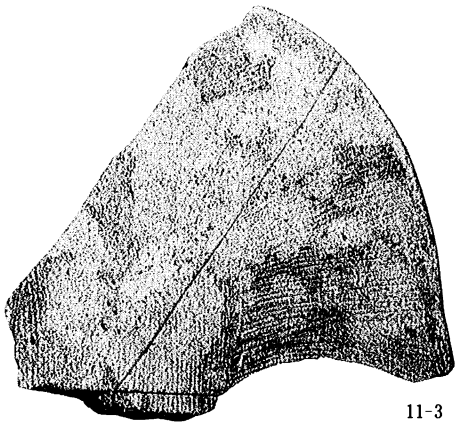


9-1

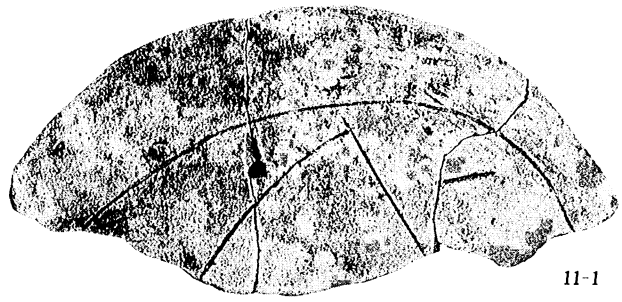


10-10

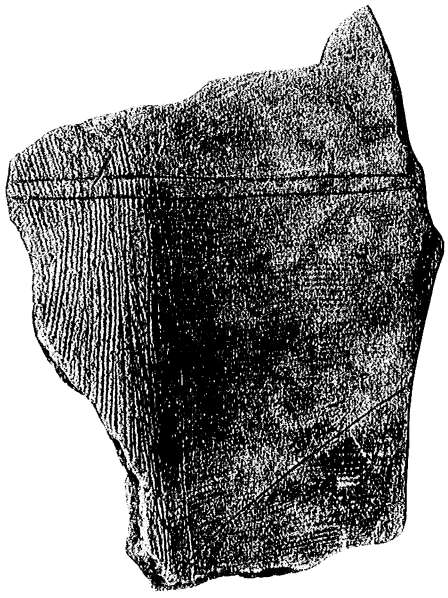
10-12



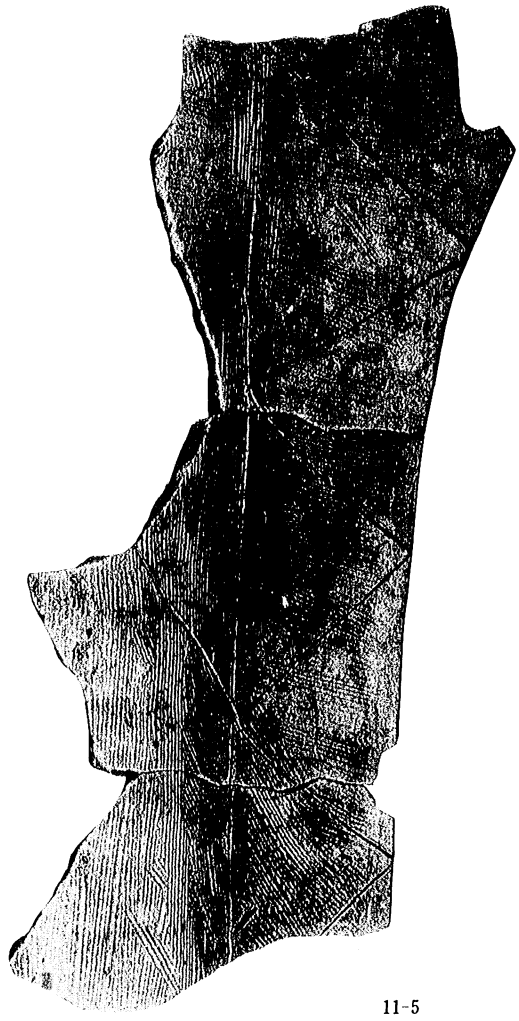
11-3



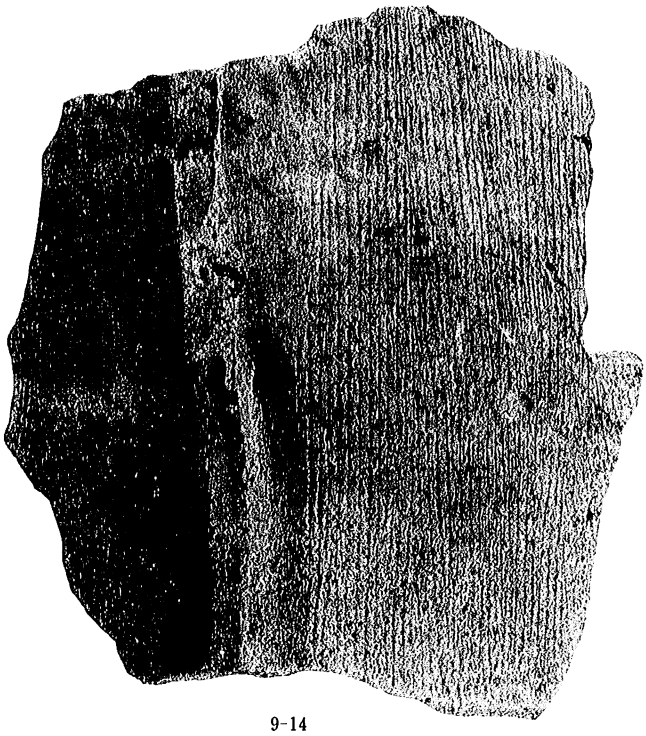
11-1



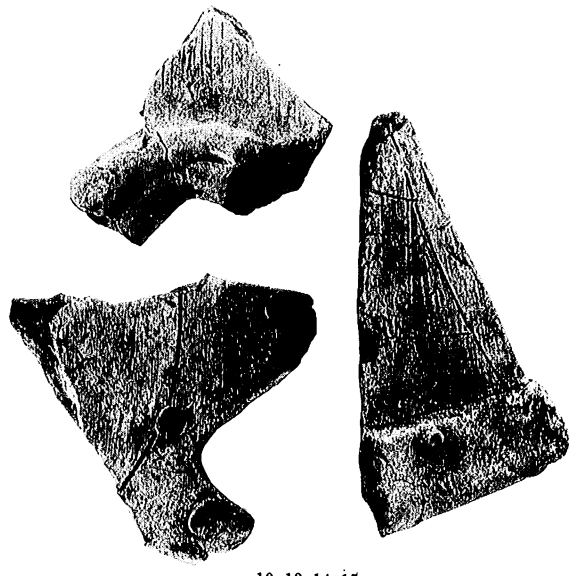
11-6



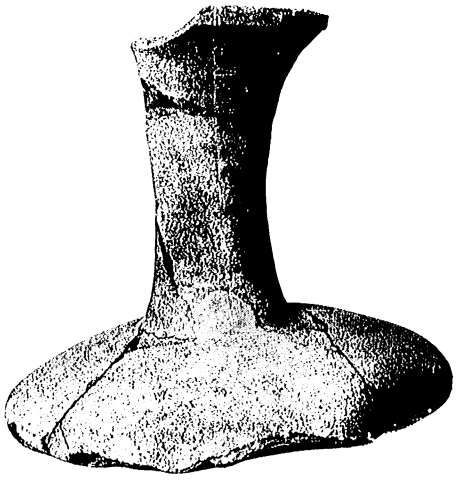
11-5



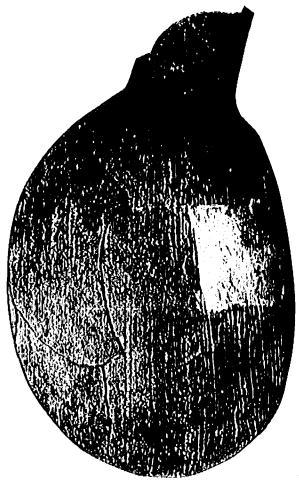
9-14



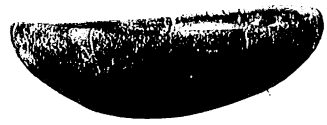
10-13, 14, 15



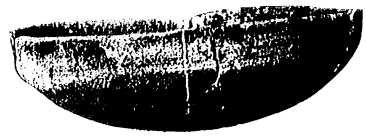
15-3



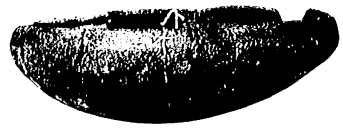
18-7



18-6



18-5

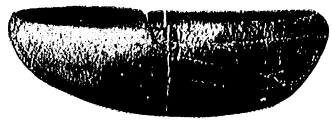


22-3

29-3

29-1

22-1



29-2

35-3

35-9

35-6

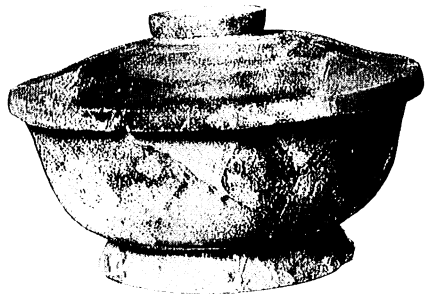
35-11

35-4

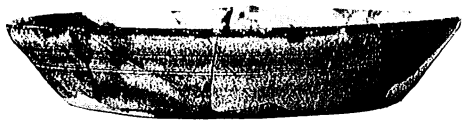
35-3

35-7

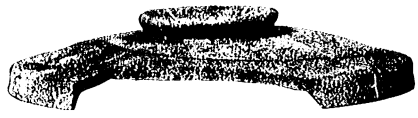
39-20,21



39-18,19



39-13



39-16

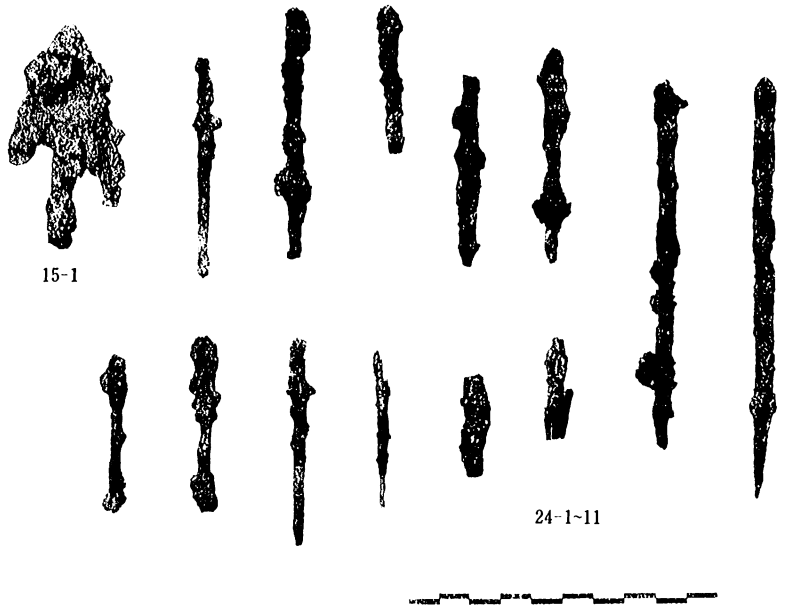
39-14

53-10

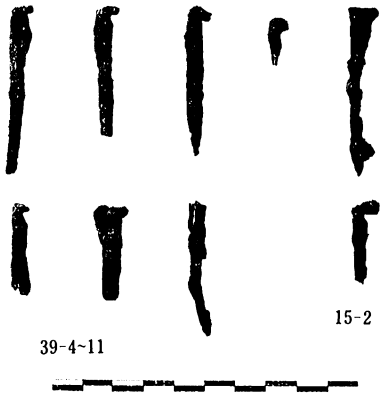
48-3

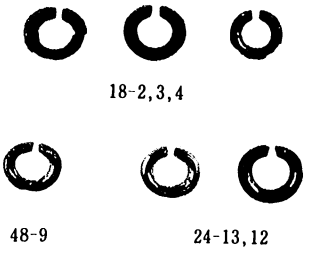
48-1

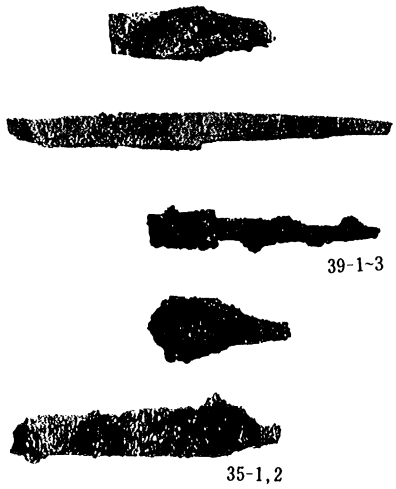
48-2


15-1
24-1~11

6-3~23

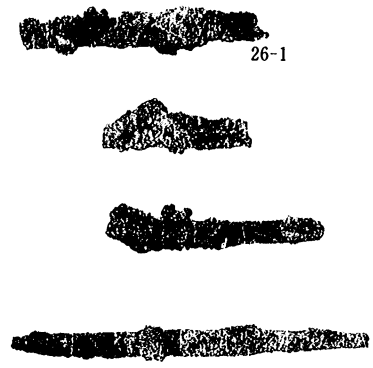

15-2
39-4~11


18-2,3,4
48-9
24-13,12



39-1~3

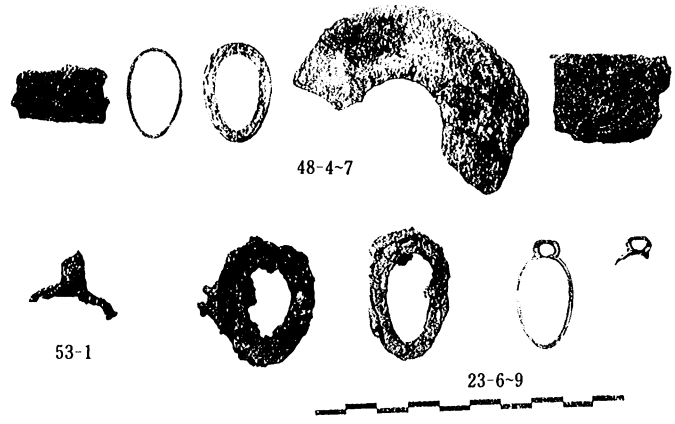
35-1,2



26-1

23-1~3

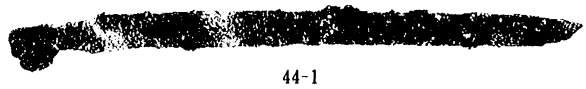
53-2~7



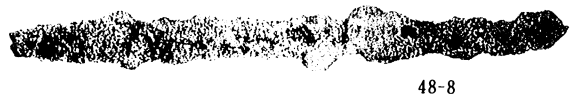
48-4~7

53-1

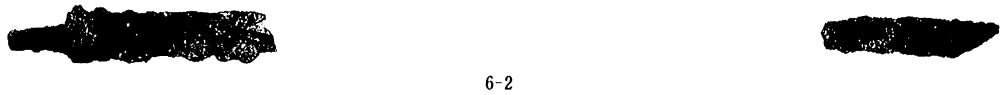
23-6~9



44-1

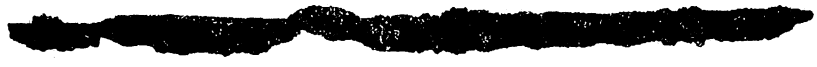


48-8



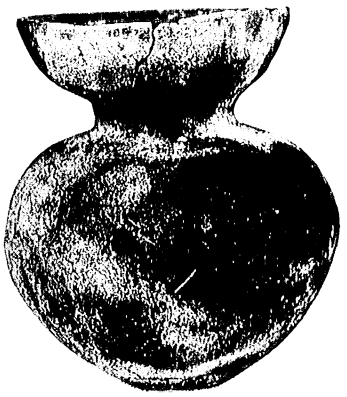
6-2

23-5

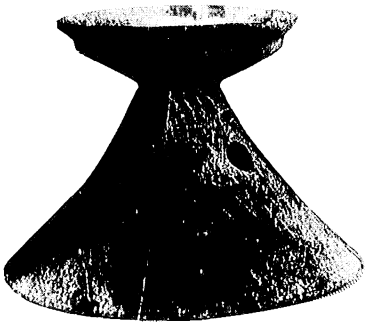


23-4

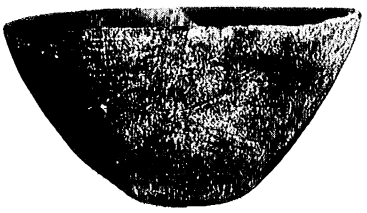
63-1



63-2

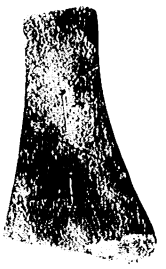


63-4

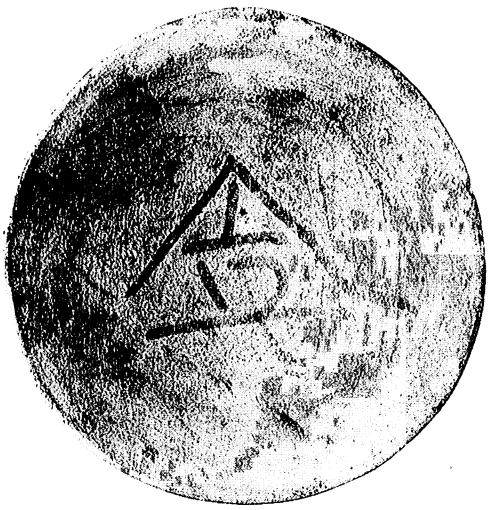


63-6

63-5



65-2

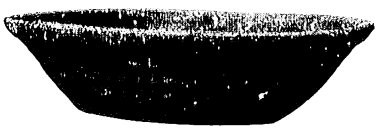


63-6

68-2

68-3

68-5



68-1

68-4

71-4

71-3

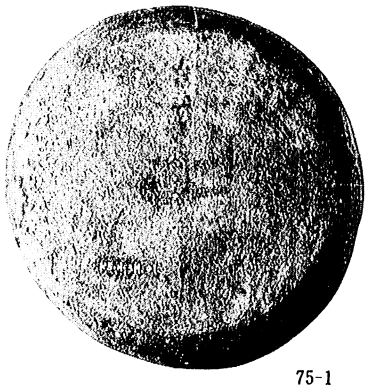
71-1

71-2

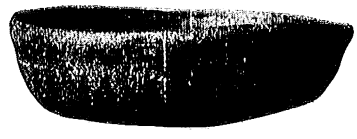
74-1

75-3

75-2

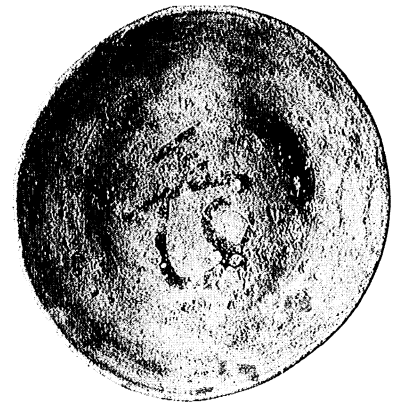


75-1

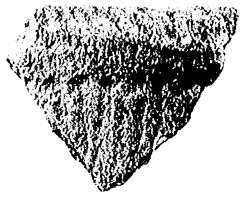


75-1

77-1



75-1



粕川村文化財報告第５集

西原古墳群 K5

――粕川工業団地造成に係る埋蔵文化財調査報告――

印　刷　昭和60年３月25日
発　行　昭和60年３月31日

編集
発行　粕川村教育委員会

群馬県勢多郡粕川村西田面 194―４

印刷者　ほおずき書籍株式会社